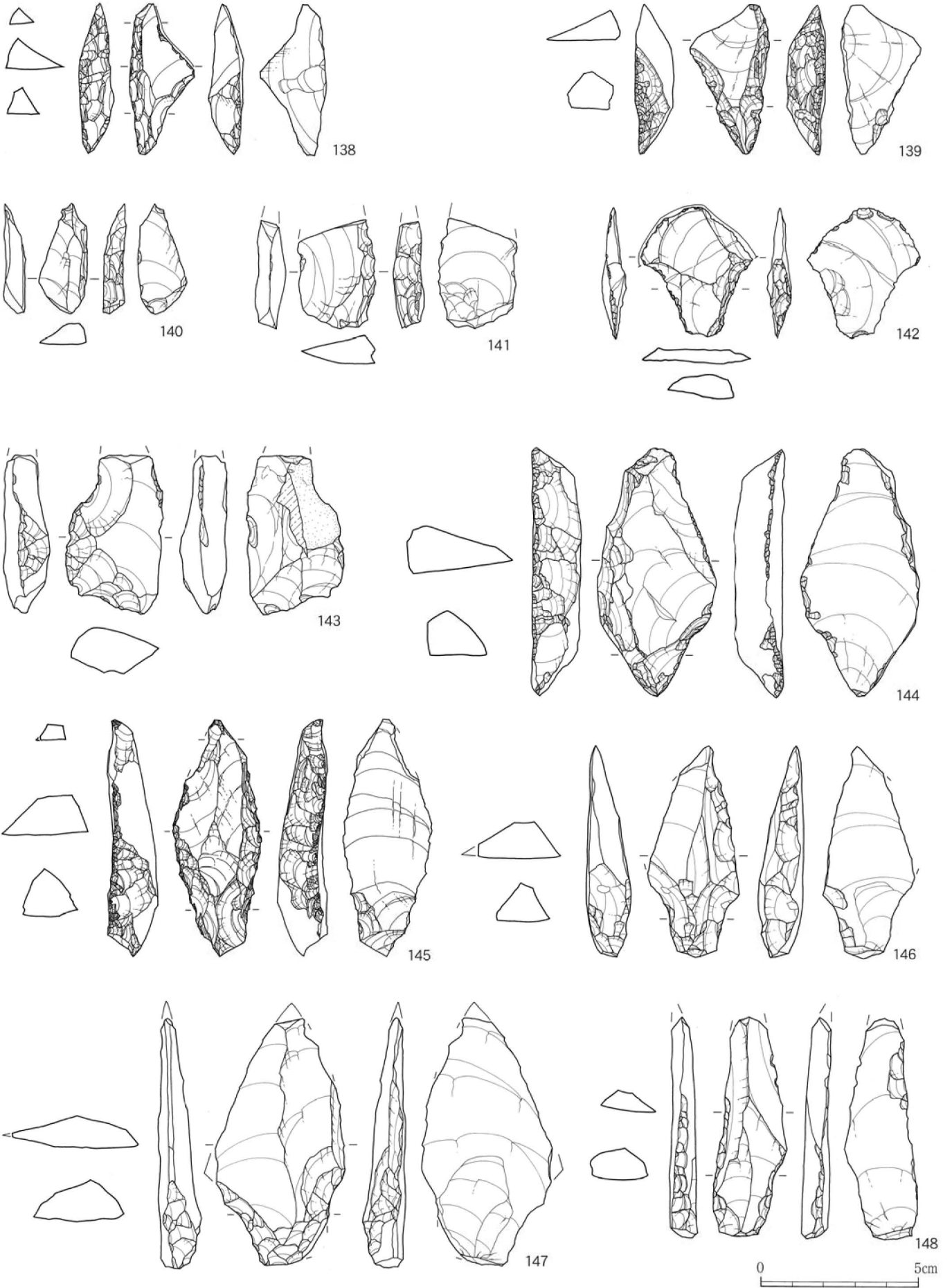
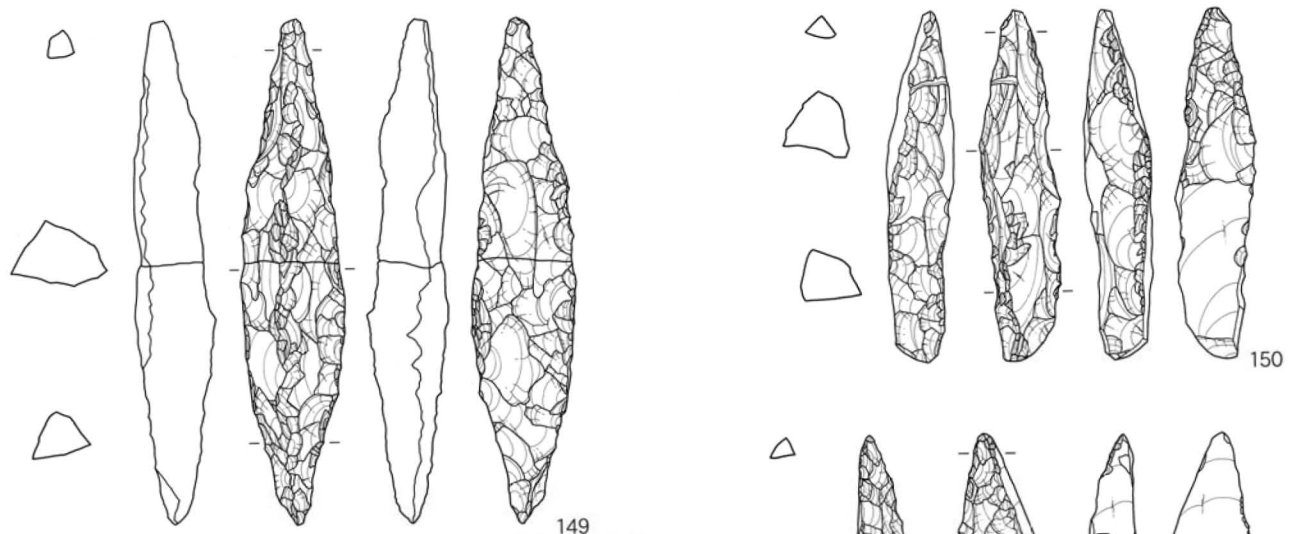


第II文化層

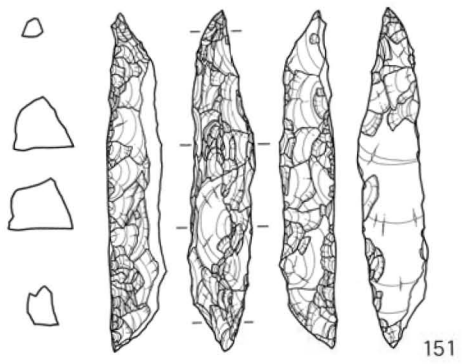


第41图 C·D区出土石器实测图3 (S=3/5)

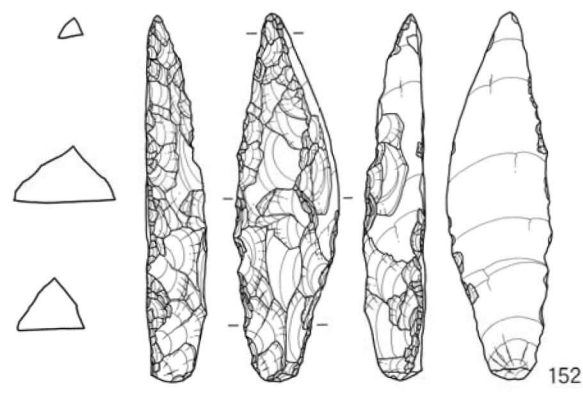


149  
(接合資料 1)

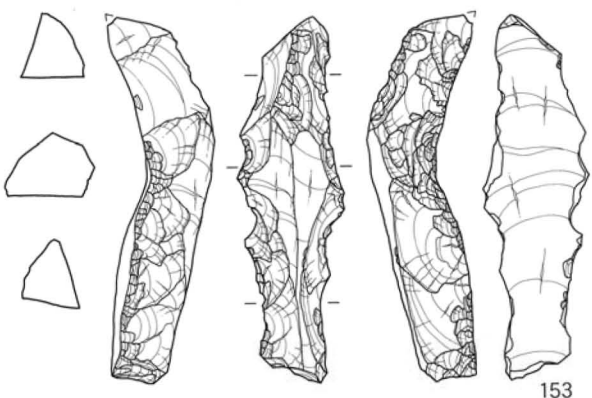
150



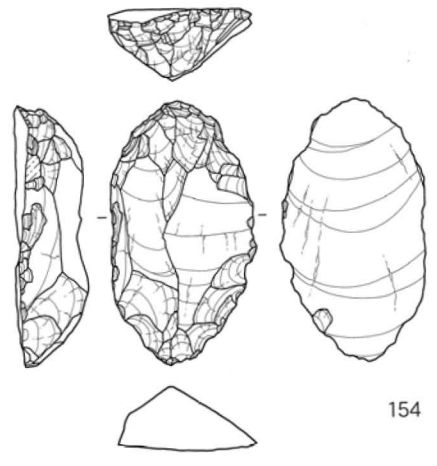
151



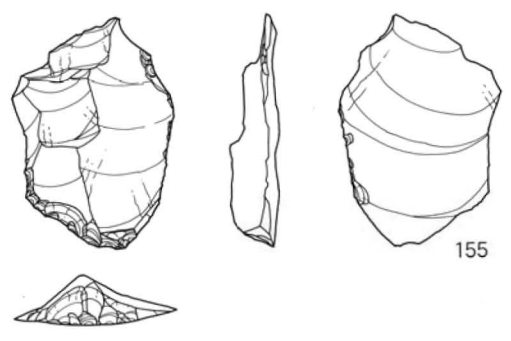
152



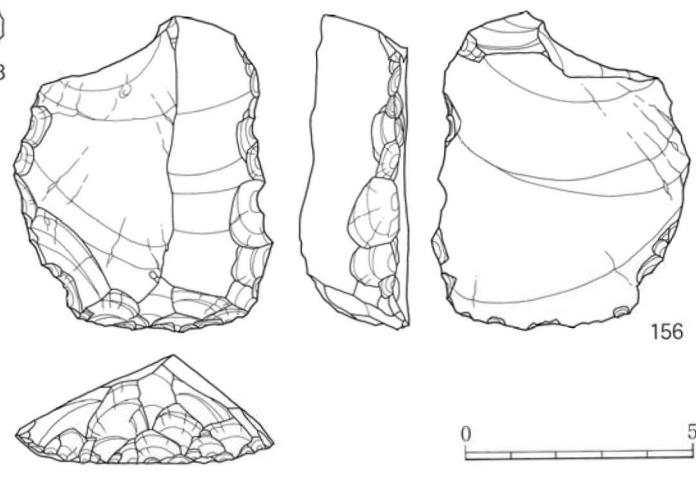
153



154



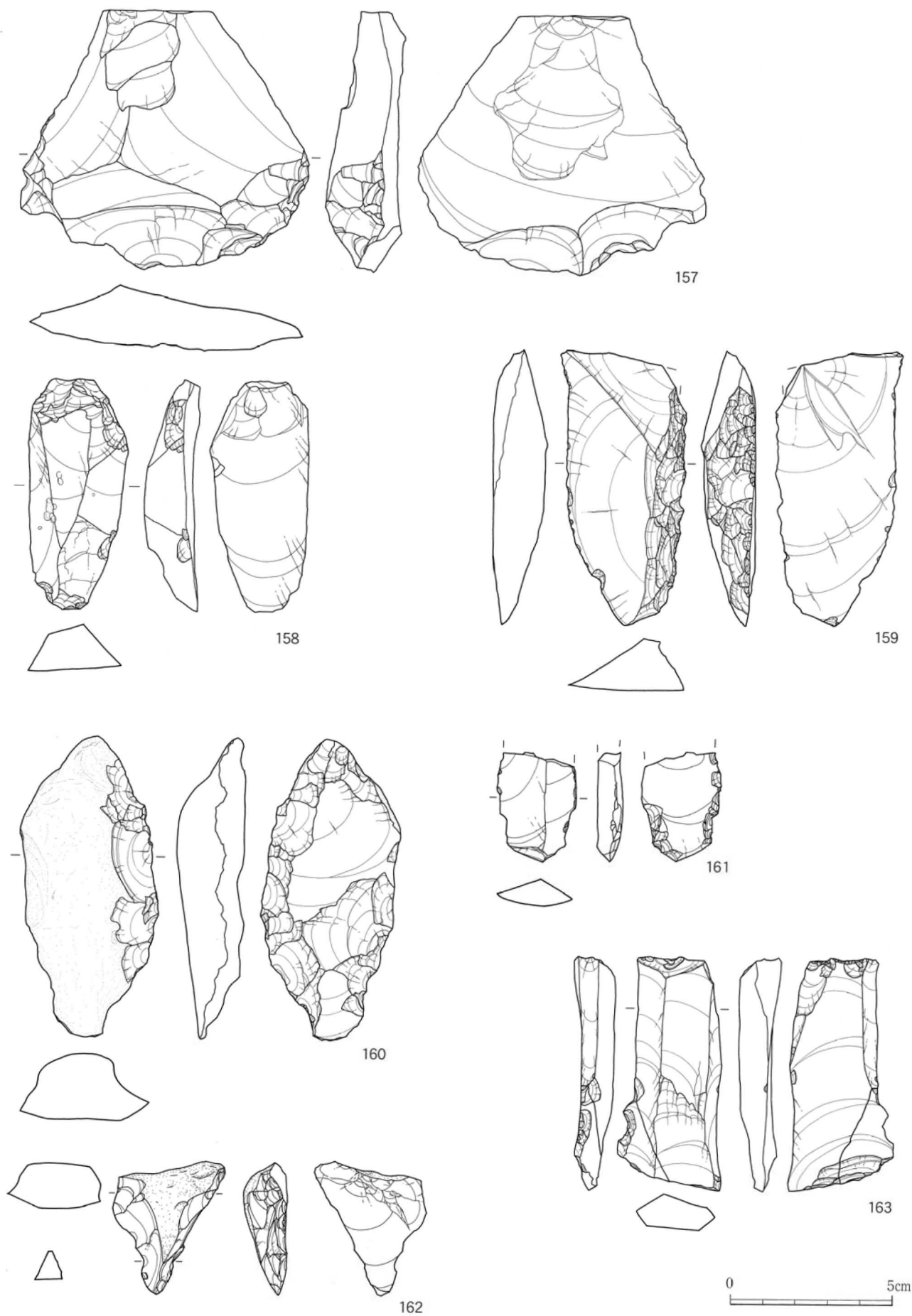
155



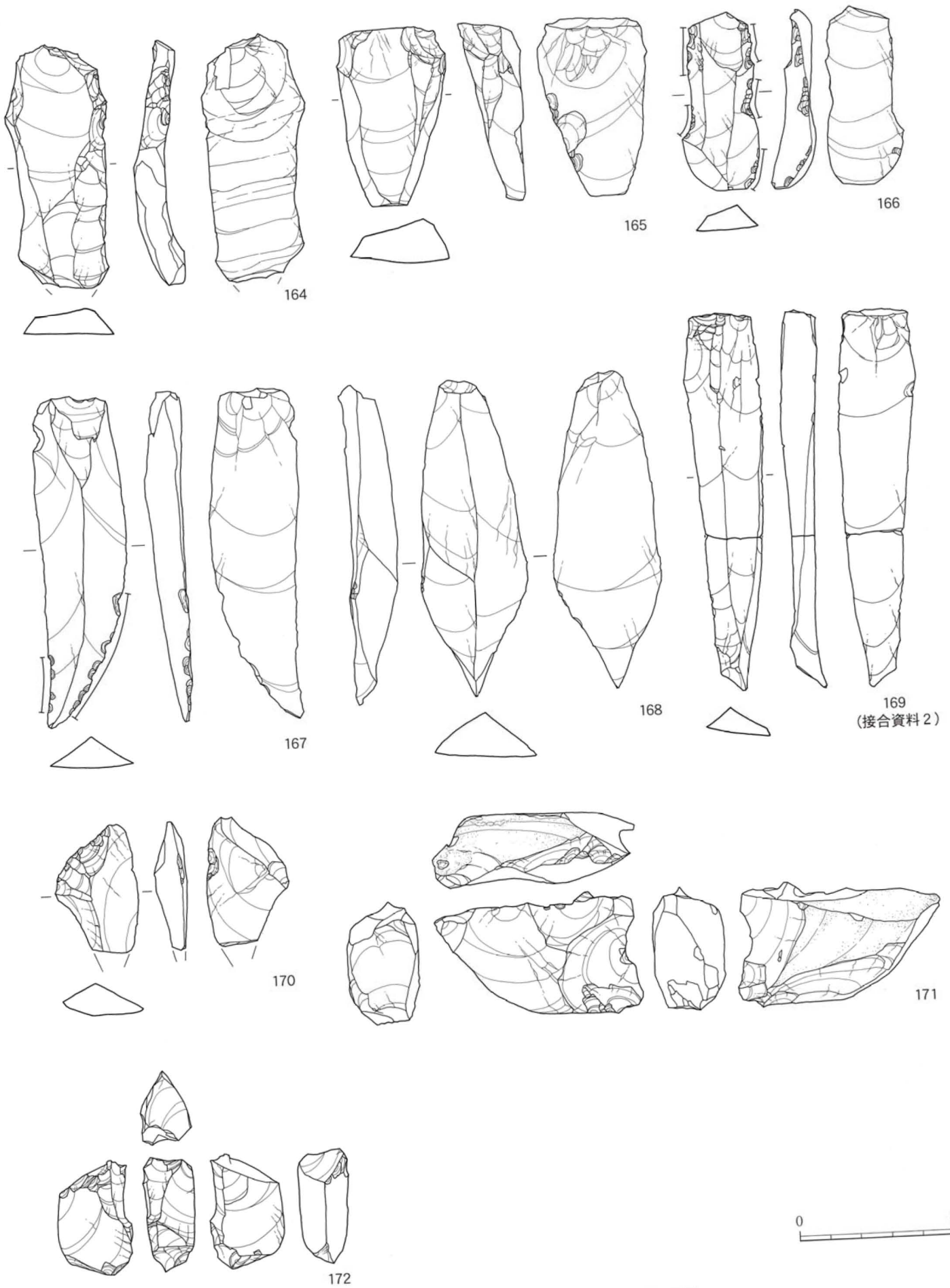
156



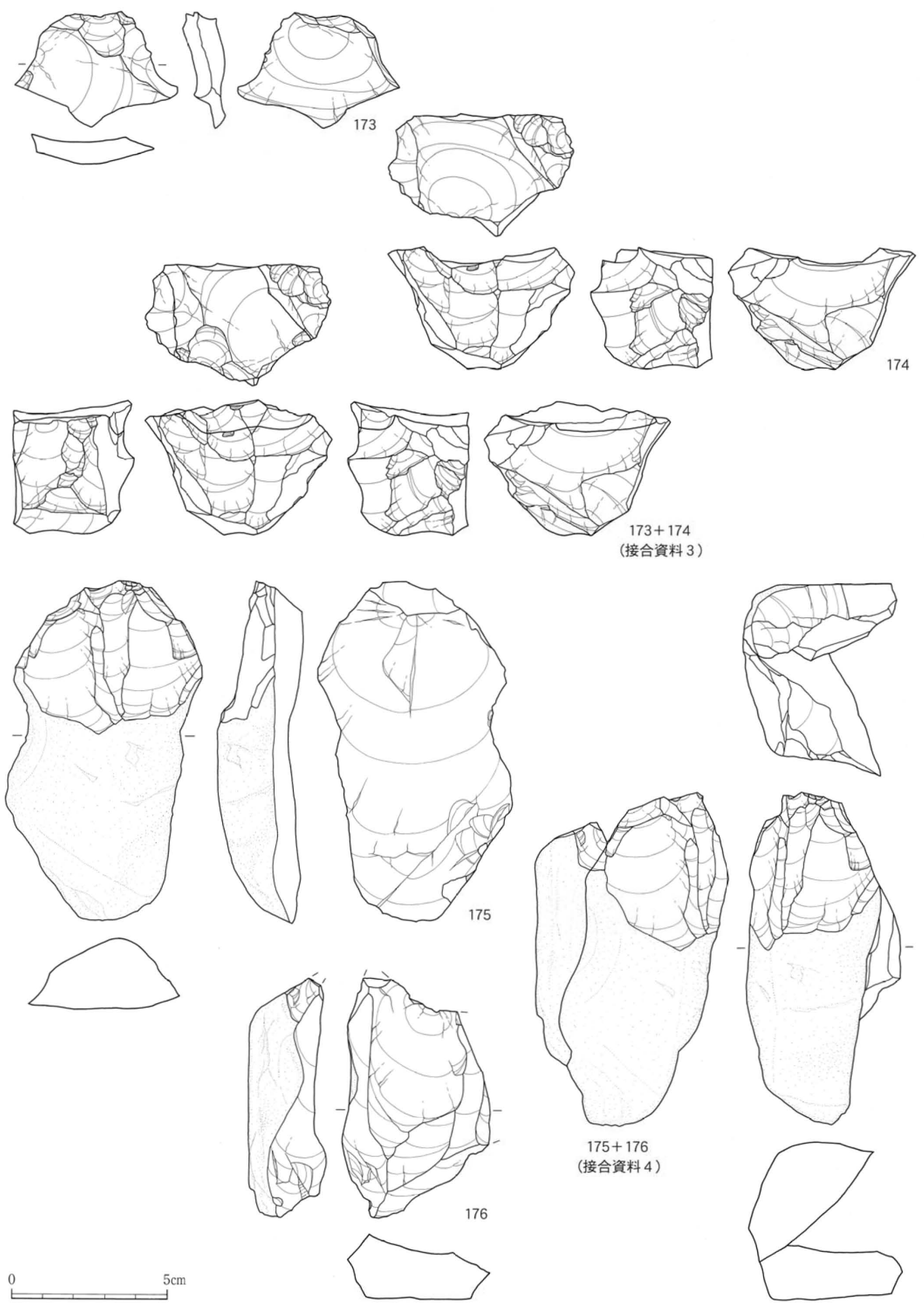
第42図 C・D区出土石器実測図4 (S=3/5)



第43图 C·D区出土石器实测图5 (S=3/5)



第44图 C·D区出土石器实测图6 (S=3/5)



第45図 C・D区出土石器実測図7 (S=3/5)

片を連続的に剥離し、打面を後退させて175を剥出している。その後も打面を左右にずらしながら、後退させ、剥片剥離作業を行っている。

## 流紋岩Ⅱ（第46図～第54図、第15表・第16表）

剥離面は主に灰色を成し、残存する礫面については灰白色～黄灰色を呈する。剥離面はややざらつくものが多い。なかには剥離面に白色の雲状風化が入るものや白色や暗灰色等の筋が幾条か入るものも認められる。

石器は総数278点出土しており、そのうち約45%はC1区で出土しており、ブロック2の中央付近やブロック3で集中して確認されている。他は比較的まばらに確認されており、やその内訳はナイフ形石器3点、台形石器1点、剥片尖頭器3点、角錐状石器1点、スクレイパー17点、石錐1点、彫器1点、二次加工剥片8点、微細剥離を有する剥片7点、剥片216点、碎片1点、石核28点であり、また接合資料は16例確認されている。

177～180はナイフ形石器である。そのうち177は素材に一定方向から連続的に剥離された縦長剥片を素材にしている。背面構成に特徴があり、稜を挟んで右側のものは、ポジ面の可能性が高い。打面を基部側に置き、主要剥離面側から左側縁全体に二次加工が施されている。また右側縁については基部側約1/3に挟入状の二次加工が行われ、さらに基部には裏面加工が認められる。178は打面転移を行いながら剥離された斜軸状の剥片を素材に、打面を基部側に置いて、両側縁に二次加工を行い、基部を作り上げている。主要剥離面の右側には裏面加工が施されている。179は基部を欠損しているが、縦長剥片を素材に主に主要剥離面より右側縁に加工が施されて、先端部等、一部に対向調整が認められる。180は一定方向から連続的に剥離された縦長剥片を素材にしている。打面側を基部に設定し、基部側の両側縁に二次加工が行われている。左側縁の加工は中央の稜付近まで剥離が及ぶのに対し、右側縁のものは細かな調整で基部を整えている。

181は台形石器である。幅広の剥片を横位に置き、主要剥離面より、打面部および末端部に加工が施されている。なお刃部には微細な剥離痕が認められる。

182は剥片尖頭器である。一部を除き、二次加工が全体に及んでいる。また打面付近では、挟入状の加工を施すことによって基部を作り上げている。

183・184はラウンドスクレイパーである。どちらも礫面を有する厚みのある剥片を利用しており、そのうち183は左側縁から下方にかけて主要剥離面から二次加工を行い、右側縁から上方にかけては表面から加工を施し、刃部を作出している。183はダブルコーンを有し、打瘤が発達している部分に平坦剥離を行った後、主要剥離面側から加工を行っている。

185はエンドスクレイパーである。一部に礫面を有する厚みのある幅広剥片を素材に、主要剥離面から末端部に加工を行い、刃部を作出している。

186～188はサイドスクレイパーである。186・187はおそらく平坦打面から一定方向に剥離された縦長剥片を素材にしている。また188は打面を欠損しているが、他のものと同様と考えられる。186は主要剥離面より右側縁のほぼ全体に二次加工を施し、刃部を形成している。末端部は欠損している。187も下部を欠損しているが、左側縁下半及び右側縁全体に挟入状の加工を幾つも行き、鋸歯状に仕上げている。188は石核剥出時に左側縁を垂直割れで欠損している。右側縁の打面側約2/3に二次加工を行っ

ている。

189は石錐である。打面転移を行いながら剥出された斜軸剥片を素材に打面と左側縁の境界を器軸になるように傾け、主要剥離面から二次加工を行い、断面三角形の錐部を形成している。なお、先端部は欠損している。

190～193は微細な剥離痕を有する剥片である。190は剥片素材の石核から剥出された剥片で、表面の大半がポジ面で構成されている。微細な剥離痕は両側縁に認められる。191は末端部が肥厚する縦長剥片で、左側縁下半に微細剥離痕を有する。192は上下に打面を有する石核から剥出された縦長剥片で、右側縁に部分的に微細剥離が認められる。なお、主要剥離面の末端には剥離痕が認められるが、剥出時に偶発的に剥離したものと考えられる。193は平坦な打面から連続して剥出された縦長剥片で左側縁の約2/3と右側縁の一部に微細な剥離痕が認められる。

194・195は剥片である。そのうち194は厚みのある幅広の剥片で、主要剥離面末端部はヒンジ・フラクチャーを呈する。195は単剥離打面から剥出された縦長剥片で、全体形が木の葉状を呈する。

196～201は石核である。196は剥片を素材に、礫面を打面に設定し、小口部分より、そのまま剥片剥離を行っている。197は剥片素材の石核である。剥片の主要剥離面を打面にして、側面で剥片剥離を行っているが、主要剥離面側にも求心状の剥離痕が認められる。剥離面の状態から打面と作業面を入れ替えながら交互剥離を行ったものと考えられる。198は厚みのある幅広剥片を素材に、両側面を打面に設定し、主要剥離面を作業面として、横長～幅広の剥片を剥出している。199・200は頻繁に打面を転移させながら、剥片剥離を行っている。そのうち200は多面体を呈しており、横長～幅広の剥片を剥出している。201は剥片素材の石核で、打面側を作業面として、表面より剥片剥離を行っている。表面中央には打面調整が認められる。

接合資料5は、剥片(202)と石核(203)の接合例である。202はC・6グリッド内、203はブロック3中央付近(E・5グリッド)で出土しており、約20m離れて接合している。礫を分割して打面を作出し、打面から数回にわたり、分割を実施している。剥離作業は左側面から実施し、2枚の剥片を剥離後、202を剥出している。その後も同打面から剥離作業を行っているが、ヒンジ・フラクチャーが多発し、思うような縦長剥片が作出できていない。また基本的には平坦打面から剥離作業が行われているが、左側面側では打面調整が認められる。

接合資料6は、剥片6点(204～209)と石核1点(210)の接合例である。207・210以外はC1区内ブロック3でまとまって出土し、207は約17.5m離れた同区C・4グリッド、210は約44m離れたD1区D・9グリッドで確認されている。おそらく作業をブロック3で行った後、石核を持ち出したものと考えられる。礫を分割後、その面を打面に設定し、○→204→205と連続して剥離作業を行う。その後、左側面で接合している207と210の境界から206の打面を結ぶラインで分割が行われ、206・208～210を含む個体Aと207を含む個体Bとに分かれる。個体Aはその分割面を打面にして剥離作業を再開し、206はじめ、数枚の剥片が剥出されている。再度打面を元の面に入れ替え、剥離作業を続け、209剥離以前には少なくとも、2枚以上は剥片が剥出されているようである。さらに208や209をはじめ、数枚の剥離を行った後、打面を後方の礫面に移し、左側面で剥離作業を行っている。最終的には礫面に打面調整を加えたのみで作業を終えている。

接合資料7は、剥片(211)と石核(212)の接合例である。211は打面が欠損しているが、おそらく

同一の打面から剥出されており、打点を左から右にずらしながら、連続的に○→211→○→212と剥出している。そのうち212は表面に残された剥離面を打面にして、幅広の剥片を剥離している。

接合資料8は、剥片2点(213・214)と二次加工剥片1点(215)の接合例である。213はC3区J・9グリッド、214はC2区H・8グリッド、215はC1区ブロック3(E・5グリッド)でそれぞれ確認されており、213と214の距離は約15m、214と215は約48.4mである。分割時に213・214を保有する厚みのある個体Aと215を有する個体Bに分かれ、そのうち個体Aは、右側面の下部に打面を作出し、礫面と主要剥離面が接する稜を取り込んだ剥片を剥離している。打面を礫面に移して213を剥出した後は、打面転移を行いながら、剥離作業を行い、再び元の打面に戻して、214を剥離している。214は剥出後、左側縁下部に粗い二次加工を施している。一方、個体Bでは215の下部礫面から剥片を剥離した後、分割時の打面にもどして、○→215と剥出している。

接合資料9は、剥片(216)と石核(217)の接合例である。厚みのある剥片を素材に左側縁から末端部にかけて打面調整を行い、主要剥離面を作業面にして剥片剥離を行っている。216剥離以前には横長の剥片を剥出しており、その部分には再度、打面調整が加えられている。いずれもブロック2内出土である。

接合資料10は、剥片(218)と石核(219)の接合例である。打面転移を行いながら、剥片剥離を行っており、作業面の進行が著しい。右側面で剥離作業を行った後、正面に作業面を移し、218を剥出している。また左側面の剥離面については、右側面のものと接しないため、前後関係が不明である。ただし、裏面や上面で作業を行う時点では、すでにこの面が剥離されていたものと考えられる。最終的には、正面に作業面を戻し、剥離作業を行っている。いずれもブロック6内出土である。

### 流紋岩Ⅲ(第54図～第56図、第16表)

礫面及び剥離面に白色の雲状風化が著しく発達しているものを一括した。石器は15点出土し、その内訳はナイフ形石器1点、二次加工剥片1点、剥片10点、石核3点である。その分布はC1区D・7グリッドを中心に約25mの範囲内でまばらに出土している。接合資料は2例確認されている。

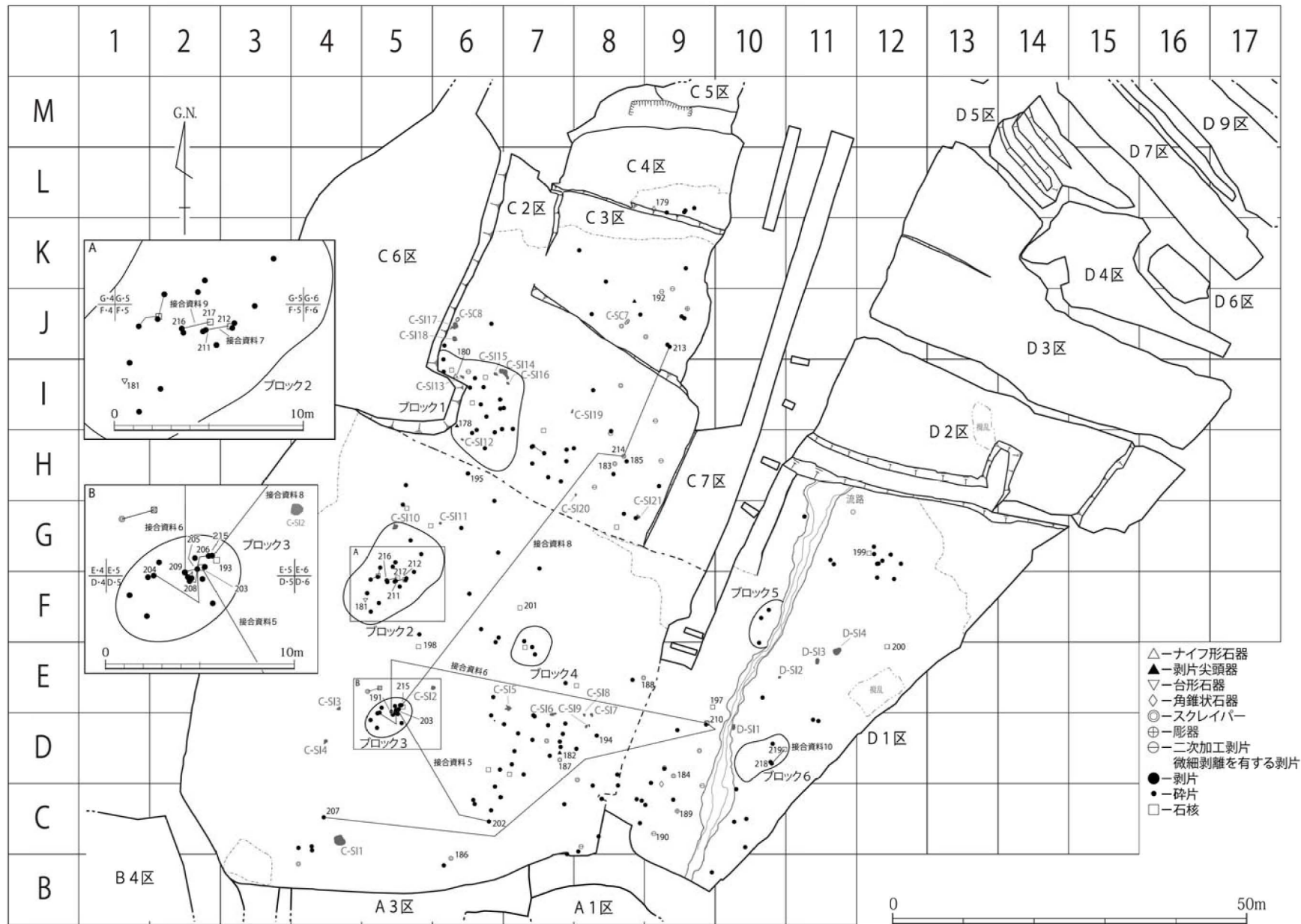
220～222は同一母岩の資料である。そのうち220はナイフ形石器である。打面を転移させながら求心状に剥離された縦長剥片を素材に打面を基部側に据えて、左側縁のほぼ全体に二次加工を行っている。また右側縁には中央付近で若干の加工が認められる。先端部は欠損している。

221・222は石核である。そのうち221は頻繁に打面を転移させながら剥片剥離を行っている。剥出された剥片は縦長剥片～横長の剥片があり、統一性がない。222は求心状に剥片剥離が行われている。

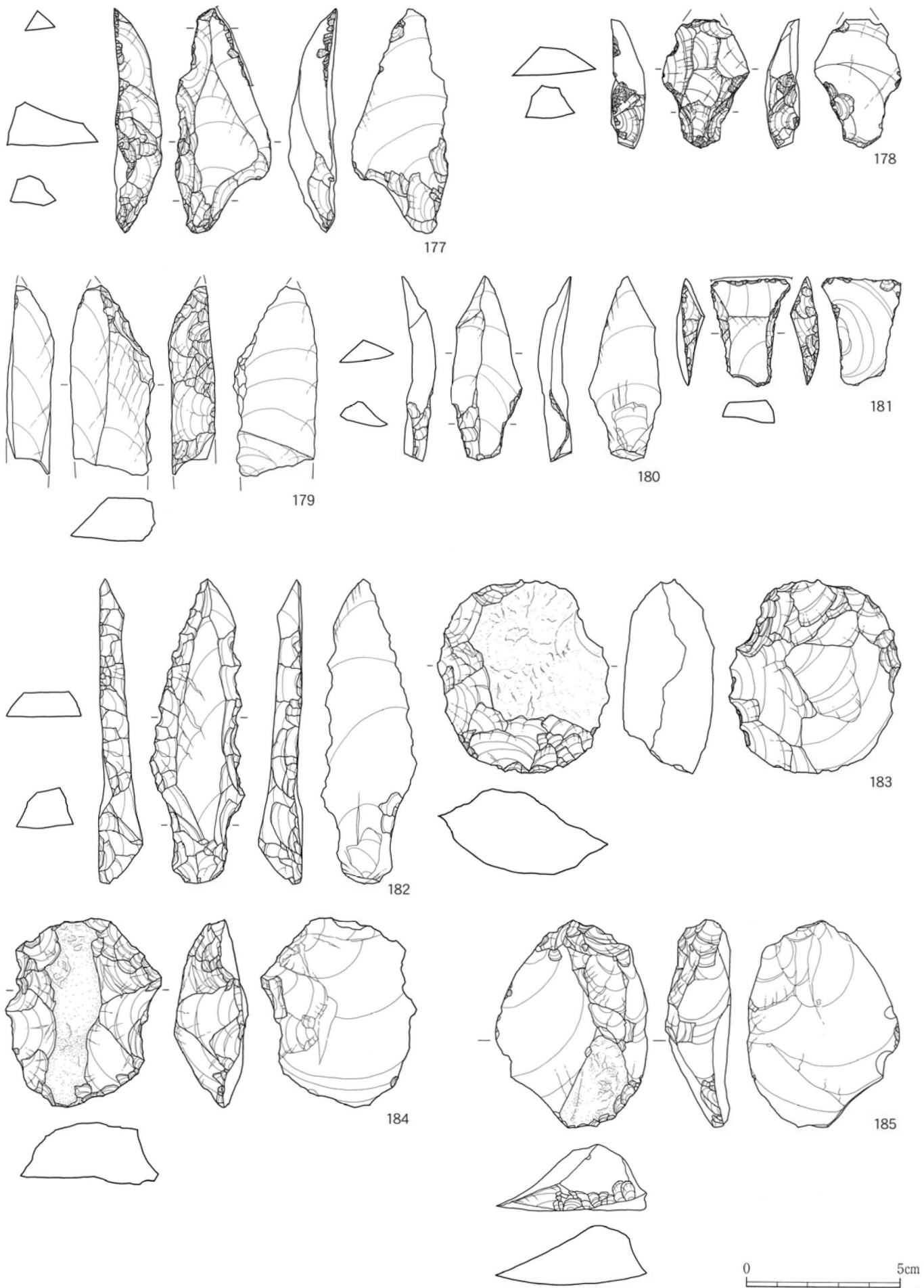
接合資料11は剥片(223)と石核(224)の接合例である。原礫から223を含む個体Aと224を含む個体Bとに分割し、そのうち個体Aでは分割面を作業面にして剥離作業が行われ、比較的早い段階で223を剥離している。また個体Bでは分割面を打面に用い、そこから剥片剥離作業を行っている。なお、左側面に認められる大きな剥離痕は、アクシデントによるものと考えられる。

接合資料12は剥片同士(225、226)の接合例で、両設打面石核から剥離された可能性が高い。礫面の平らな面を打面に設定し、そのままで点を後退させながら、連続して剥片2枚を剥出した後、225を剥離する。今度は、打面を180°転移して、礫面除去が行われた平坦面から礫面の稜を取り込むように、226を剥出している。

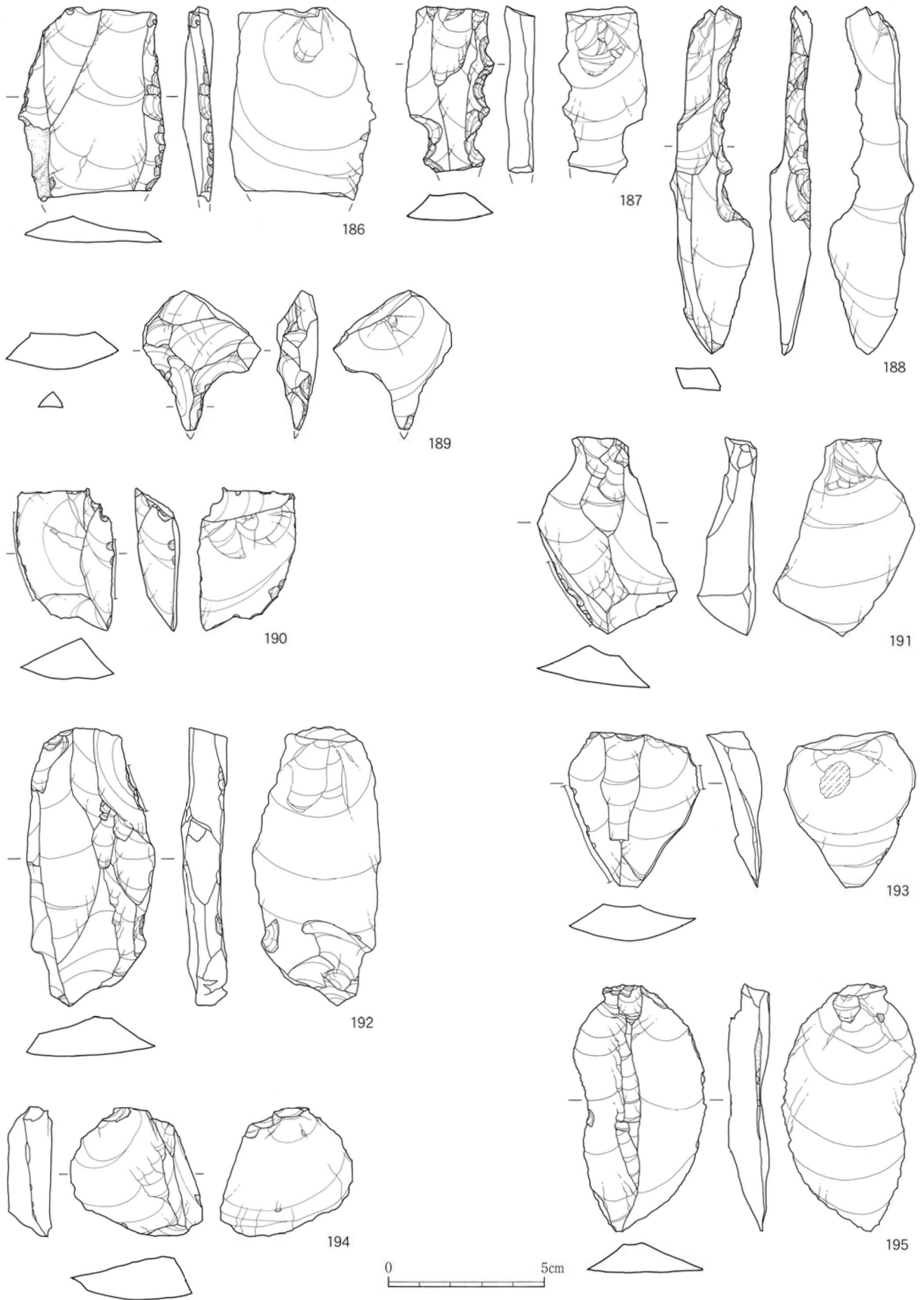




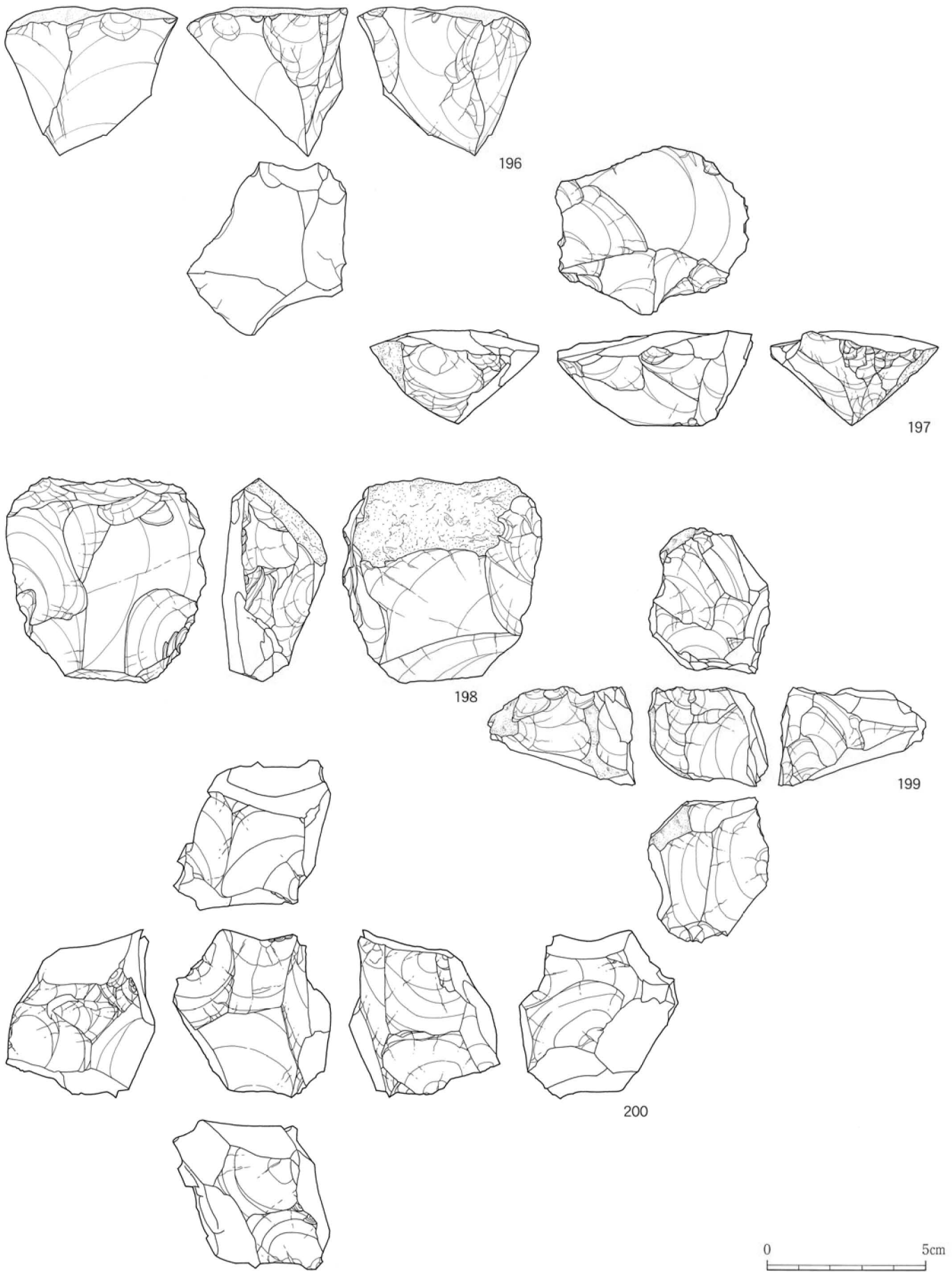
第46図 C・D区 第II文化層遺物分布図 [流紋岩II] (S=1/300, S=1/800)



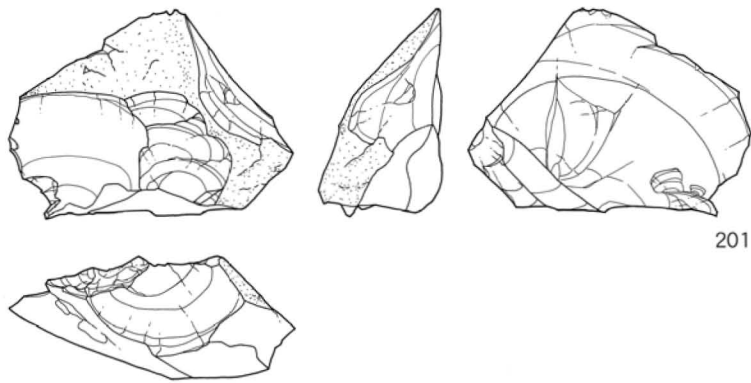
第47图 C·D区出土石器实测图8 (S=3/5)



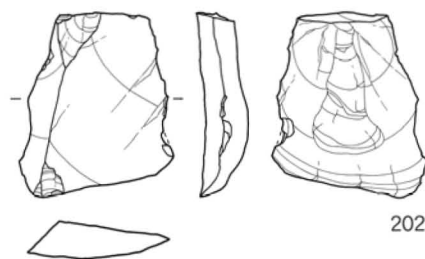
第48图 C·D区出土石器实测图9 (S=3/5)



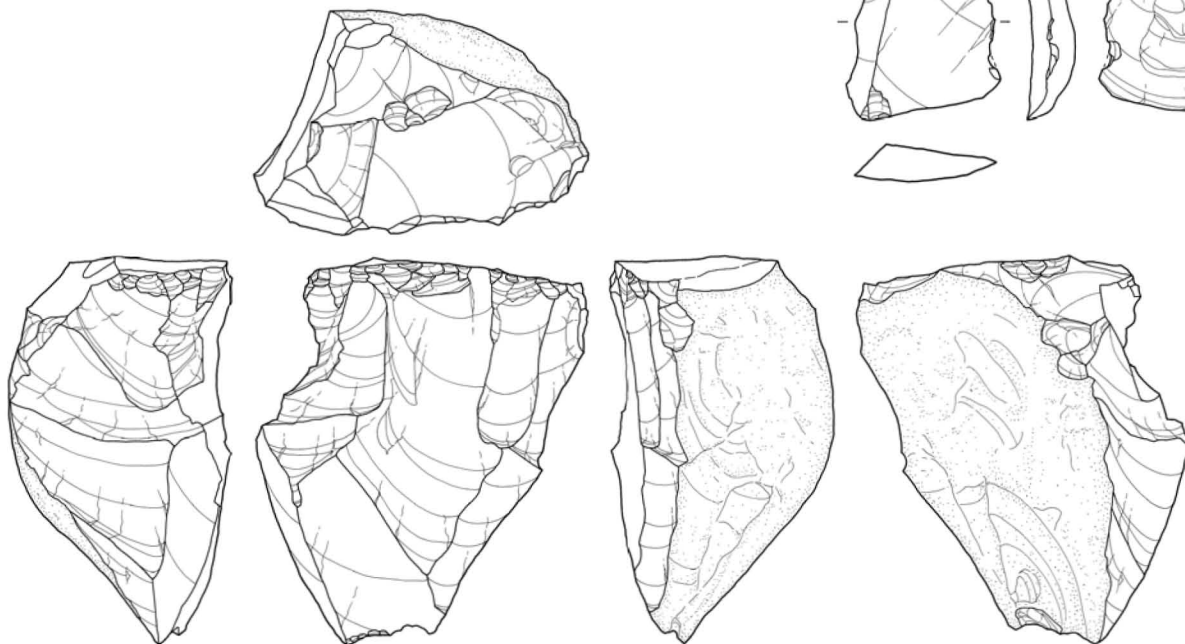
第49图 C·D区出土石器实测图10 (S=3/5)



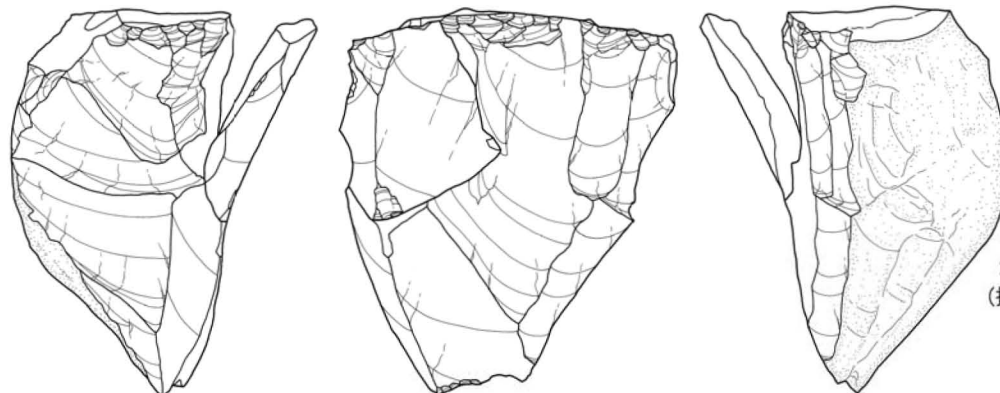
201



202



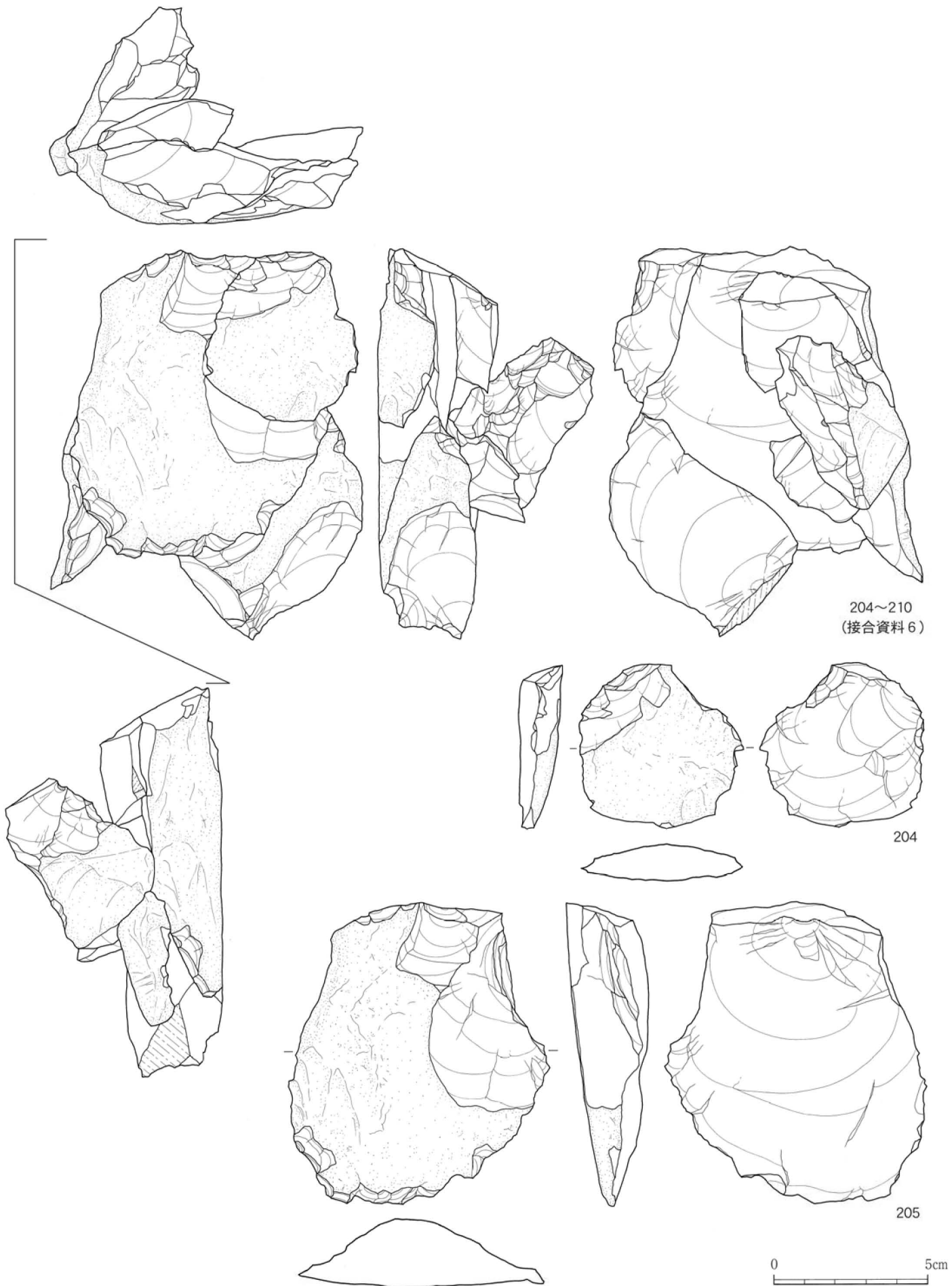
203



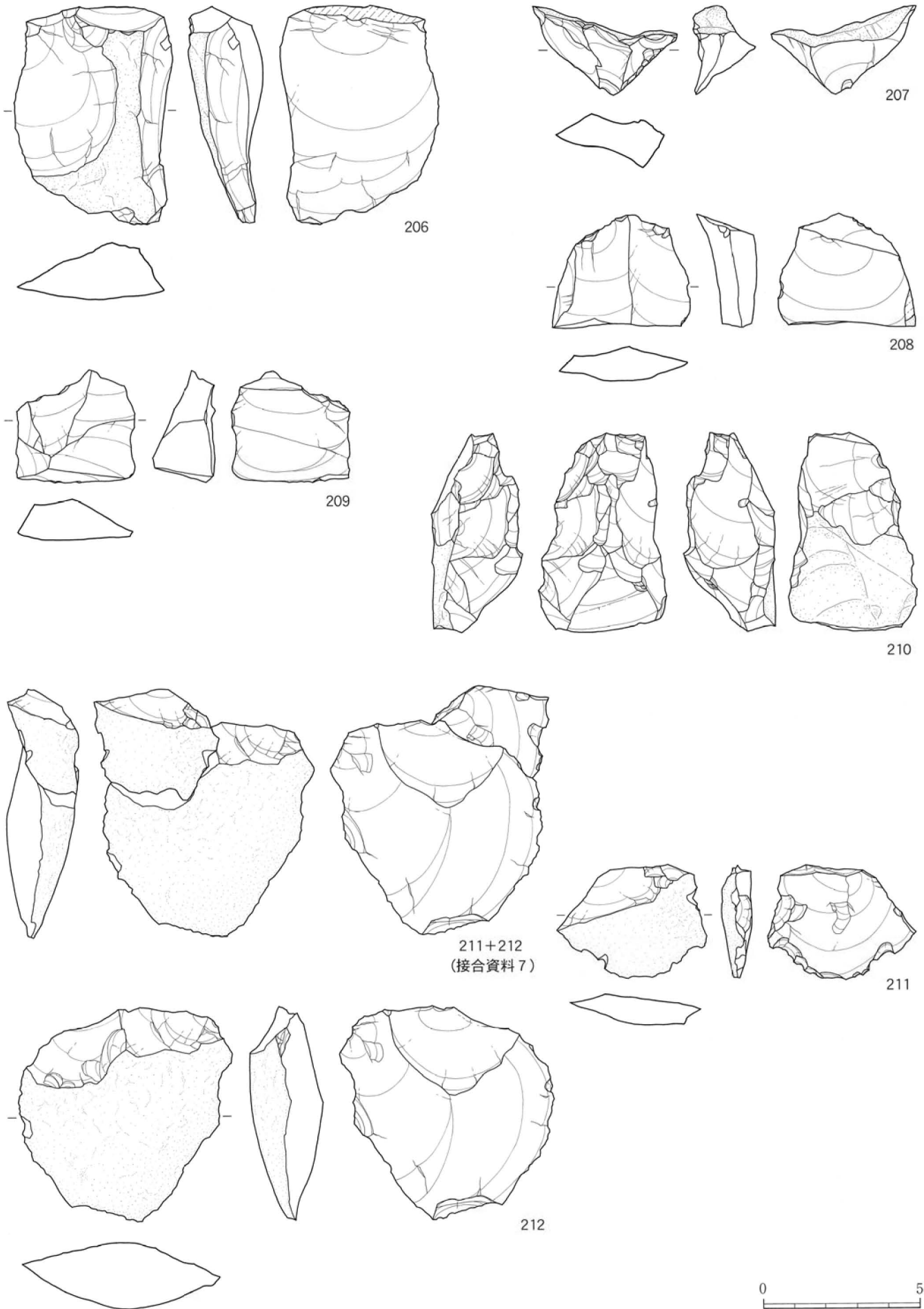
202+203  
(接合資料 5)



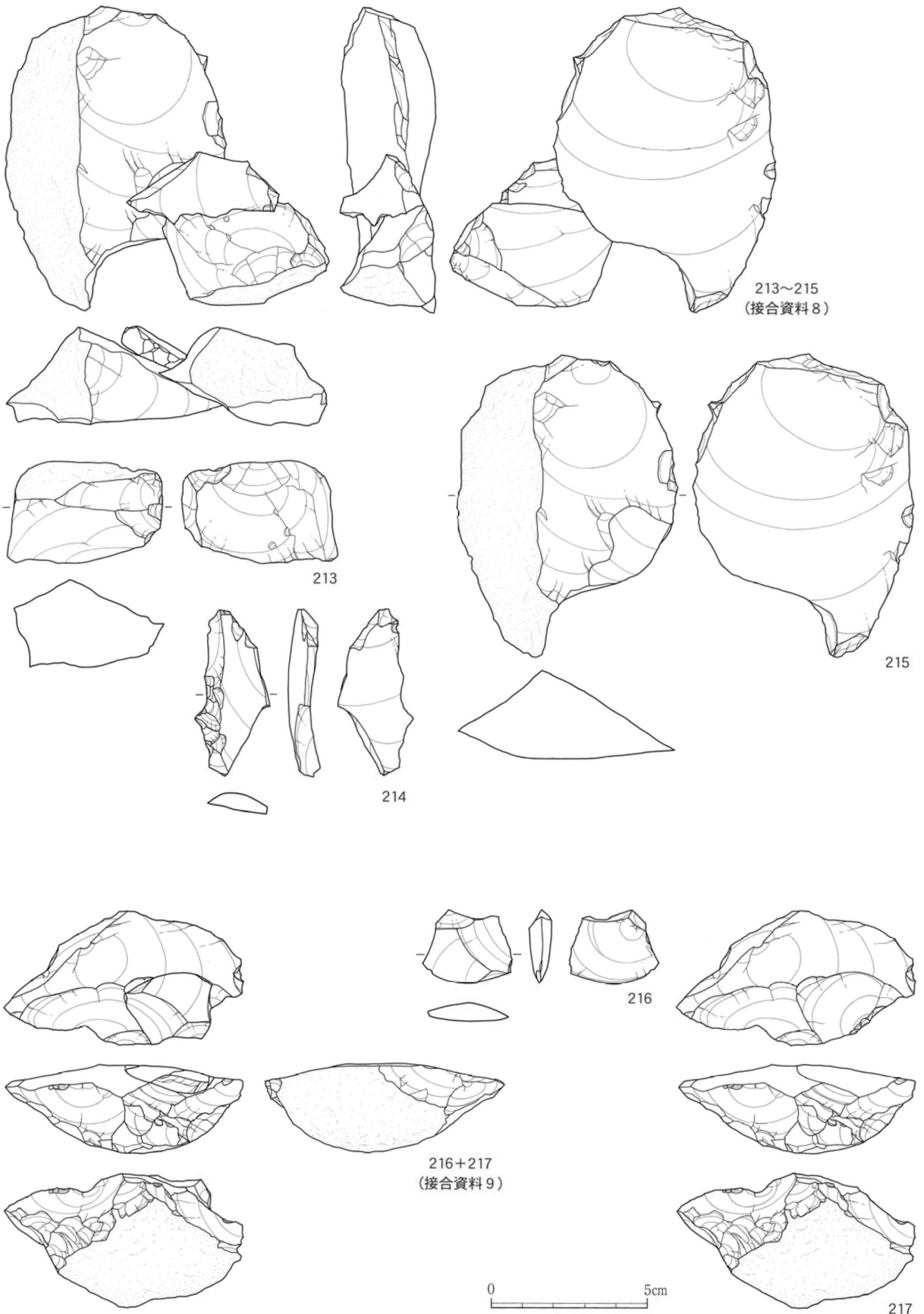
第50図 C・D区出土石器実測図11 (S=3/5)



第51図 C・D区出土石器実測図12 (S=3/5)



第52図 C・D区出土石器実測図13 (S=3/5)

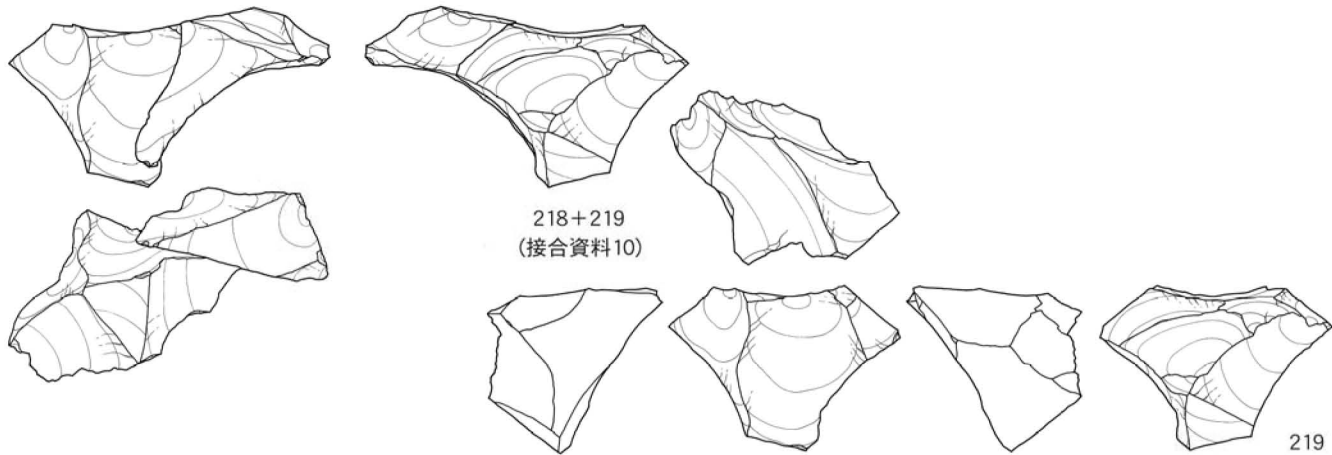


第53図 C・D区出土石器実測図14 (S=3/5)



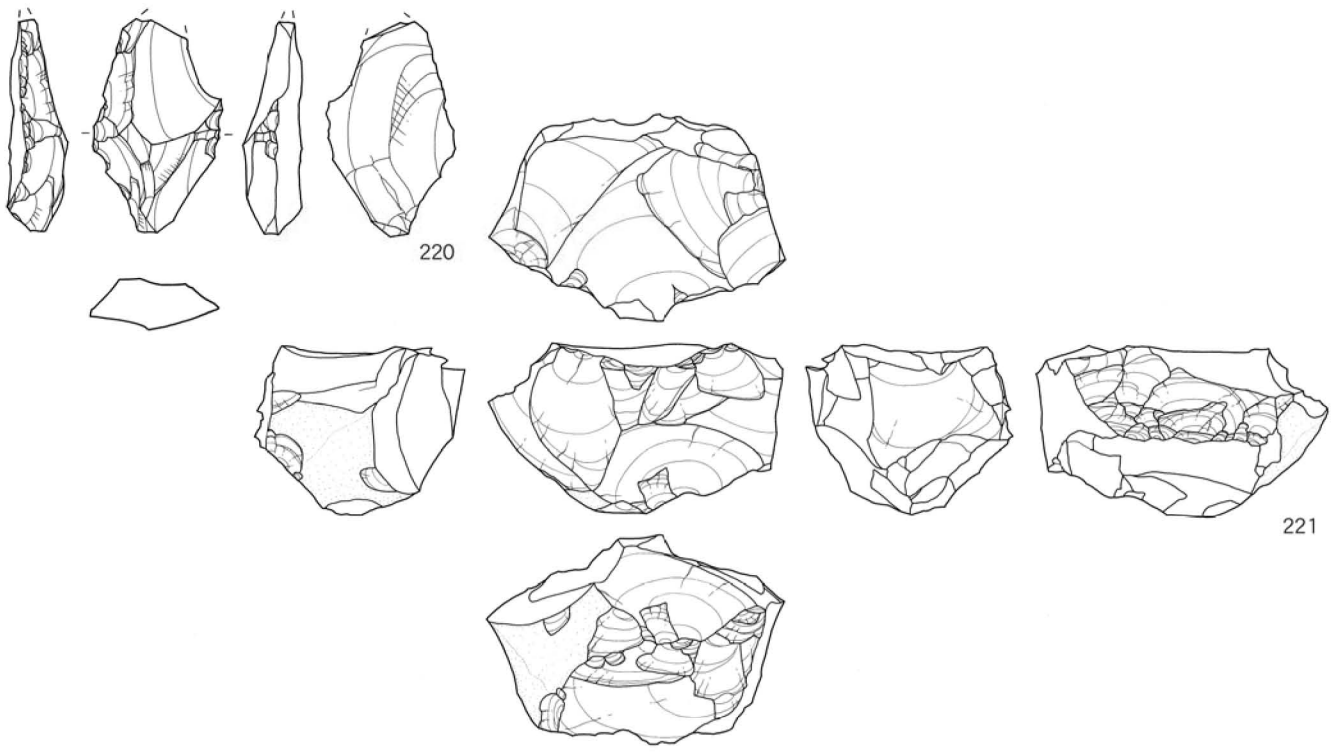


218



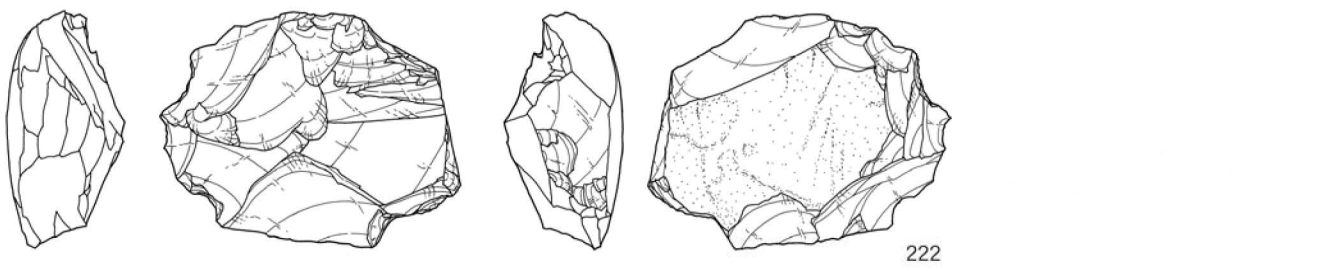
218+219  
(接合資料10)

219



220

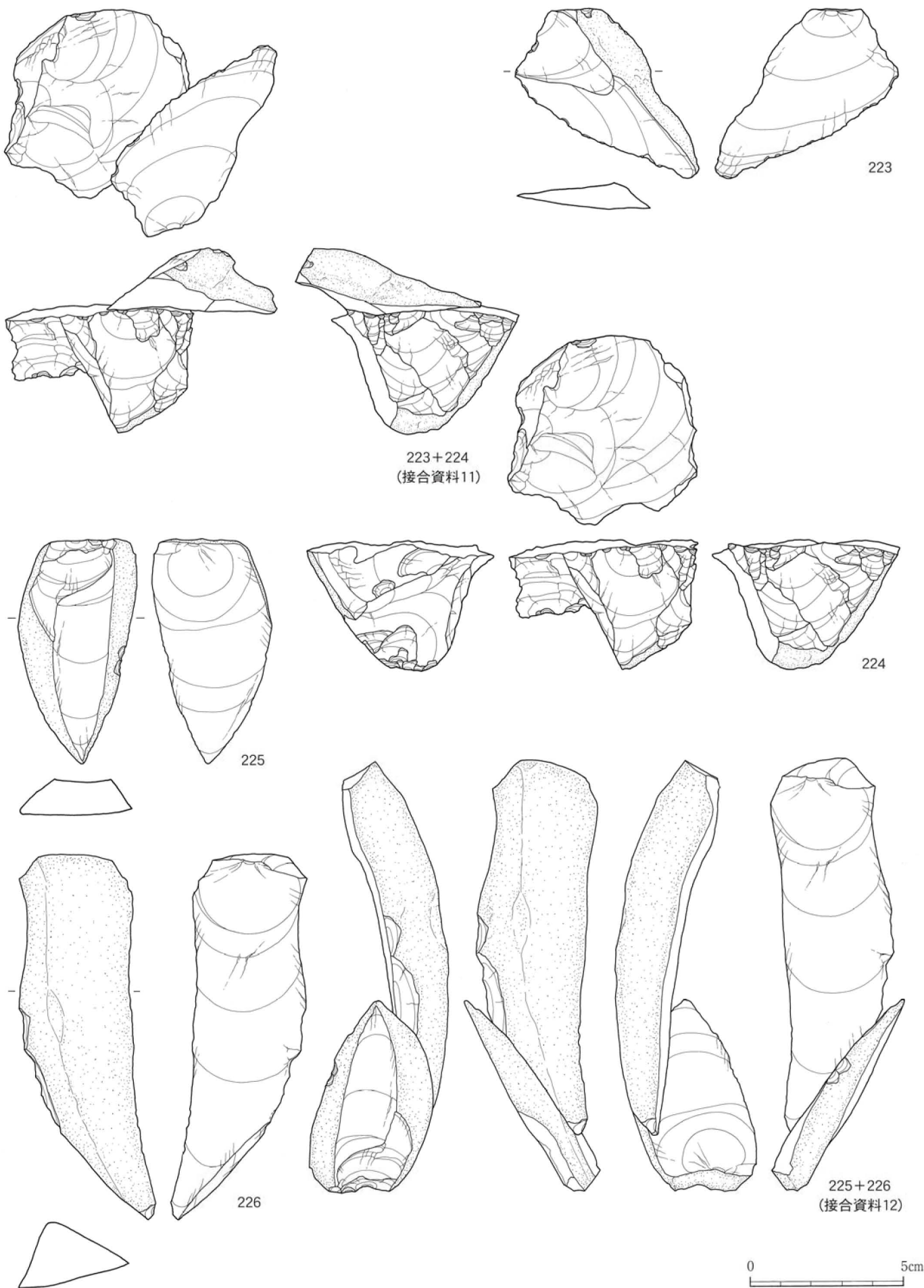
221



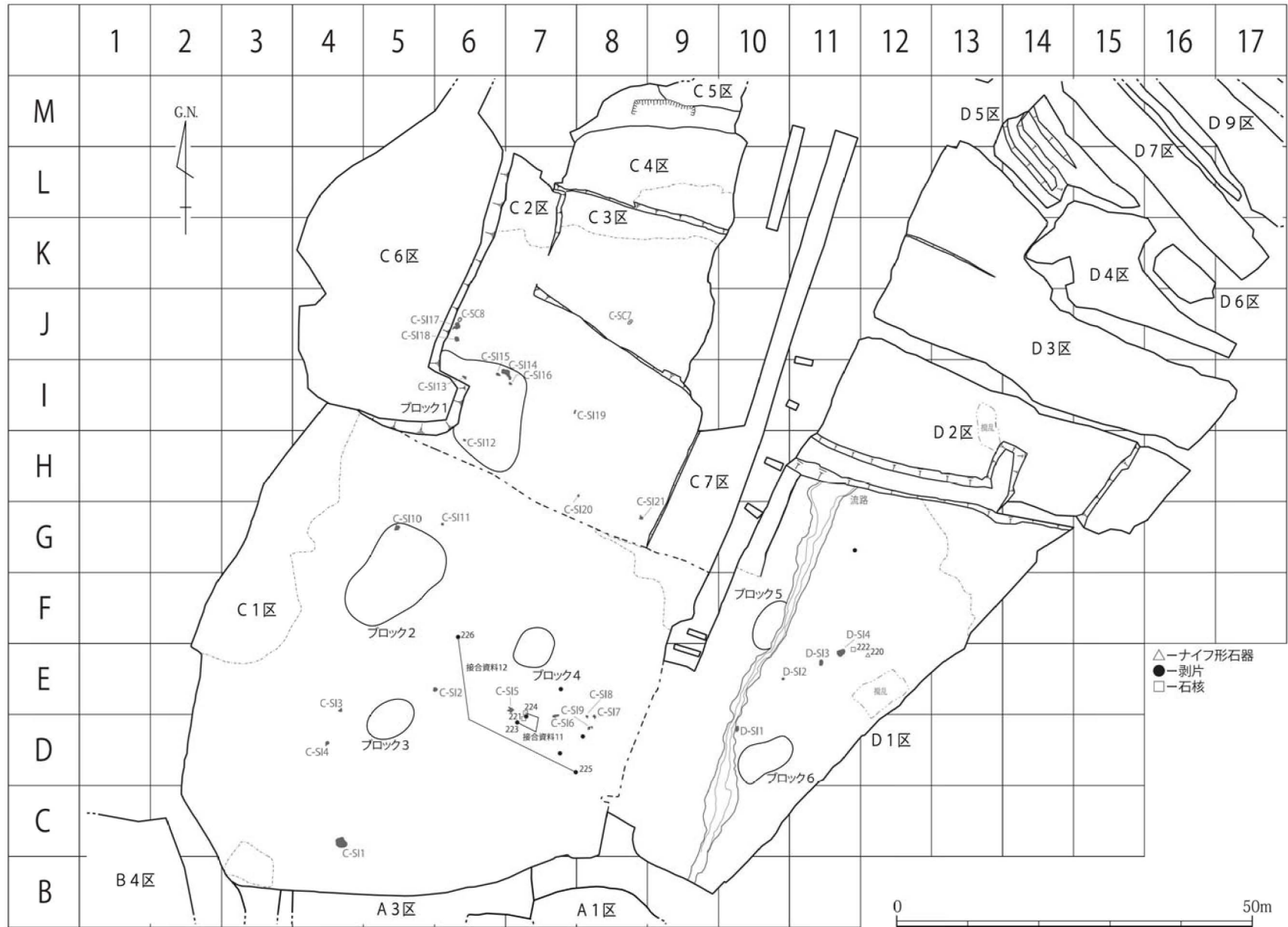
222



第54图 C·D区出土石器实测图15 (S=3/5)



第55図 C・D区出土石器実測図16 (S=3/5)



第56図 C・D区 第II文化層遺物分布図 [流紋岩Ⅲ] (S = 1 / 800)

#### 流紋岩Ⅳ類（第57図～第62図、第16表・第17表）

黒色～暗褐色を呈するものを一括した。暗灰色～灰白色の境が不明瞭な雲状風化が含まれるものや斑晶や気泡などが認められるもの等がある。

分布はC 1～C 2区、D 1区で分布し、ブロック 2 中央でまとまって確認されている以外は散発的である。石器は122点確認されている。内訳はナイフ形石器 3 点、剥片尖頭器 4 点、スクレイパー 8 点、二次加工剥片 3 点、微細剥離を有する剥片 5 点、剥片 87 点、石核 12 点であり、接合資料は 7 例確認されている。

227はナイフ形石器である。幅広の剥片を素材に主に主要剥離面から二次加工を施している。基部側になると稜上からの調整も加えられている。基部側が鋭く作り上げられているため、石錐の可能性もある。

228～230は剥片尖頭器である。228は打面を固定して剥離された縦長剥片を素材にし、先端部を除き、左側縁の殆どと、右側縁の約 1 / 3 に細かい二次加工を施している。先端部は欠損している。なお、右側縁の刃部中程には微細な剥離痕が認められる。229は表面左側に石核素材時のポジ面を有する。基部は入念に加工を行い、基部を作り上げているが、左側縁側が抉れるに対し、右側縁側は直線的である。また刃部は左側縁に微細な剥離痕が認められるのに対し、右側縁には表面から二次加工を入れている。230も表面右側についてはポジ面の可能性が高い。基部調整は細かな二次加工を行っているが、やや直線的である。

231はサイドスクレイパーである。元々は剥片素材の石核でポジ面の打面側に打面調整を加え、そこから横長剥片を作出しており、転用して末端側に連続した二次加工を施している。

232・233は石核である。そのうち、232は 5 cm 大の小振りな礫を素材にしており、上方を打面に設定して、打面調整を行いながら、正面と右側面を作業面にして剥片剥離作業を行っている。233（接合資料13）は分割した礫を素材に下方を打面に設定し、分割面側を作業面にして、剥離作業を行った後、上面に打面を転移させ、作業を続けているが、中央の幅広な縦長剥片を剥出した際に石核も 2 分割してしまっている（233a・233b）。その後、233aは横位に置き、打面を礫面に転移させ、横長の剥片を剥出している。

接合資料14・16は同一母岩のものである。そのうち、接合資料14は剥片同士（234・235）の接合例である。打面を転移させながら剥片剥離を行っており、234を剥離後、時計回りに打面を動かしながら作業を行い、235を剥出している。また、接合資料16は剥片 2 点（240・241）と石核 1 点（242）の接合例で、打面を転移させながら剥片剥離作業を行っている。礫を分割後、d 面の平坦な部分を打面にして作業を行う。その後、打面を分割面（a 面）に移して c 面で剥離を行い、242を剥離しているが、その際に垂直割れを起こしている。その後もこの面と新たに b 面にかけて作業が行われおり、b 面側の打面には打面調整が認められる。この後も 241を剥離して打面再生を行い、さらにその面での作業が進行する。最終的には作業面である c 面を打面に替えて、f 面での剥離作業を行っている。

接合資料15はサイドスクレイパー 1 点（237）と剥片 4 点（236・238～239）の接合例で、ブロック 2 の中央付近（F・5グリッド北西部）に分布する。これらは接合資料14と同様に、打面を転移させながら求心状に剥片剥離を行っている。この資料では打面調整も認められる。接合図でみていくと、下方から剥片剥離を行った後、左側に打面を移して作業を行い、その際に236を剥出している。その後、打

面を上方に移し、237→238→239と連続して剥片を剥離している。その後237は左側縁に二次加工を施し、刃部を作り出している。

接合資料17はエンドスクレイパー1点(243)と石核1点(244)の接合例である。礫を分割後、b面を打面に設定して、打点を縁周させながら剥片剥離を行い、その過程で243を剥出している。その後、打面をc面に移してd面で作業を行うが、殆ど剥片を作出されておらず、b面を作業面に移し、打点を移動させながら、求心状に剥片剥離を行っている。243は作出後、末端に主要剥離面側から二次加工を行い、刃部を作出している。

接合資料18は剥片1点(246)と石核1点(247)の接合例である。扁平な礫を素材にして、端部に数回の加撃を加えて打面を作出し、そこから246をはじめ、幅広の縦長剥片～横長の剥片を剥出している。

接合資料19は剥片1点(247)と石核1点(248)の接合例である。頻繁に打面転移を行いながら剥片剥離作業を行い、その過程で247を剥出している。247の剥離時には力が抜けきらずに末端部が湾曲している。

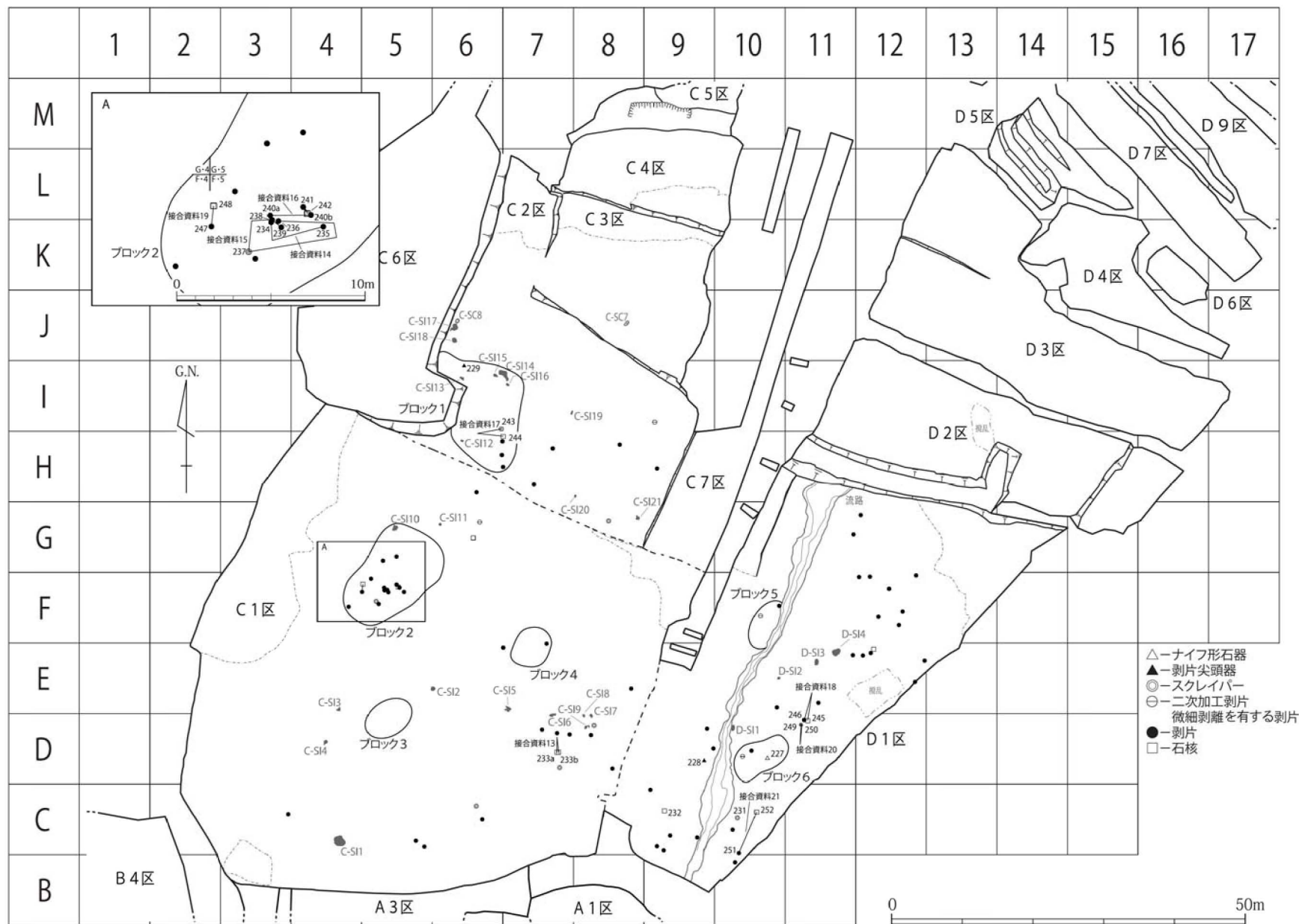
接合資料20はエンドスクレイパー(249)と剥片(250)との接合例で、礫面を除去後、その面(左側面)を打面にして、剥片を連続して3枚剥離後、249を剥離する。その後、打面を再生し、引き続き、剥片を剥出するが、その1枚のみで終わり、打面を上面に移して、幅の狭い小型の縦長剥片を2枚剥離した後、250を剥出している。

接合資料21は剥片(251)と石核(252)の接合例である。礫を分割後、礫面(d面)を打面にして251を剥離し、その後、打面を分割面(a面)に移し、稜付の縦長剥片を1枚剥離している。

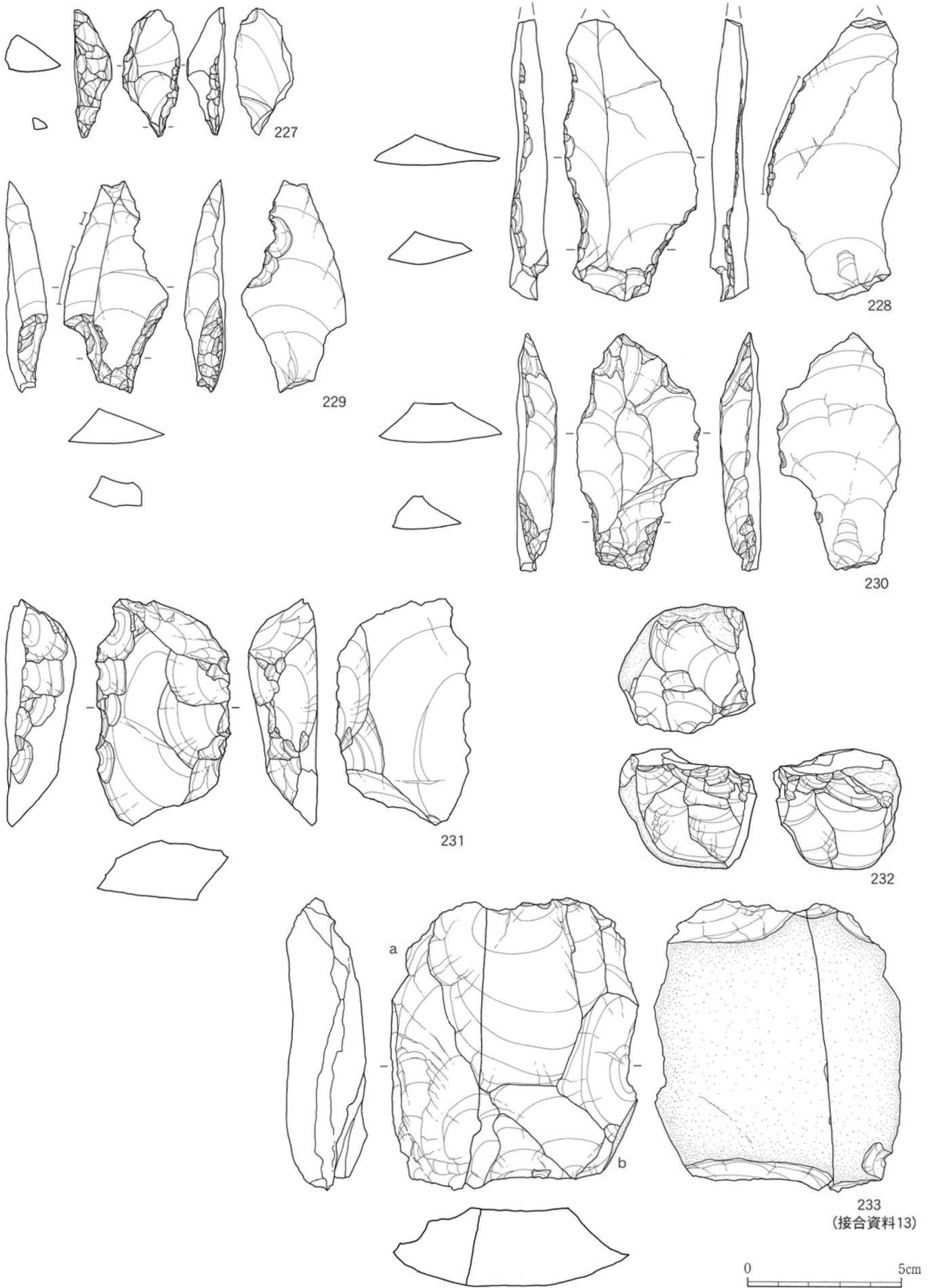
#### 流紋岩V(第63図～第71図、第17表・第18表)

I～IV類に当てはまらないものを一括した。縞状を呈するものや斑文を有するもの、珪質が強いもの等、複数種類認められる。石器は316点出土し、その内訳はナイフ形石器18点(接合後)、剥片尖頭器4点(接合後)、角錐状石器6点、スクレイパー19点(接合後)、二次加工剥片7点(接合後)、微細剥離を有する剥片5点、剥片212点、石核28点、礫器1点、敲石1点である。

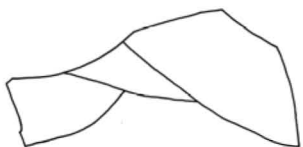
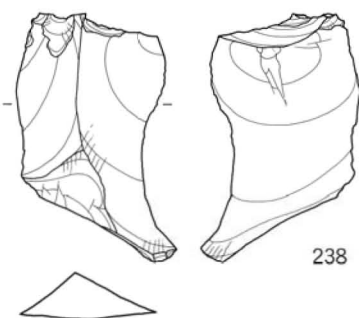
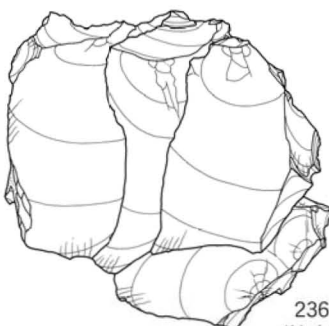
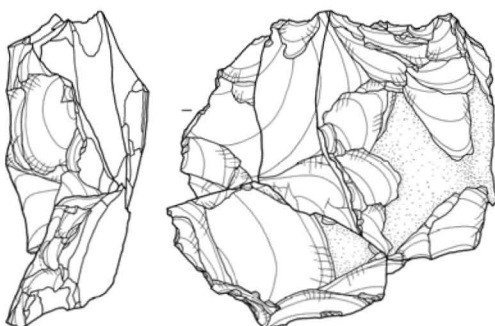
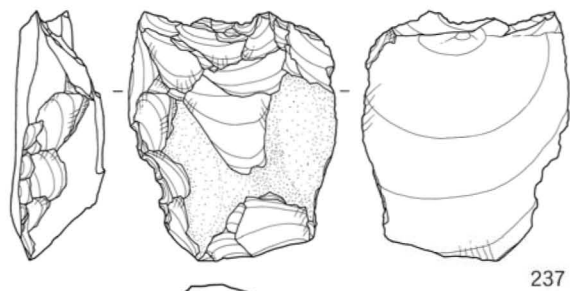
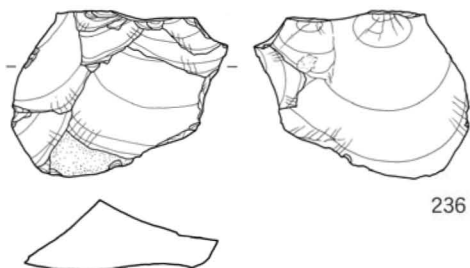
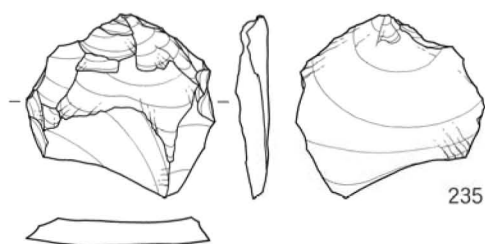
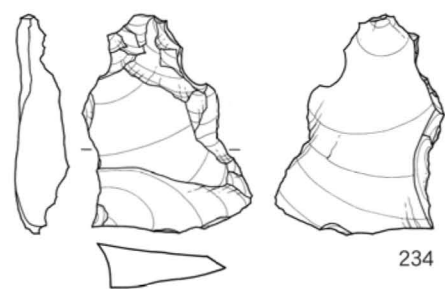
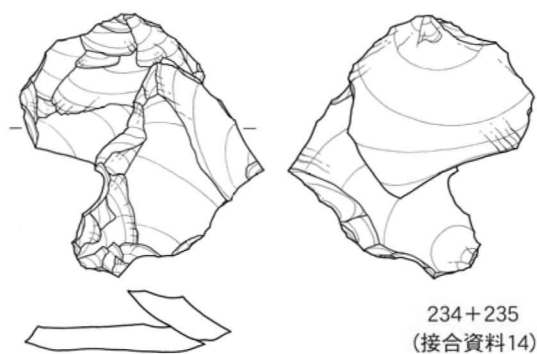
253～258+259、260はナイフ形石器である。そのうち、253は国府系ナイフ形石器である。横長剥片を横位に用い、打面側に主要剥離面側から加工を施し、対向する一縁を刃部に設定している。254は、素材剥片の打面部を先端部側に置き、左側縁に主要剥離面から二次加工を行っている。二次加工はその側縁の殆どに認められるが、素材の厚みの関係により、基部側には、加工が認められない。255は同一方向から剥離された縦長剥片を素材にしている。打面部を基部側に据え、主要剥離面側から二側縁に二次加工が施されている。なお、刃部に相当する部分には表面からの二次加工が認められ、リダクションの可能性が高い。ただし、先端部の欠損は剥離の状態から加工後に起こっている。256は打面転移を行いながら剥出された斜軸剥片を素材にして、器軸を打面端部にくるように傾け、左側縁の約1/2に主要剥離面から二次加工を施している。また右側面については、全体に二次加工が認められるが、基部付近のものについては、平坦加工が認められる。257は打面転移を行いながら剥出された斜軸剥片を素材にして、器軸を打面端部にくるように傾け、左側縁に主要剥離面から加工を施している。なお、右側縁の平坦加工は二次加工の可能性が高いが、素材時の頭部調整の可能性も捨てきれない。いわゆる今峠型ナイフ形石器である。258+259は大型の縦長剥片を素材に打面側を基部に設定し、二側縁加工を施して



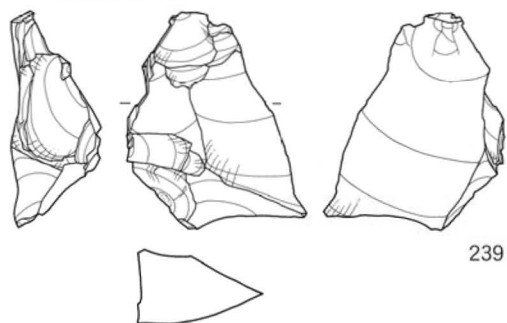
第57図 C・D区 第II文化層遺物分布図 [流紋岩IV] (S = 1 / 300, S = 1 / 800)



第58图 C·D区出土石器实测图17 (S=3/5)



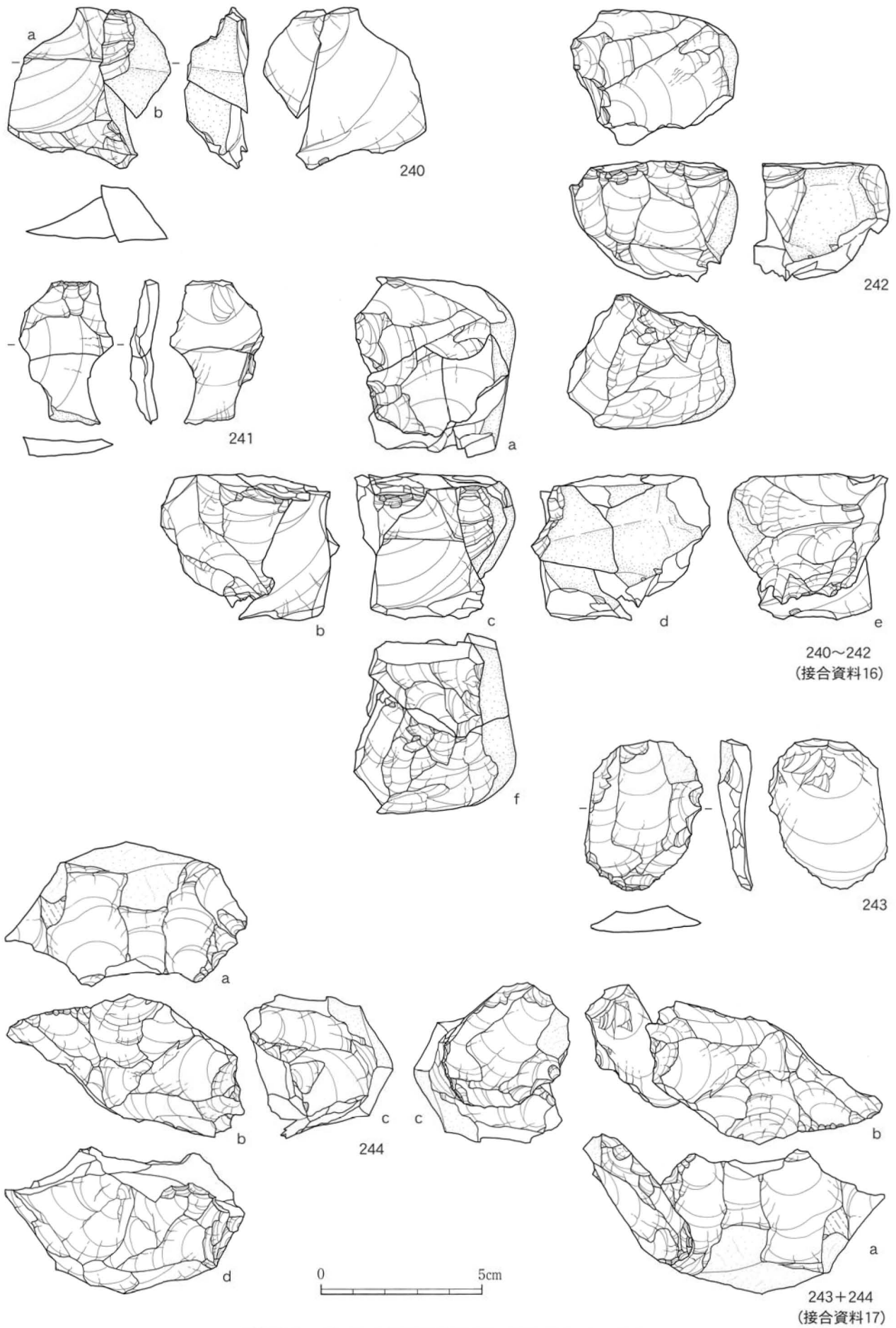
236~239  
(接合資料15)



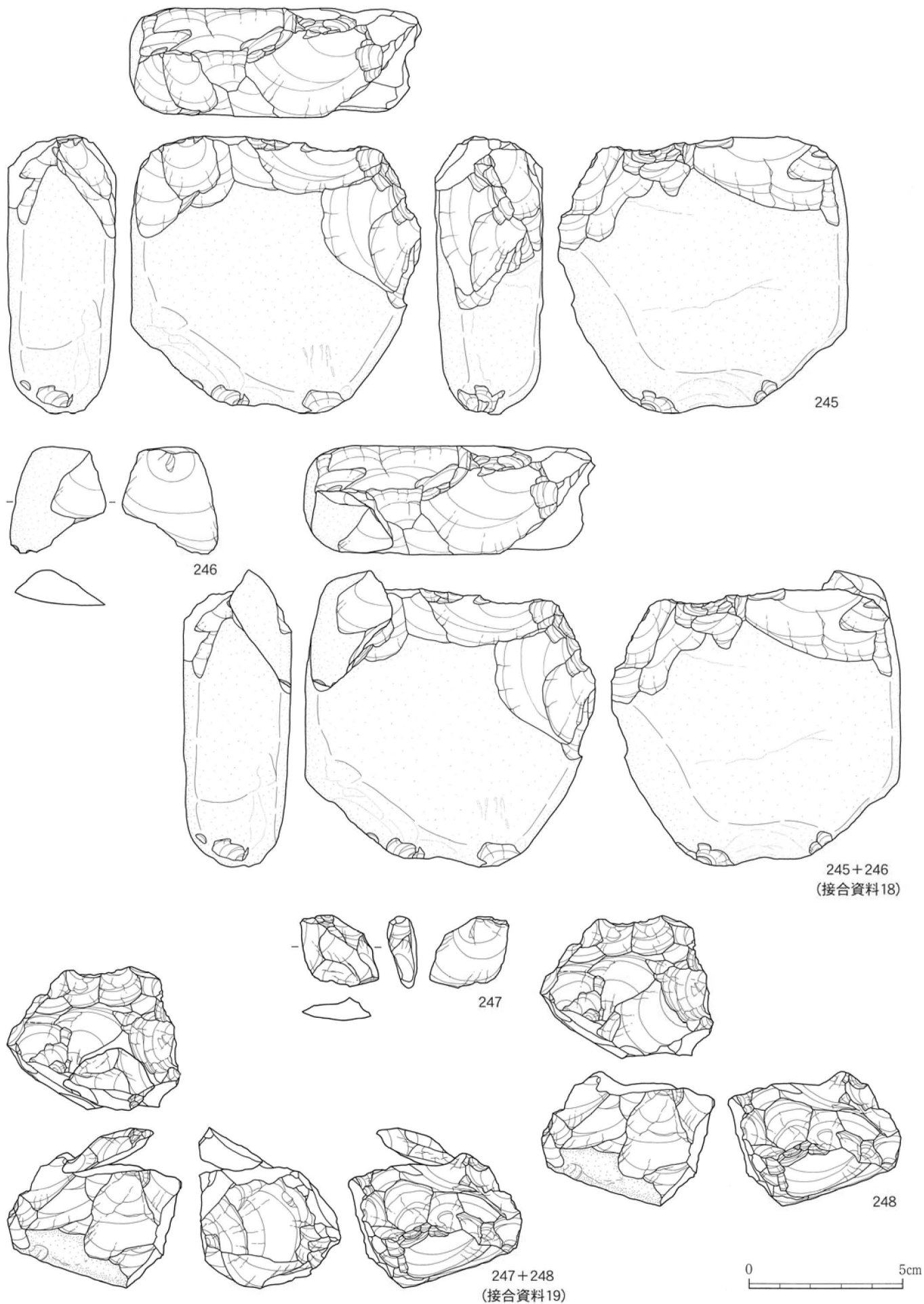
0 5cm

第59図 C・D区出土石器実測図18 (S=3/5)

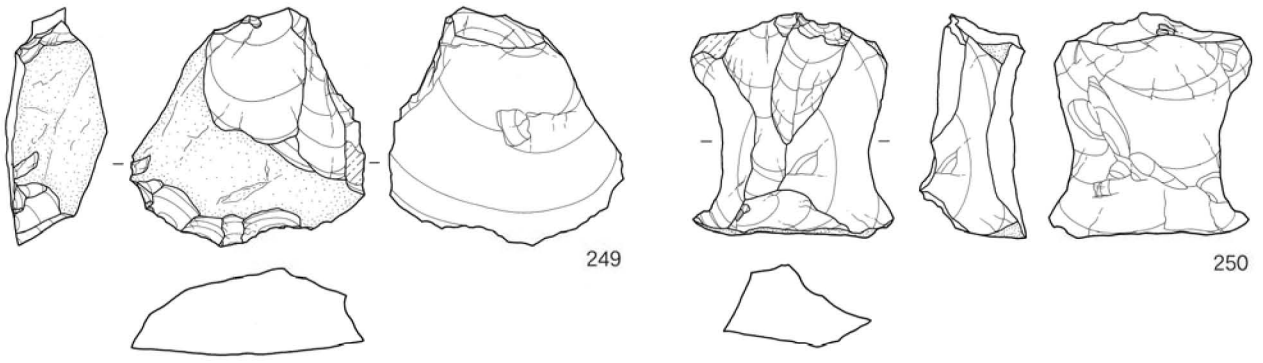




第60图 C·D区出土石器实测图19 (S=3/5)

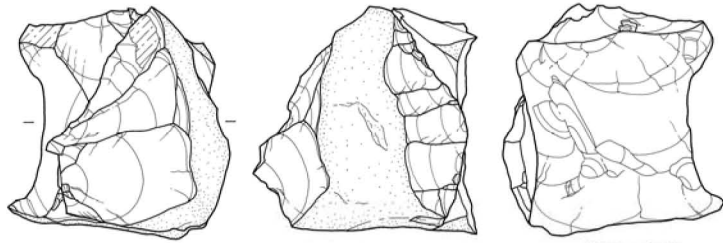


第61図 C・D区出土石器実測図20 (S = 3 / 5)

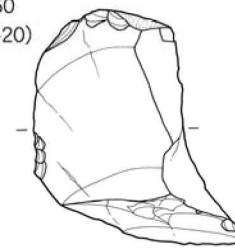
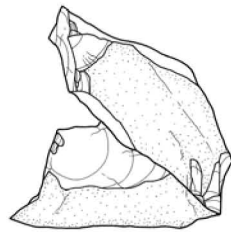


249

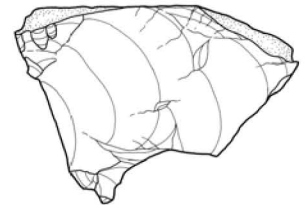
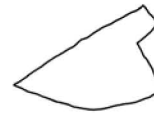
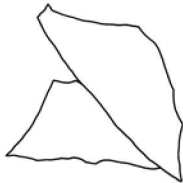
250



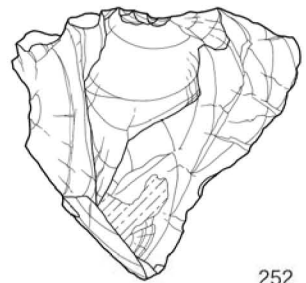
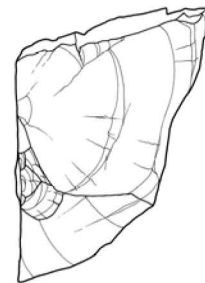
249+250  
(接合資料20)



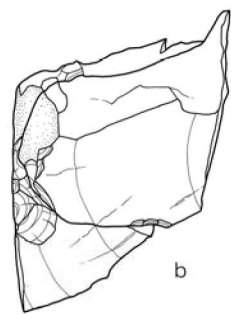
251



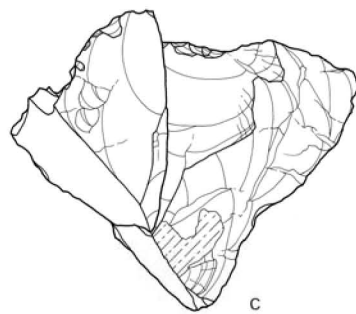
a



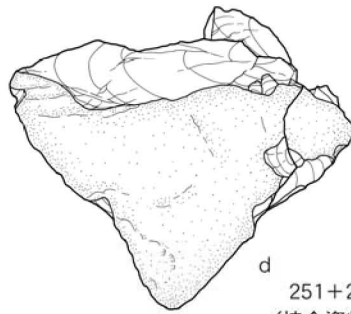
252



b

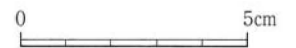


c



d

251+252  
(接合資料21)



第62図 C・D区出土石器実測図21 (S=3/5)

いる。主に主要剥離面側から加工を施しているが、左側縁中央部については、表面からの対向調整が認められる。これらは2分割され、その後259については、折れ面及び右側縁に加工が施され、エンドスクレイパーに転用されている。折れ面の観察から、おそらく表面からの対向調整の際に潜在割れが生じたものと考えられる。また刃部には微細な剥離痕が認められることから、使用時に割れが進行し、最終的に折れたものと推定される（接合資料22）。260は縦長剥片を素材にしている。また表面に残された剥離面は、ポジ面の可能性が高い。二次加工は打面側を基部に据え、右側縁全体に主要剥離面から急角度に行なわれている。中央付近から基部付近にかけては、対向調整が部分的に行われて、さらに基部付近には平坦剥離も認められる。対する左側縁基部側には、主要剥離面から内湾状に加工を行って基部を作り上げている。全体的に端整な作りになっている。

261～265は剥片尖頭器である。261は斜軸状の縦長剥片を用いている。表面に構成されている剥離痕のうち、左側のものについては、ポジ面である可能性が高い。打面部を基部に据え、全長の約1/3に加工を行い、基部を作り出している。262・263も表面に構成されている剥離痕のうち、左側のものについては、ポジ面である可能性が高い。素材にはどちらも縦長剥片を用い、262には基部に、また263には基部と右側縁に、それぞれ加工が認められる。264は素材に一方向から剥出された縦長剥片を利用している。打面を基部側に据え、その部分の両側縁に主要剥離面から抉入状の加工が施されているが、抉りは浅いものになっている。また打面には表面の稜上より加工が行われている。先端部に接する右側縁には主要剥離面から二次加工が施されている。265は素材に上下から剥出された細身の縦長剥片を利用している。打面付近は両側縁には主要剥離面から急角度の加工が施され、浅い抉入状の基部を作出している。先端部右側縁には粗い二次加工が認められる。

266～270は角錐状石器である。266は三面にわたって加工が施されているため、素材の形状は不明である。全体的に小型で、ゴツゴツとしている。稜上調整が顕著である。267に左側面に素材時の剥離面が認められる。左側面は一部裏面からの加工が認められるものの、大半は稜上から加工を行っている。右側面は、裏面に平坦加工を行った後、裏面と稜上から加工を行っている。先端部は入念に加工を行い、先端部を作り出している。268は礫面から剥出された縦長剥片を素材にしていると考えられる。礫面側を基部に据え、両側縁に急角度の二次加工が施されている。また主要剥離面には右側面から平坦加工が認められる。全体的に歪である。表面中央～基部付近にかけて、素材時の剥離面を残し、基部左側には稜上調整及び稜上水平調整が認められる。先端部よりやや下方でも稜上調整の痕跡が認められ、それを左側から入る剥離に切られていることから、リダクションの可能性が考えられる。269・270は縦長剥片を素材に、打面を基部に据えて、両側縁全体に主要剥離面から二次加工剥片を行っている。先端部は特に入念な調整が行われている。

271はラウンドスクレイパーである。打面を転移しながら剥離された厚みのある剥片を素材にしている。主要剥離面より急角度の二次加工が行われ、刃部を作出している。なお、上部の主要剥離面には剥離痕が認められるが、側縁の剥離との切り合い関係から、リダクションの可能性が高い。

272～278はエンドスクレイパーである。272は打面を横位に据えて、上下両端に主要剥離面から細かい剥離を行い、刃部を作出している。273は未製品の可能性が高い。素材には打面転移が行われた石核から剥離された幅広の剥片を利用しており、両側縁の下部から末端部の一部にかけて凸状の刃部が作出されている。素材剥片は打面部から末端部にかけて垂直割れを起こしているが、これが剥離される際に

折れたのか、剥出時には折れずに潜在割れ程度で済んでいたかについては、判断がつかない。仮に折れていない状態の場合には、加工を行っている最中に、潜在割れが進行して欠損した可能性が考えられるが、末端部中央には加工がまったく認められないことから、分割された後、別々に加工が行われた可能性も否定できない（接合資料23）。274は縦長剥片を素材にして、打面を残した全てに、主要剥離面から二次加工を行い、刃部と基部を作り上げている。275は打面転移を行う縦長剥片を素材にし、末端部に主要剥離面から二次加工剥片を行い、刃部を形成している。276は平坦打面から一定方向に、剥出された縦長剥片を素材にしている。二次加工は両側縁下部から末端部にかけて主要剥離面より行われ、特に末端部については急角度に加工が行われている。278は先細りの縦長剥片を素材にして、末端部に主要剥離面から二次加工を行い、刃部を作出している。

279・280はサイドスクレイパーである。そのうち279は打面転移を行う石核から剥出された縦長剥片を素材にしている。両側縁に刃部を形成している。280は打面再生剥片を素材に主要剥離面から左側縁に二次加工を行い、刃部を作出している。

281・282は石核である。281は分割面を打面にして、正面と両側面の3面で剥片剥離作業が行われている。打面には調整が加えられていないことから、そのまま剥離されたものと考えられる。両側面の剥片剥離はヒンジ・フラクチャーを生じている。282は剥片剥離作業が初期のものである。おそらく20cm規模の楕円形に近い扁平な礫を素材にして、端部から加撃を行って、平坦な面を作り出し、右端から剥片を2枚剥出している。打面左側には調整が認められるが作業が行われていない。

283は礫器である。分割礫の縁辺約1/3に礫面から二次加工を行い、刃部を作出している。

284は敲石である。厚みのある楕円礫の両端に敲打痕が認められる。

接合資料24は剥片（285）と石核（286）の接合資料である。分割礫を素材にしており、上面を打面、正面を作業面に設定して、数枚の剥片を剥出後、作業面側から285を剥離して打面再生を行っている。再度、打面から作業を行うが、ヒンジ・フラクチャーが多発したため、一旦、作業をやめて、作業面下方から縁辺に沿って礫面を除去して、打面を作出している。打面をその面に移し、作業を再開するが、こちらも力が下方まで抜けず、ヒンジ・フラクチャーが多発したことにより、作業を終えている。

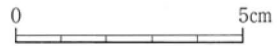
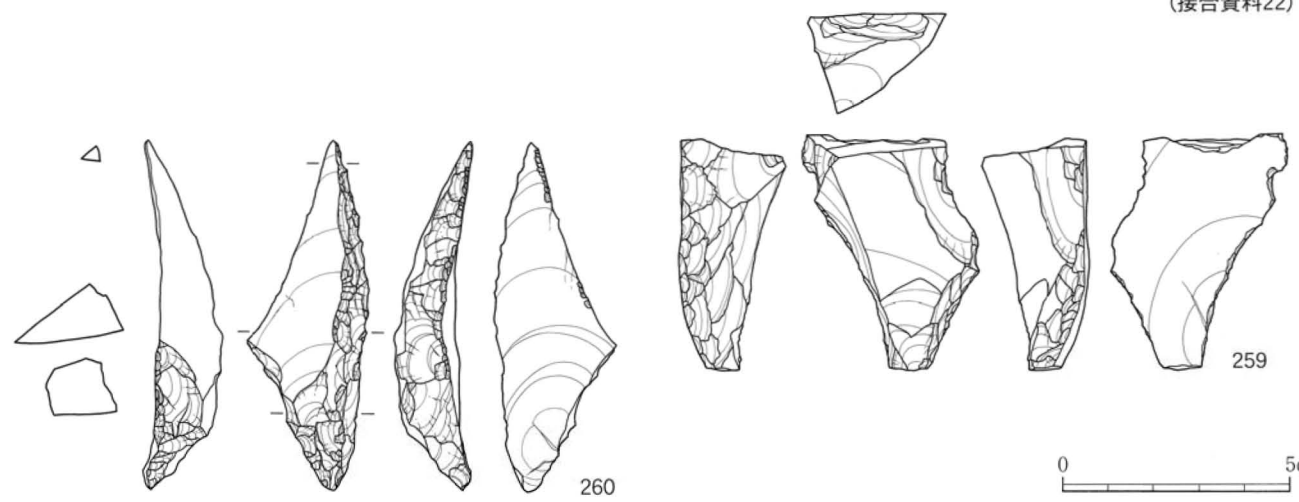
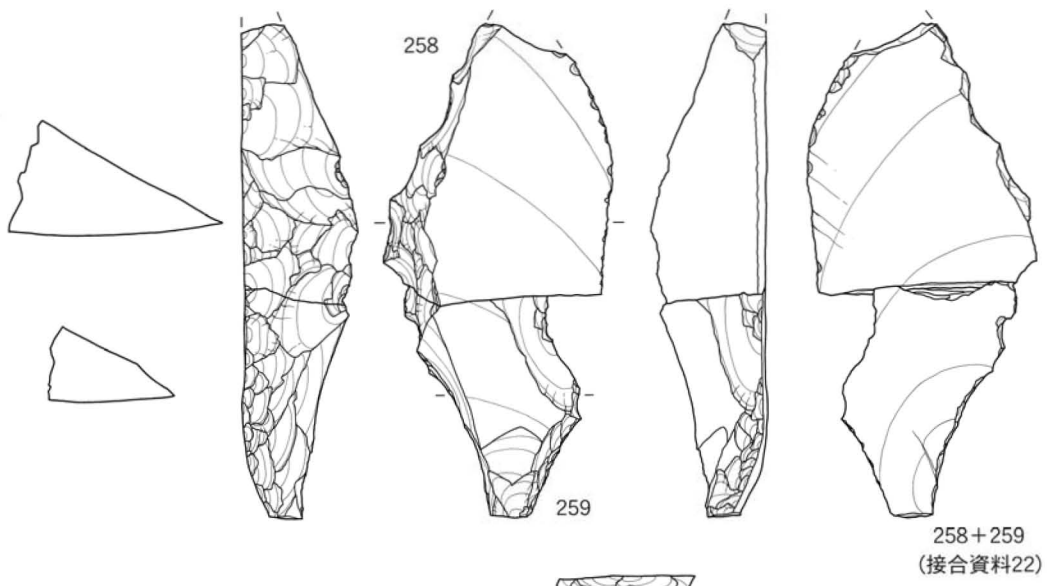
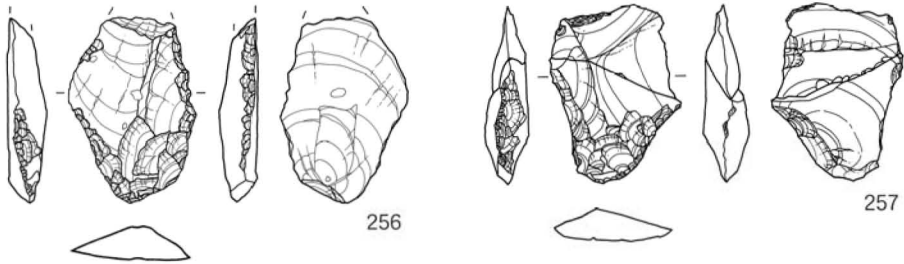
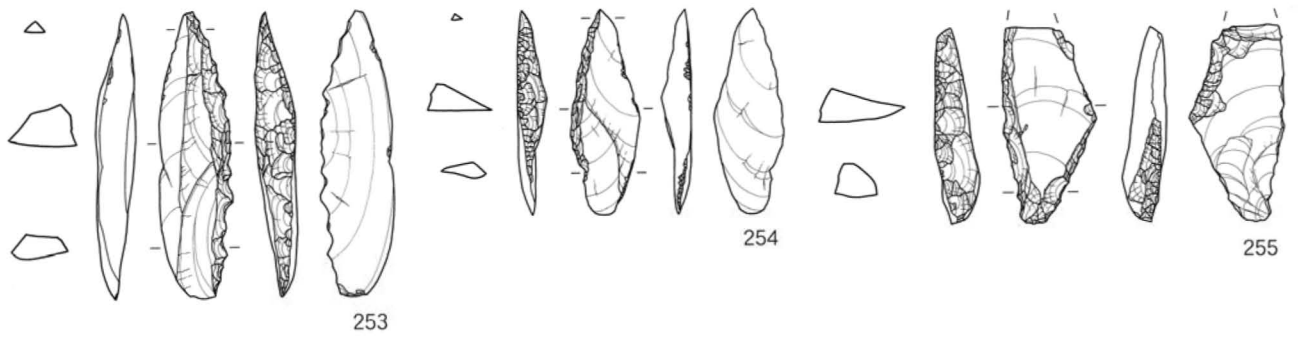
接合資料25も剥片（287）と石核（288）の接合資料である。礫を分割し、分割面から剥離を行い、打面を形成して、そこから287を剥出している。288は剥出時に垂直割れを起こしている。また下部については、表面より加撃した痕跡が残ることから折り取られたものと考えられる。その後、石核は打面を右側にずらし、剥片剥離を行っている。その際、力が内側に抜けたため、剥片は裏側の礫面を取り込んだまま、剥出されてしまっている。

接合資料26は微細剥離を有する剥片（289）と石核（290）の接合資料で、ともにD1区の出土である。打面を転移させながら、剥片剥離を行っている。分割礫を素材にし、分割面（d面）を打面に据えて、途中調整を加えながら、a面で作業を行っている。今度はその面を打面にして作業を行い、こちらでも部分的に調整を加えながら、作業を行い、この時に289を剥出している。

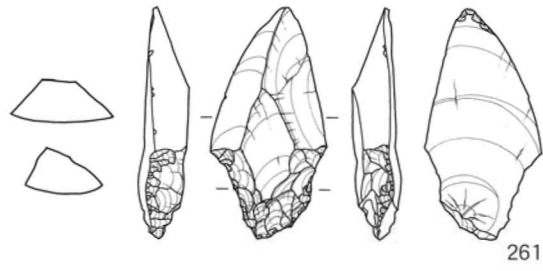
接合資料27・28はどちらもD1区ブロック5の出土で、同一母岩である。ともに剥片同士の接合例で、そのうち接合資料27（291・292）は礫面の一端を剥離して打面を作出し、291をはじめ、2枚を剥離する。その後、その面を打面に設定して、左側面から剥離作業を行っている。作業が進行したのに伴い、292を剥離して、打面再生を図っている。



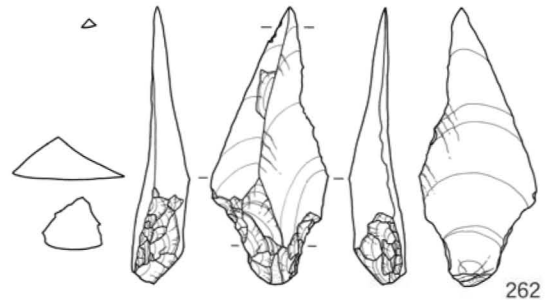
第63図 C・D区 第II文化層遺物分布図 [流紋岩V] (S=1/300, S=1/800)



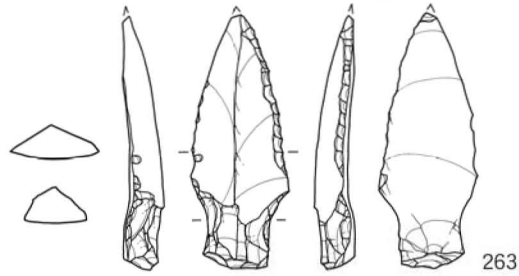
第64图 C·D区出土石器实测图22 (S=3/5)



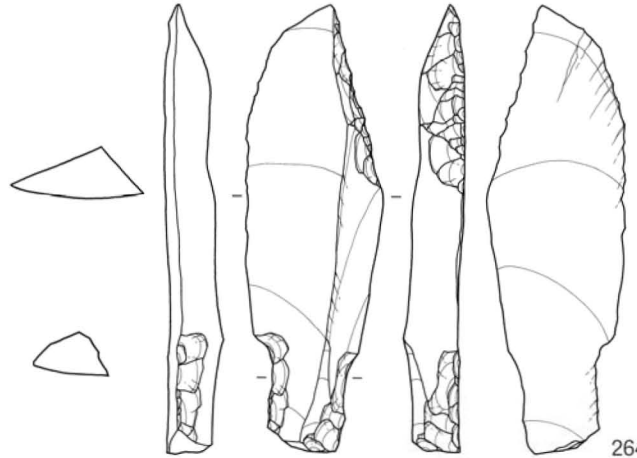
261



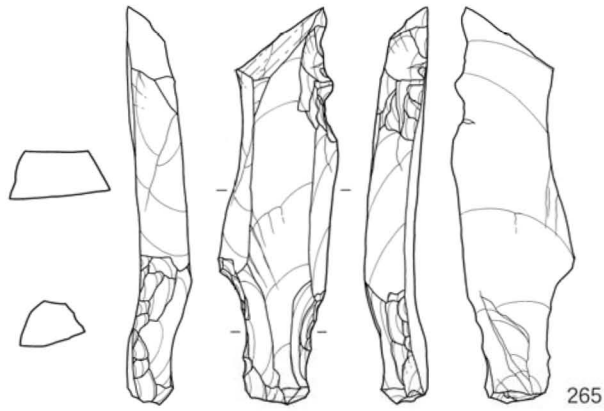
262



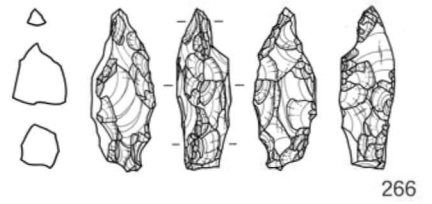
263



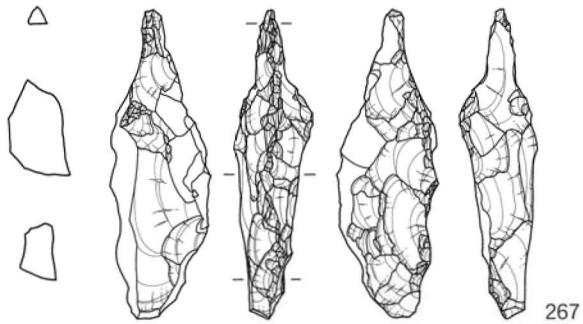
264



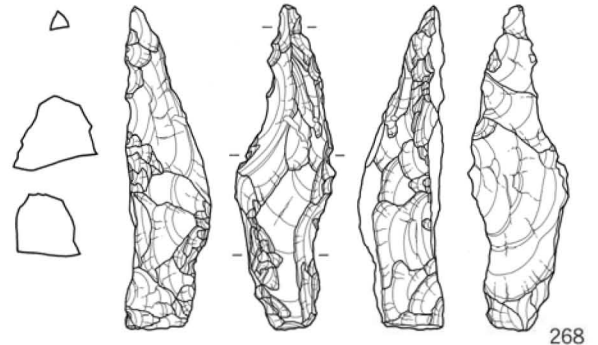
265



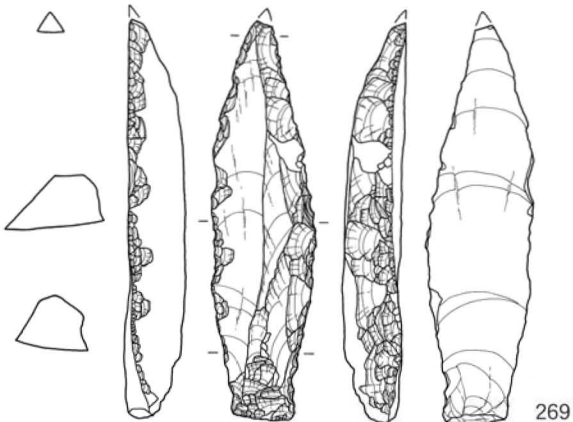
266



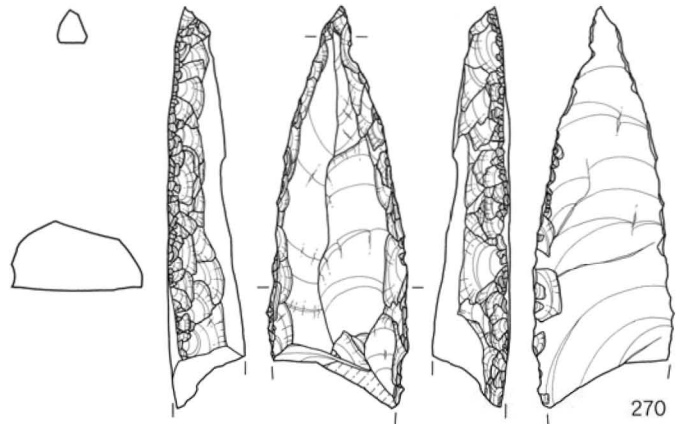
267



268



269

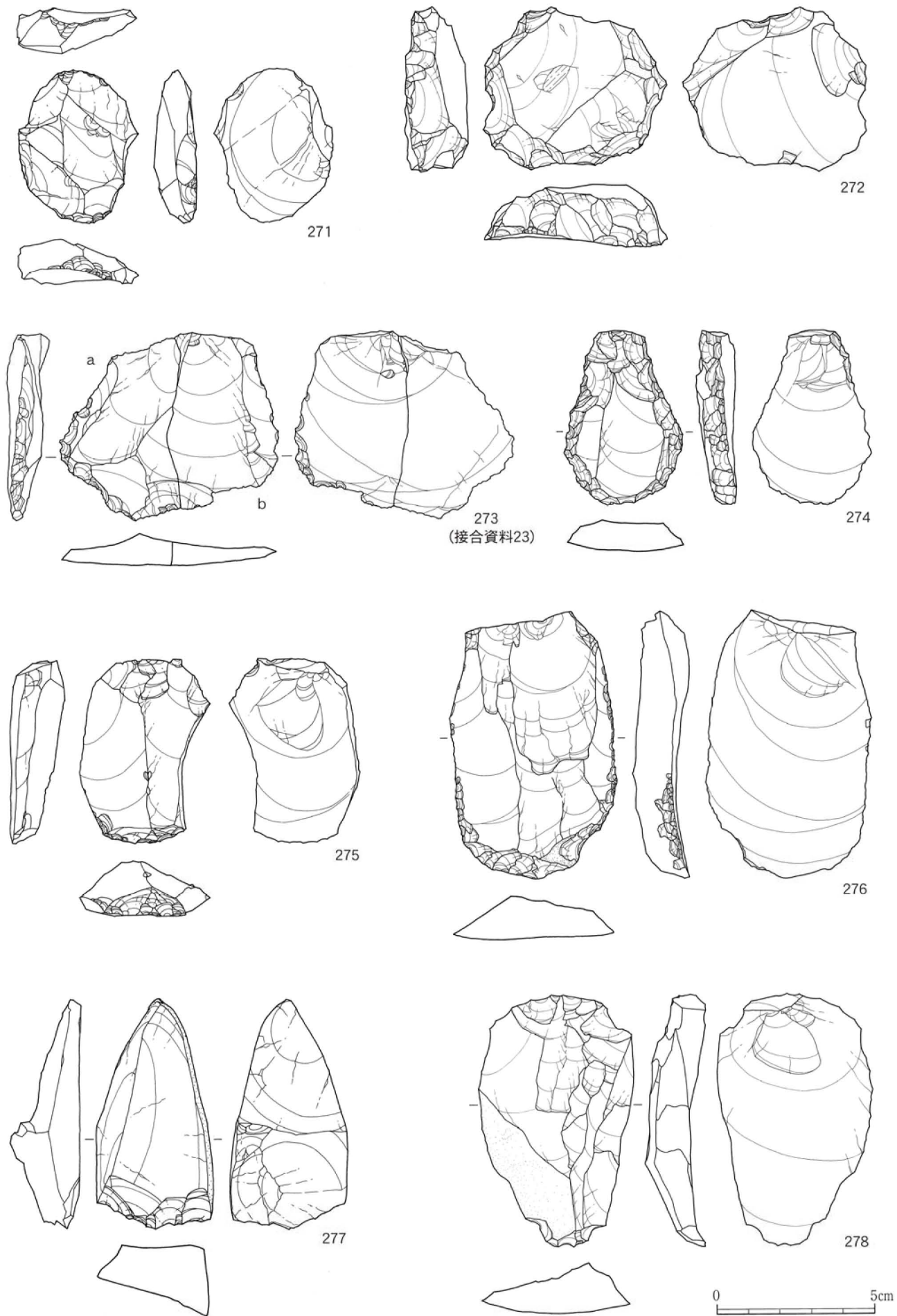


270

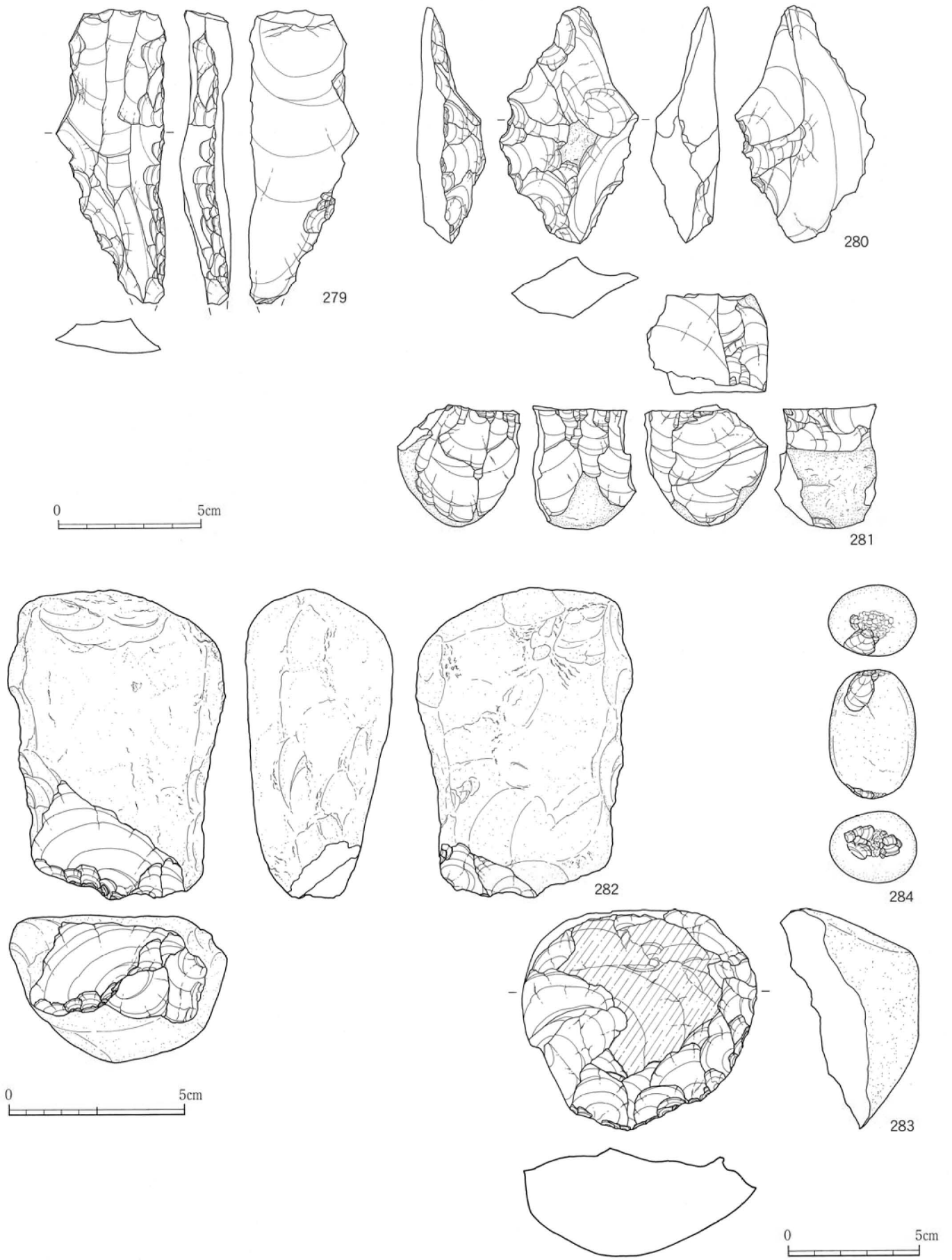
0 5cm

第65图 C·D区出土石器实测图23 (S=3/5)

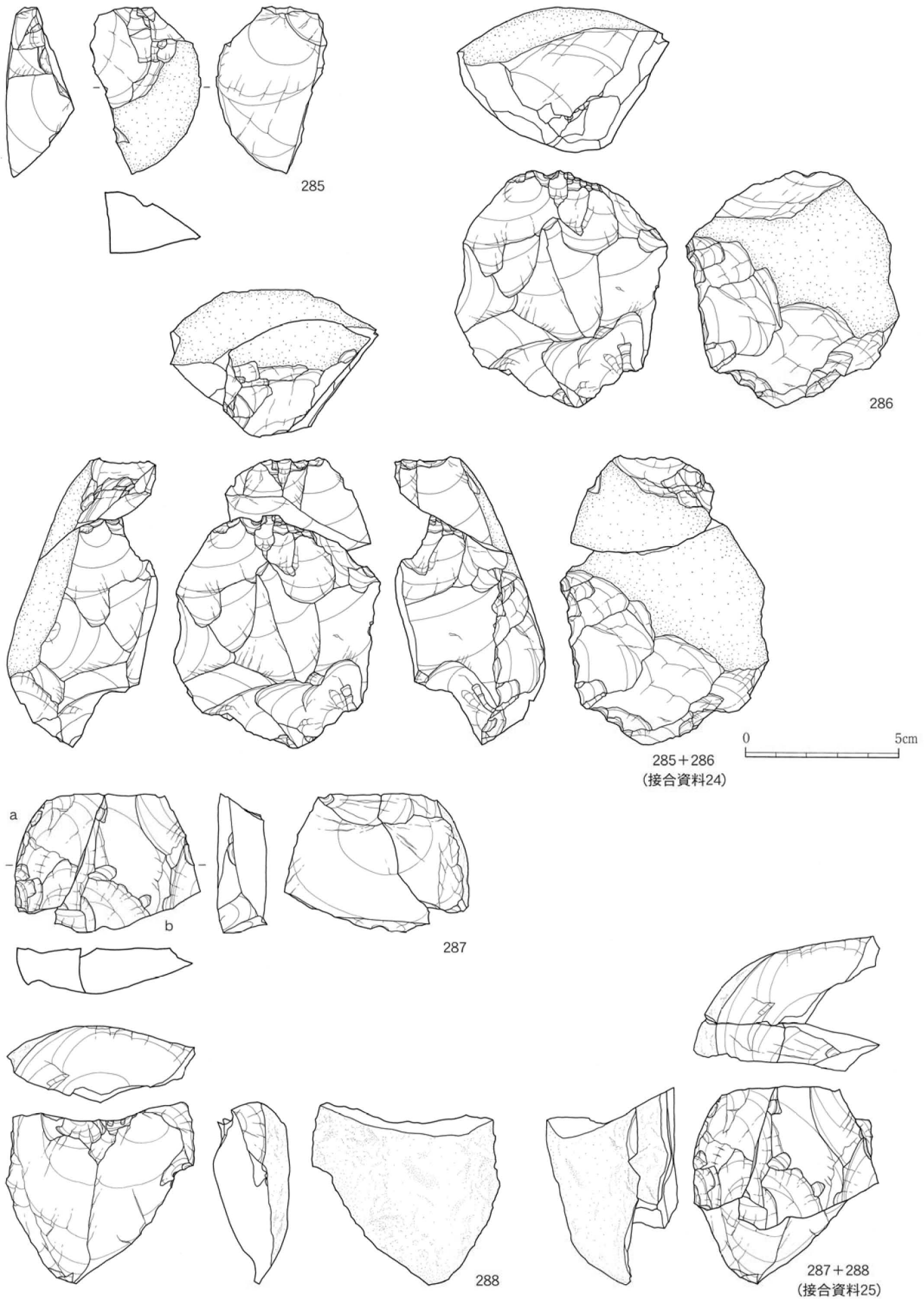




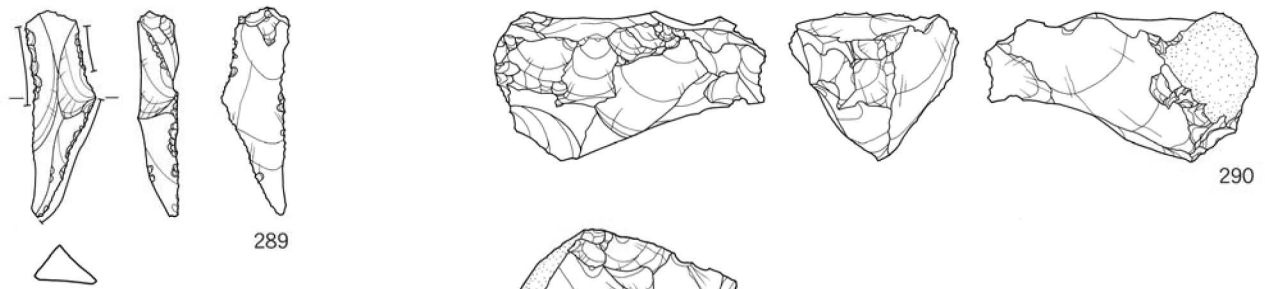
第66図 C・D区出土石器実測図24 (S=3/5)



第67图 C·D区出土石器实测图25 (279~281: S=3/5、282~284: S=1/2)

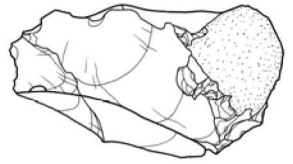
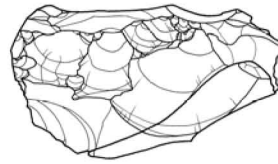


第68図 C・D区出土石器実測図26 (S=3/5)

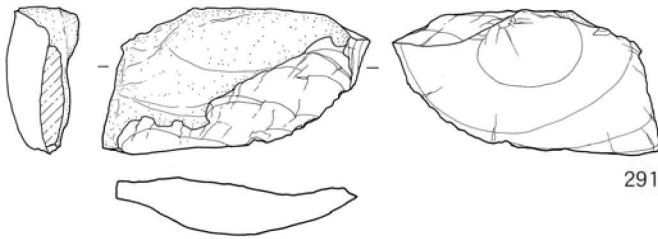


289

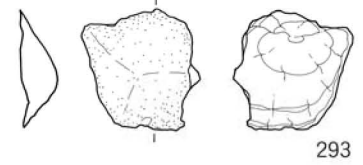
290



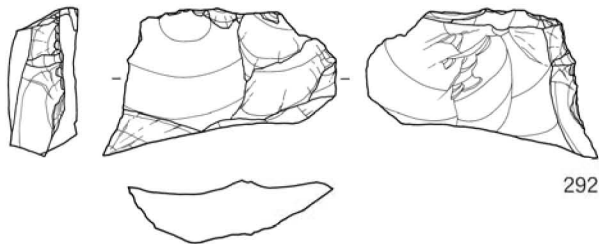
289+290  
(接合資料26)



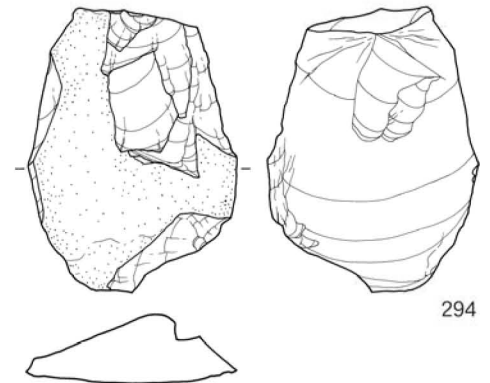
291



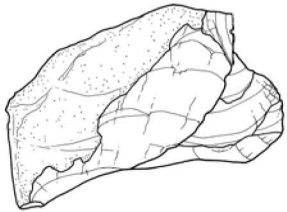
293



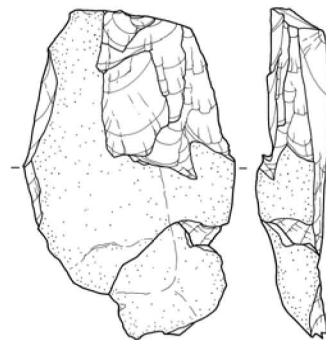
292



294



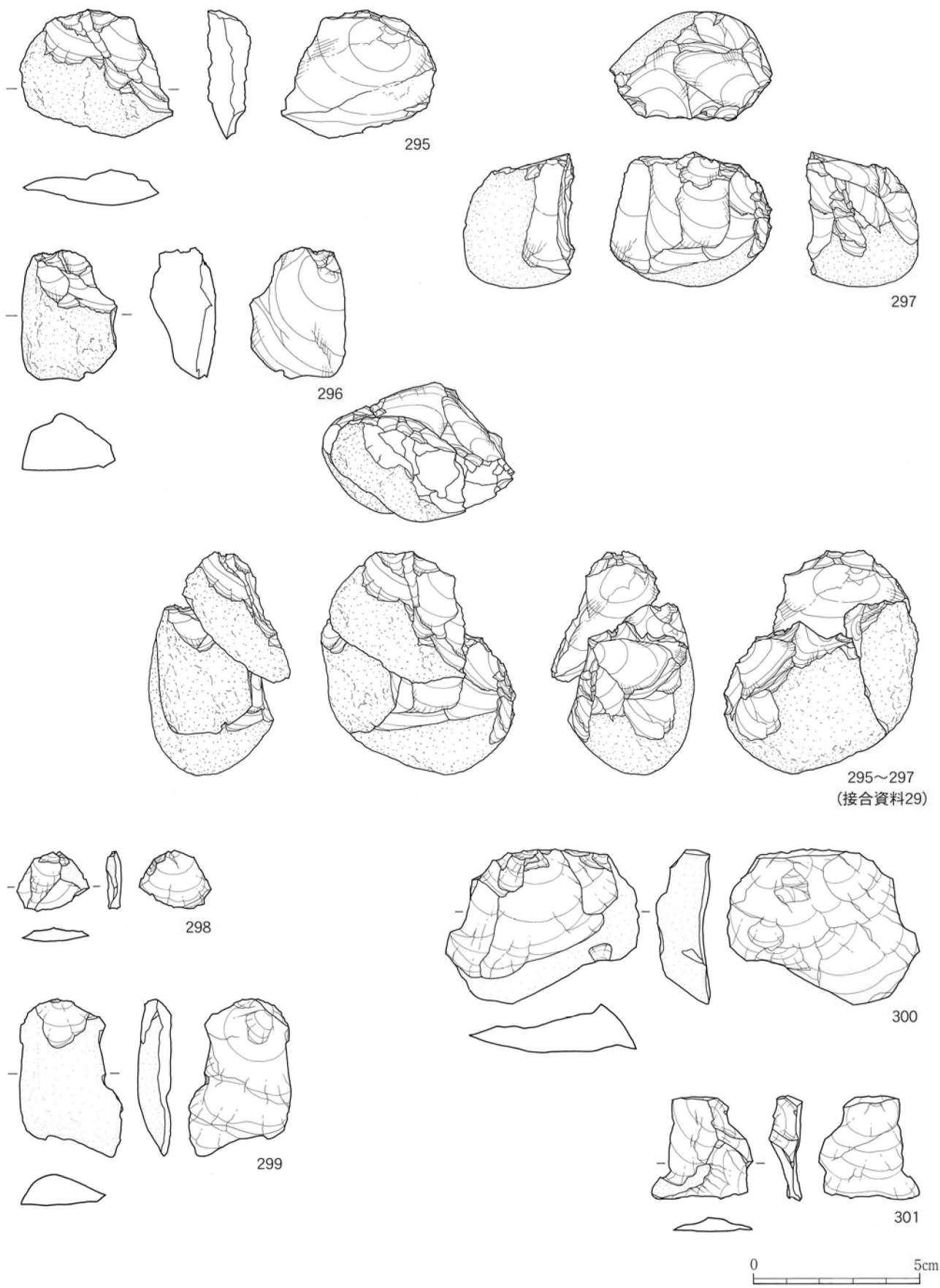
291+292  
(接合資料27)



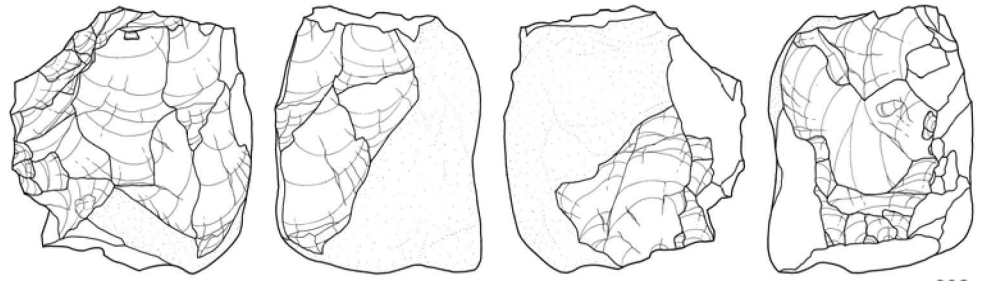
293+294  
(接合資料28)



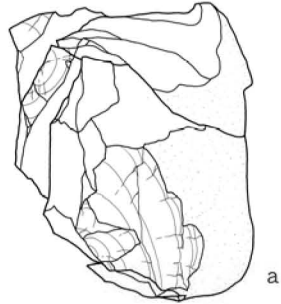
第69図 C・D区出土石器実測図27 (S=3/5)



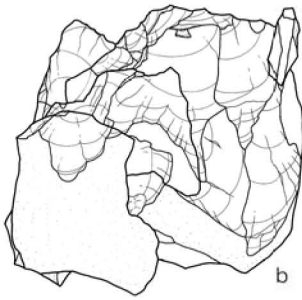
第70図 C・D区出土石器実測図28 (S=3/5)



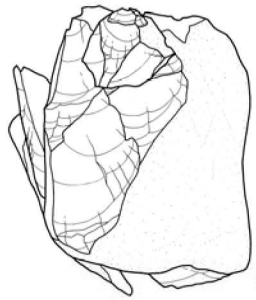
302



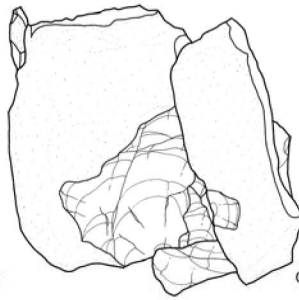
a



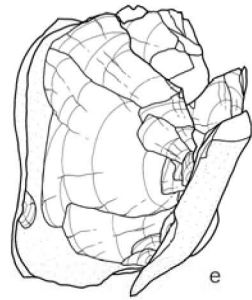
b



c

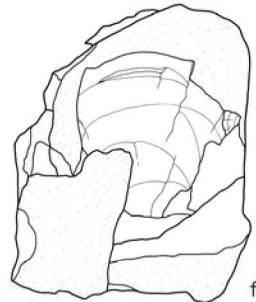


d

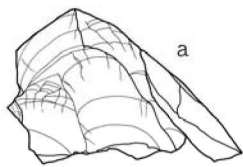


e

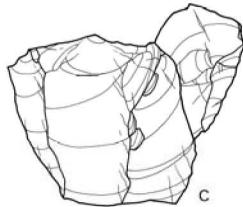
298~302  
(接合資料30)



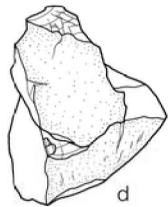
f



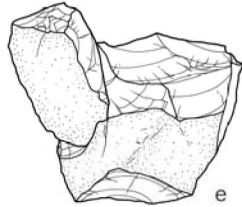
a



c

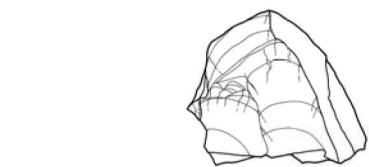


d

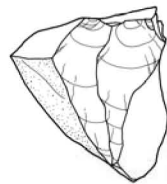


e

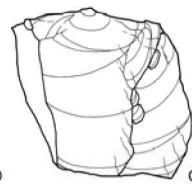
303+304  
(接合資料31)



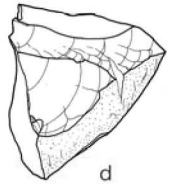
a



b

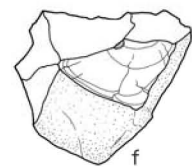


c

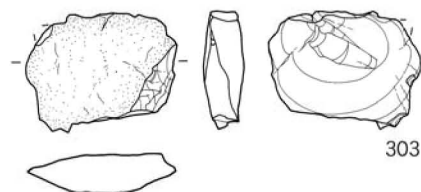


d

304



f



303

0 5cm

第71图 C·D区出土石器实测图29 (S=3/5)

接合資料29は剥片2点(295・296)と石核1点(297)の接合例である。すべてC1区ブロック2内での出土である。6cm規模の亜円礫を素材に、上面と正面の2面を作業面にして剥離作業を行っている。295をはじめ、数枚の剥片を剥出後、打面を入れ替え、それまで打面に設定していた面を作業面にして、剥片剥離を行い、さらに打面をもどして、296を剥離している。この工程を繰り返し、最終的には上面で小型の縦長剥片を剥出して、作業を終えている。

接合資料30は剥片4点(298～301)と石核1点(302)の接合例である。この資料もC1区ブロック2内での出土である。6～7cm前後の亜円礫を素材に、299を剥出してb面を打面に設定し、その面からe面で剥片剥離を行い、300を剥出している。その後、その面を打面に替えて、b面・f面で作業を行い、301を剥出している。f面に打面転移し、b面で作業を行うが、石質によりステップが多発し、思うように剥離作業が行われていない。さらにa面に打面を移し、c面で298をはじめ、5枚の剥片を剥出しているが、こちちらでもステップが多発している。最終的にはa面に打面調整を加えたのみで終了している。

接合資料31剥片1点(303)と石核1点(304)の接合例で、C1区ブロック2内で出土している。分割面(c面)から303をはじめ、3枚の剥片を剥出することで、a面に打面を作出し、c面からb面を作業面にして剥片剥離作業を行っている。

#### ホルンフェルスI(第72図～第78図、第18表)

黒色～暗褐色を呈し、剥離面がやや粗いものを一括した。頁岩起源のものや空晶石を含むものなども含めている。

石器は58点出土している。その内訳はナイフ形石器4点、角錐状石器1点、スクレイパー1点、二次加工剥片2点、剥片46点、石核4点である。その分布はC2区・C4区以外で出土しており、そのうちC1区ブロック4(E・7グリット)及びD1区ブロック6(D・10グリット)に2箇所にとままりが見られる以外は散発的である。

305・306はナイフ形石器である。そのうち305は幅広の縦長剥片を素材に右側縁に主要剥離面及び稜上加工が施されている。306は縦長剥片を素材に基部加工を施している。なお、左側縁上部から先端部にかけては石核素材のポジ面を残す。307は角錐状石器である。おそらく厚みのある不定形剥片を素材に主要剥離面側から縁辺に急角度の加工を施している。また主要剥離面側には右側縁から平坦剥離を施し、断面が台形状を呈する。さらに先端部は稜上から調整を加え、断面が三角形状になるように仕上げている。308はエンドスクレイパーである。幅広の縦長剥片を素材に末端部分と打面側両側縁を中心に主要剥離面側から二次加工を施し、刃部と基部を作り出している。309は二次加工剥片である。縦長剥片を素材に左側縁下部に抉入状の加工を施している。右側縁には微細な剥離痕を有する。

接合資料32は剥片同士(310・311)の接合例である。部分的に剥離面に熱破砕が認められる。剥離面の状況から打面を転移させて剥片剥離を行っており、310を剥離する段階で上方に打面を移し、同剥片を剥離後、左右に打点をずらしながら剥片剥離を行い、311を剥出している。

接合資料33は微細剥離を有する剥片1点(312)と剥片3点(313～315)、石核1点(316)の接合例である。礫を分割後、上方に打面を固定し、打点を左右にずらしながら剥片剥離を行っている。312の打面は平坦剥離であることから、この前後の剥片剥離までは打面調整が行われていなかった可能性が

高い。その後、打面調整が頻繁に行われるようになり、313や314、315を剥出し、最終的に幅広の剥片を剥離後（316の正面）、作業を終えている。

接合資料34は微細剥離を有する剥片1点（317）と石核2点（318・319）の接合例である。礫を分割後、礫面除去を行い、b面を打面に設定し、d面で剥離作業を行い、317を剥離後、a面に打面を移した後、剥片剥離を行っているが、幅広の剥片を剥離した段階で、中程で力が内側に抜けて318と319に分割されてしまう。318はその後、打面をc面に入れ替え、調整を行っているが、そのまま作業を終了している。319は分割面を打面にして数枚の剥片剥離を行ったのみで、終了している。

接合資料35は剥片（320）と石核（321）の分割面同士の接合例で、321は分割後、その面を打面にして、幅広の剥片を剥離している。

接合資料36は剥片同士（322～324）の接合例で、打面を替えながら、礫面除去を行なっている。

### ホルンフェルスⅡ（第72図・第77図～第78図、第18表）

剥離面は風化が著しく、ざらつきがあり、艶消し状で粉を吹いた状態のものを一括した。なかには風化が進み、剥離が判別しにくいものも認められる。色調はにぶい黄色や灰オリーブ色、暗青灰色など複数認められる。

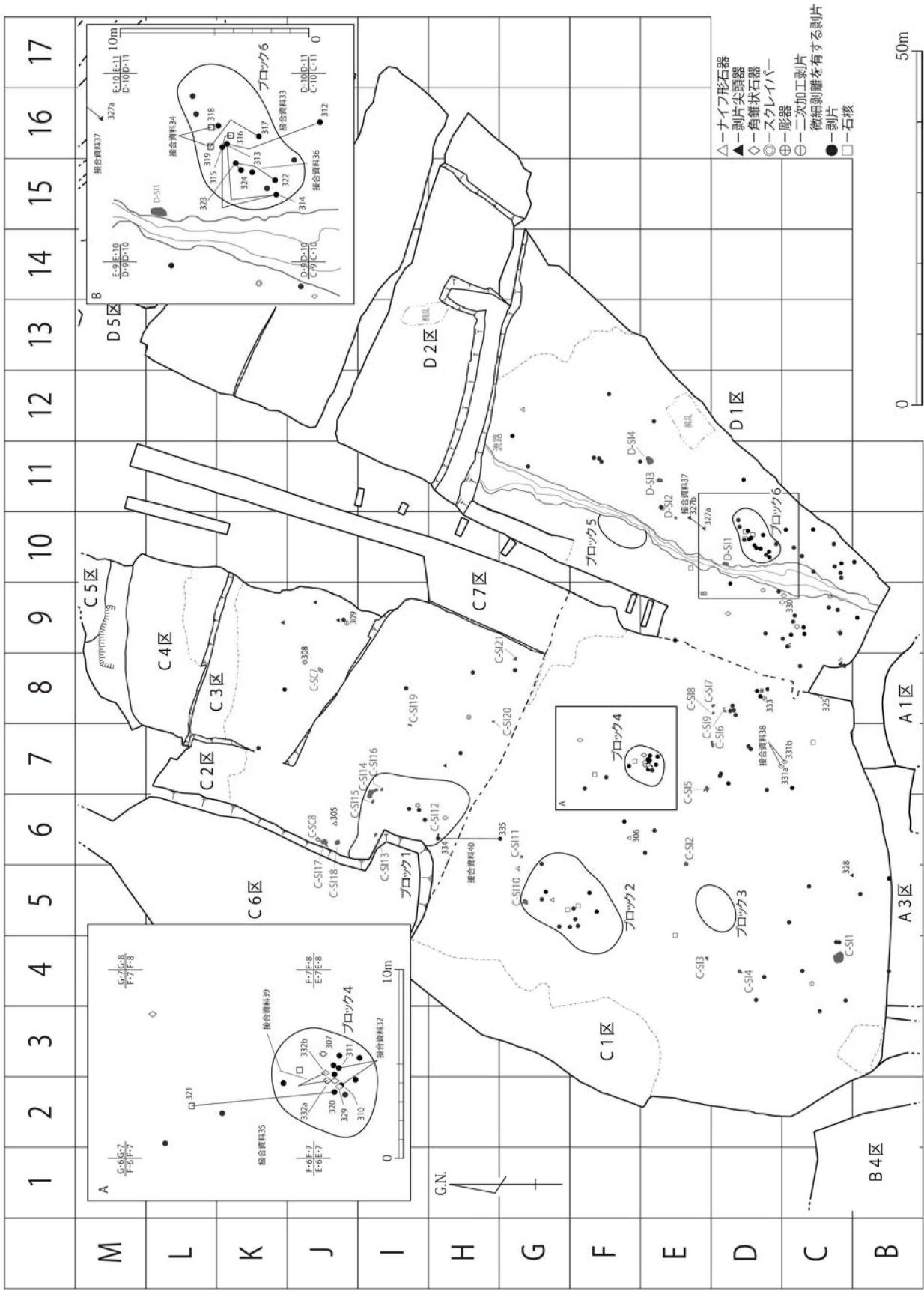
石器は138点出土している。その内訳はナイフ形石器1点、剥片尖頭器9点（接合点数）、角錐状石器9点（接合点数）、スクレイパー9点、彫器1点、二次加工剥片1点、剥片96点、石核6点である。その分布はC1区ブロック2（F・4～G・5グリット）とD・8グリッドと周辺、ブロック4（E・7～F・7グリット）等で比較的まとまって出土している。そのうち、ブロック4では角錐状石器（307・332など）がまとまって確認されている。

325は基部を欠損しているが、ナイフ形石器と考えられる。縦長剥片を素材としており、左側面は、主要剥離面から急角度に加工を施し、先端部は稜上から調整剥離を行っている。

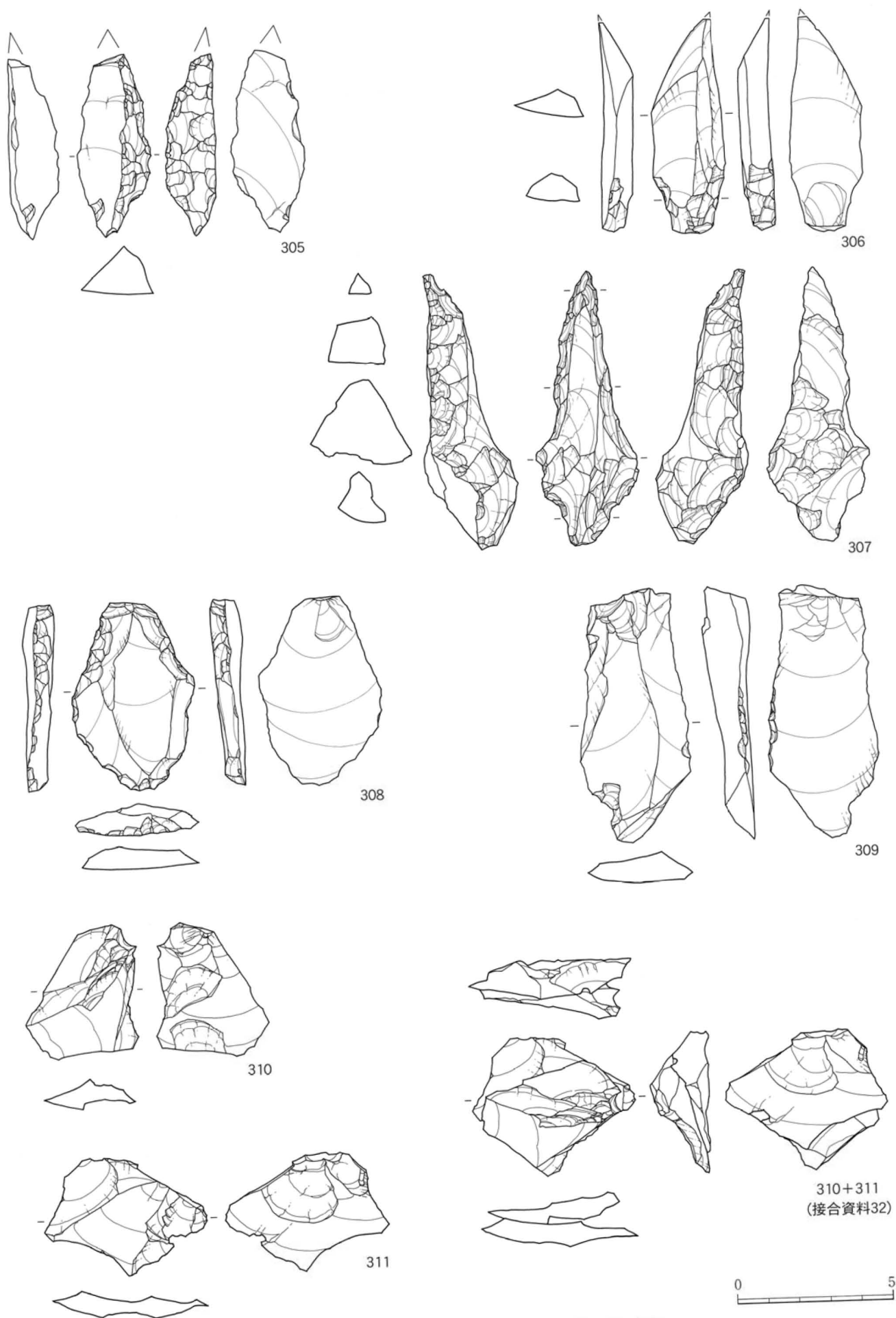
326～328は剥片尖頭器である。そのうち326は打面を一定方向に固定し、連続的に剥離された縦長剥片を素材に打面側の左側縁を中心に抉入状の加工を行い、基部を作り出している。327は打面転移させながら剥出された縦長剥片を素材に打面側両側縁に抉入状の加工を行い、基部を作り出している。また主要剥離面には調整加工が行われている（接合資料37）。328は両設打面の石核より剥離された縦長剥片を素材にしていて、打面側の両側縁に加工が施し、基部を作り出している。抉入度は弱い。

329～332は角錐状石器である。そのうち329・330は縦長剥片を用いている。329は両側面及び稜上に加工を施している。また主要剥離面側には基部付近から中程まで調整剥離が行われている。全体的に調整が粗い印象を受ける。330は主要剥離面より急角度に二次加工を施す。表面中央は加工が施されず、素材時のままだが、先端部付近になると稜上からの調整剥離を行い、断面を三角形に仕上げている。全体的にずんぐりとした形状になっている。先端部は欠損している。331・332は同一母岩の可能性がある。どちらも三面とも加工が入り、変形度が大きいため、素材の形状が明らかではないが、大型の不定形剥片を用いているものと考えられる。331は素材の形状によるところが大きいですが、甲高で、剥離の大きい二次加工を施し、全体形を整えた後に部分的に細かな調整を加えている。特に底面については縁周の殆どに調整を加えているが、左側縁の中程に調整が及んだ際に、力が内側に入り込んだため、折れてしまっている。332も剥離の大きい二次加工を施し、全体形を整えた後に細かな調整を加えているが、

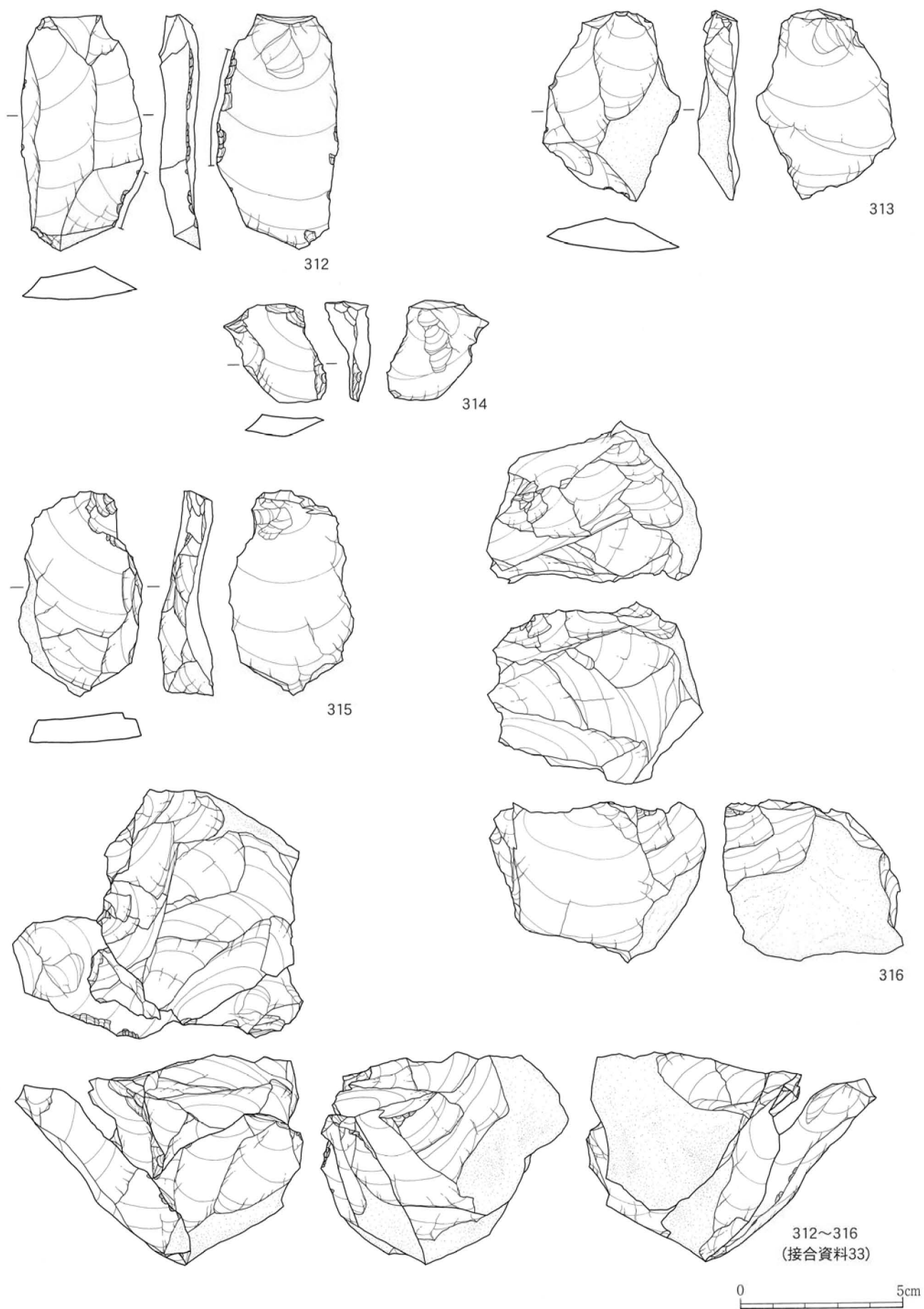




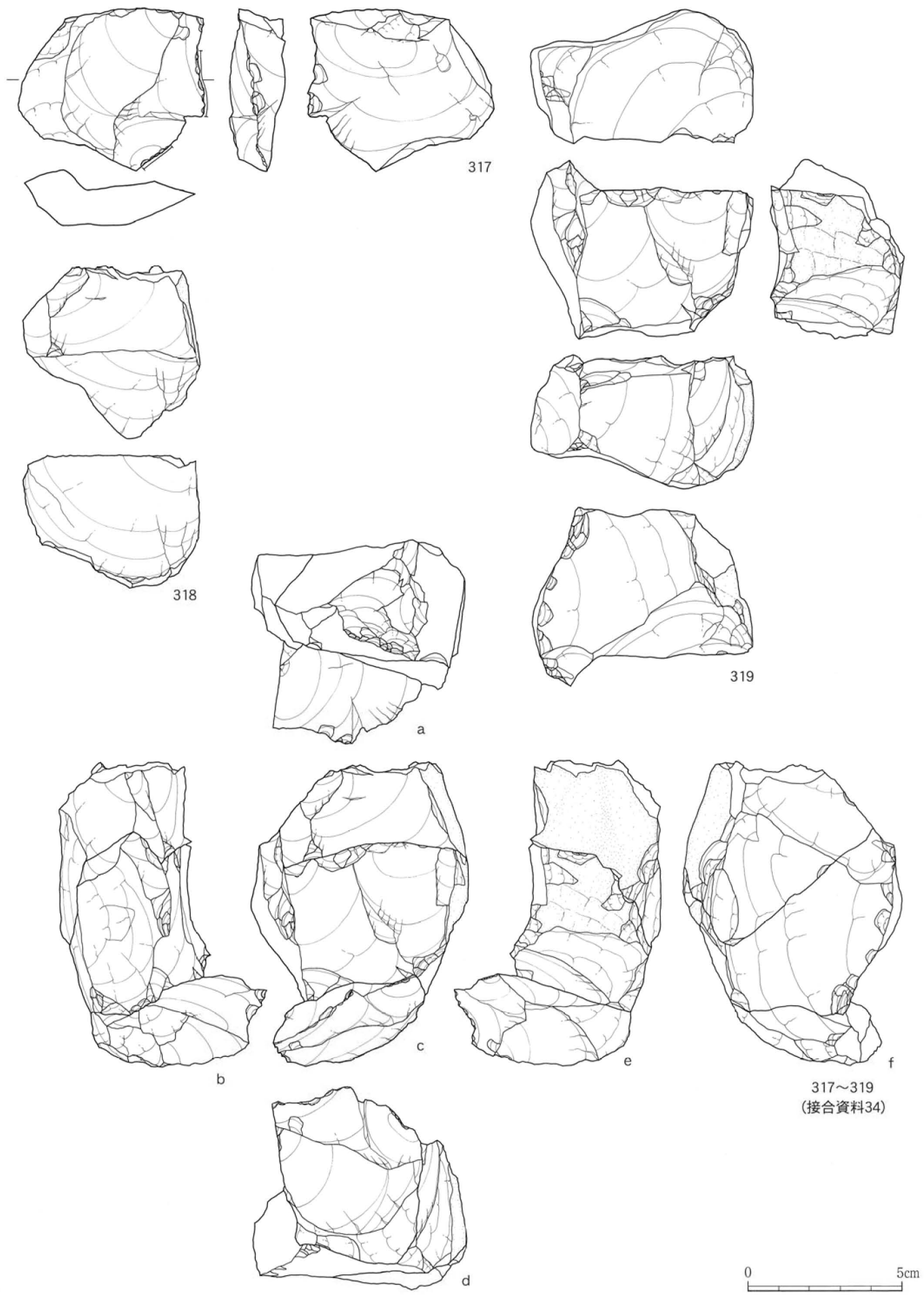
第72図 C・D区 第Ⅱ文化層遺物分布図 [ホルンフェルス] (S=1/300, S=1/800)



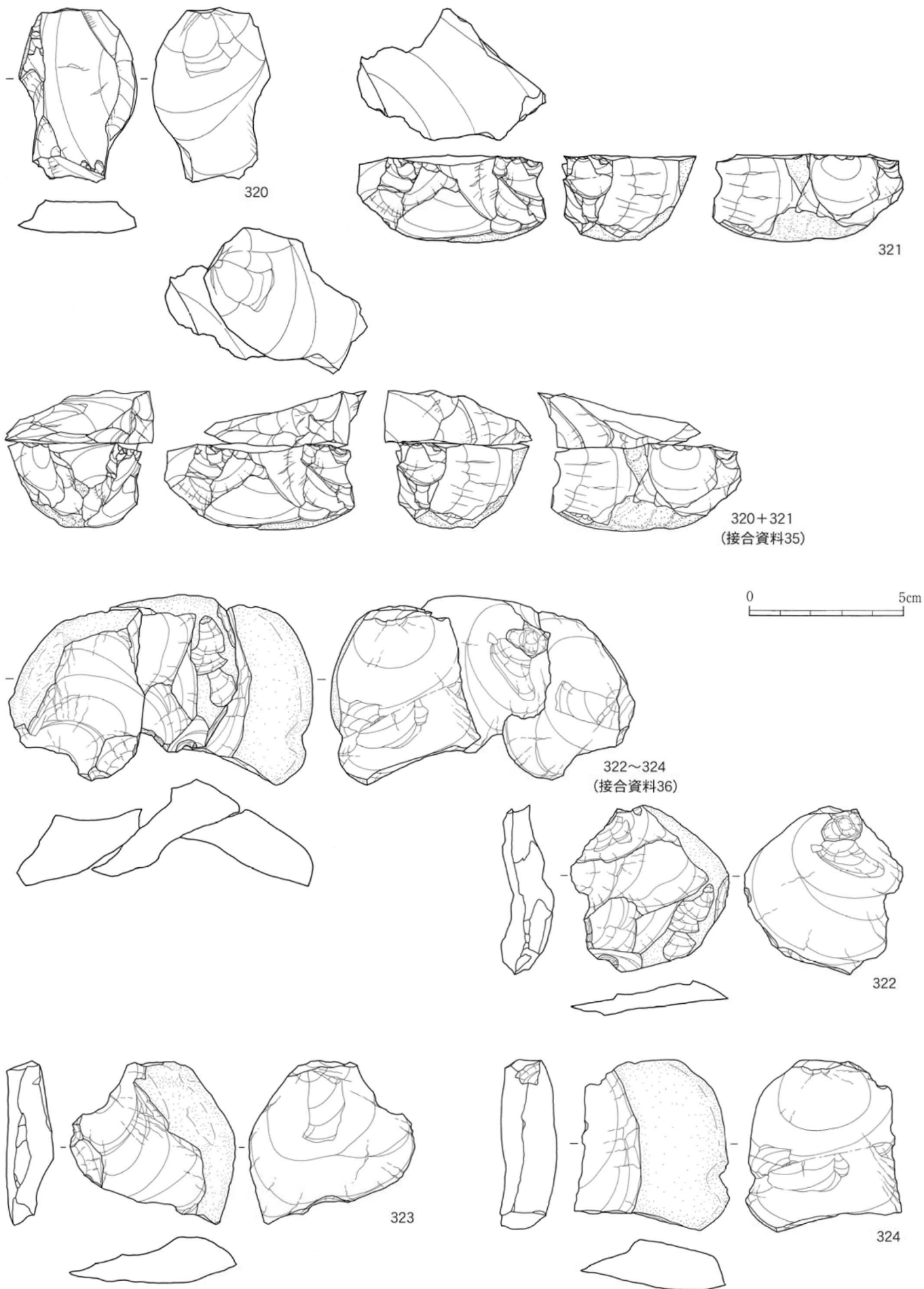
第73図 C・D区出土石器実測図30 (S=3/5)



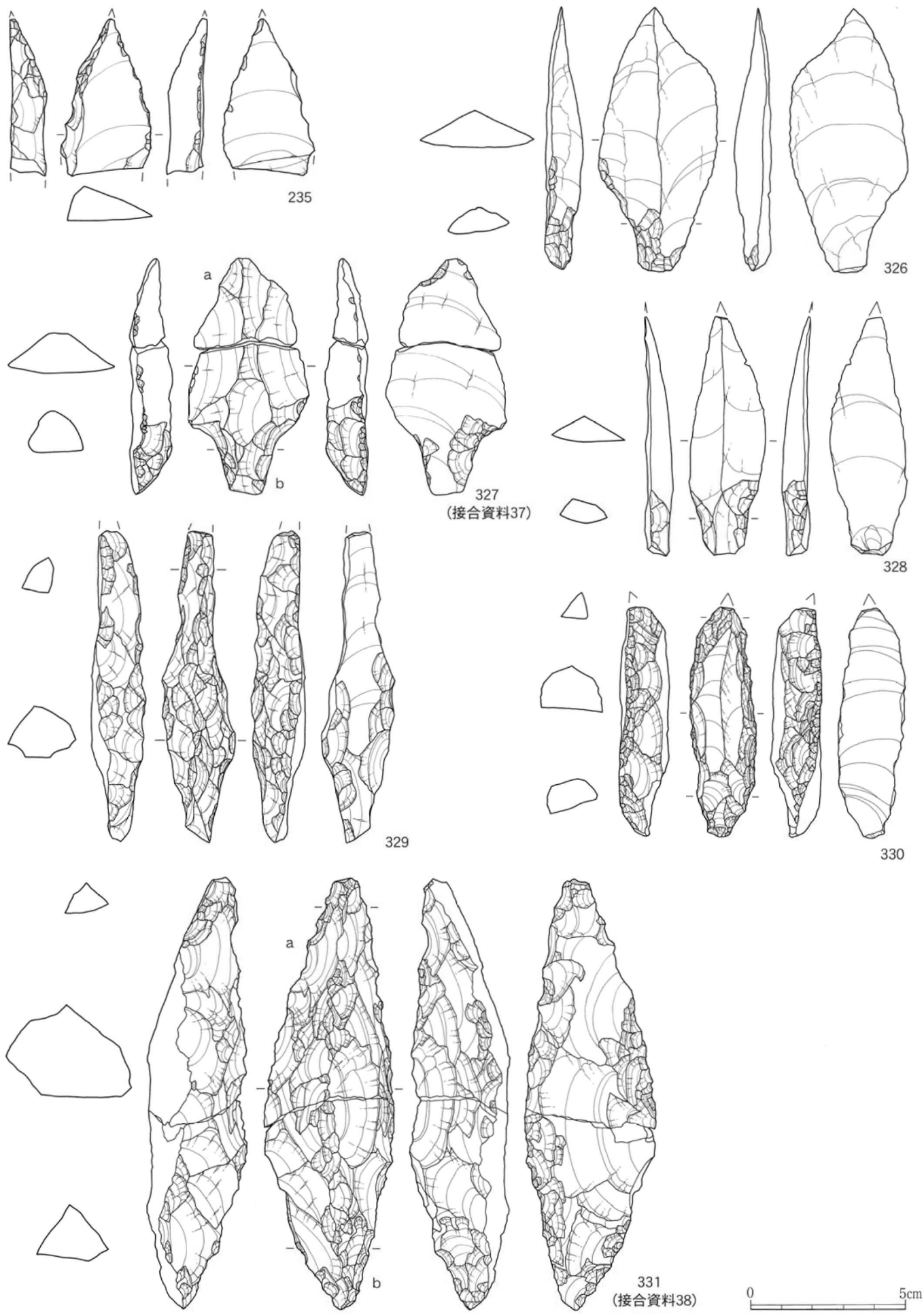
第74图 C·D区出土石器实测图31 (S=3/5)



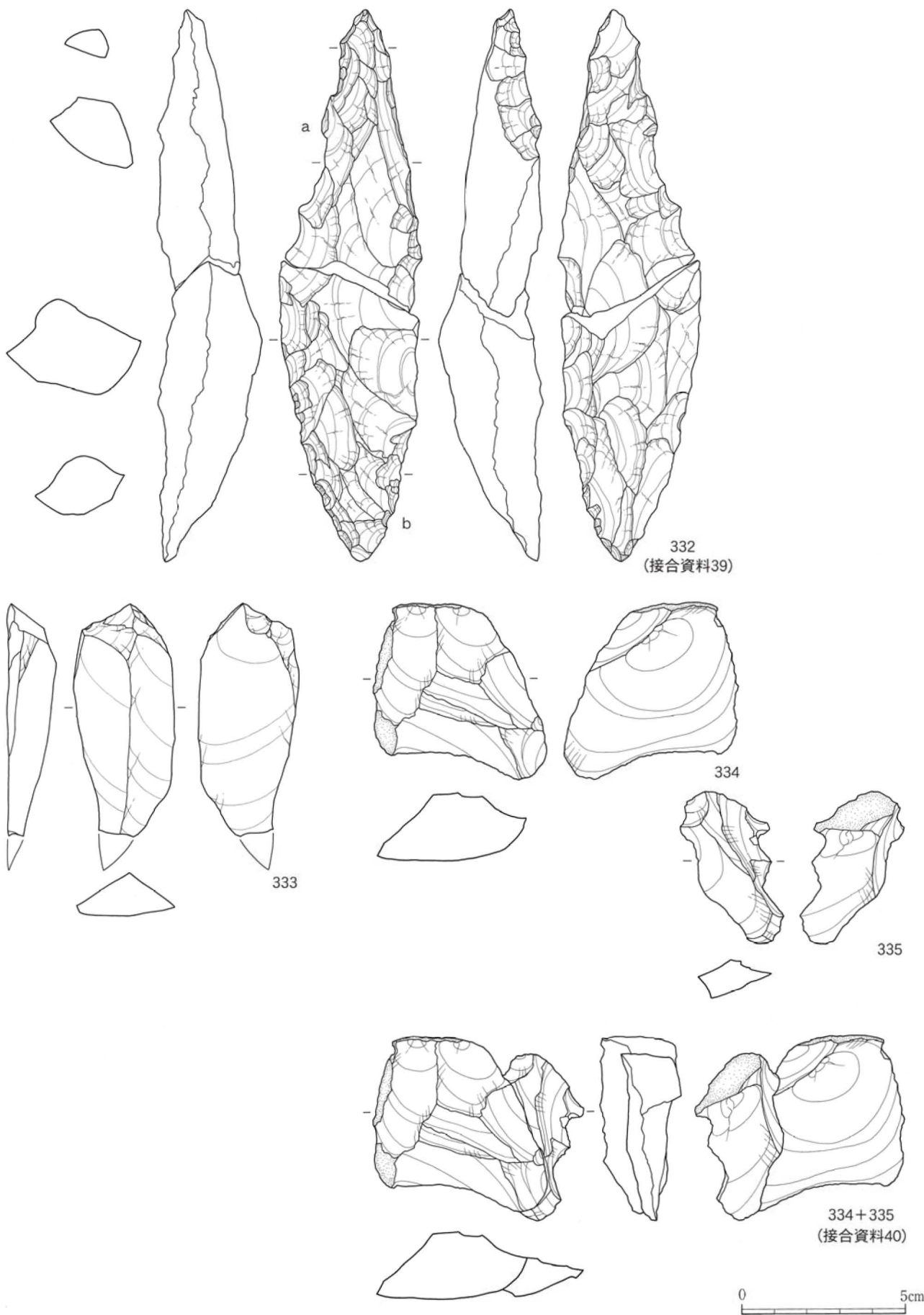
第75図 C・D区出土石器実測図32 (S=3/5)



第76図 C・D区出土石器実測図33 (S=3/5)



第77图 C·D区出土石器实测图34 (S=3/5)



第78図 C・D区出土石器実測図35 (S = 3 / 5)

やはり中程に調整が及んだ際、アクシデントにより折れてしまっている。断面は菱形に近い形状になっている。

333は一定方向から剥離された縦長剥片を素材に打面側に主要剥離面側と表面の交互に剥離を行い、彫刀面を作り出している。

接合資料40は剥片（334・335）同士の接合例である。打面を転移させながら、剥片剥離を行い、上方の礫面に打面に移し、剥片剥離を行い、334・335を剥出している。

#### 頁岩 I（第79図・第80図、第18表・第19表）

いわゆる黒色頁岩と呼称される石材で、白色の雲状風化が明瞭に入るものや珪質が強いものも含まれている。分布はC1～C3区、D1区で出土しているが、D1区ブロック2（F・4～F・5グリッド）内で集中する以外は、散発的である。

336・337はエンドスクレイパーである。どちらも縦長剥片を素材にしており、336は末端部のみ加工を施しているのに対し、337は両側縁から打面まで加工が及び、基部を作り出している。

338は剥片素材の石核で、表面側を打面にして、打面調整後、横長剥片を剥出している。

接合資料41は、剥片同士（339・340）の接合例。339と340の打面の高さが違うことから、339を剥離後、石核に打面調整を行い、再度その面から340を剥離したものと考えられる。また339はツインバルブを有し、左側の打面部分を表面から剥離している。なお、表面に複数認められる剥離は339剥離前なのか、剥離後なのかは不明である。338と同一母岩である。

接合資料42も、剥片同士（341・342）の接合例である。右から左へ、打面を動かしながら、連続して剥片を剥離し、341を剥出後、打面を後退させて342を剥離している。

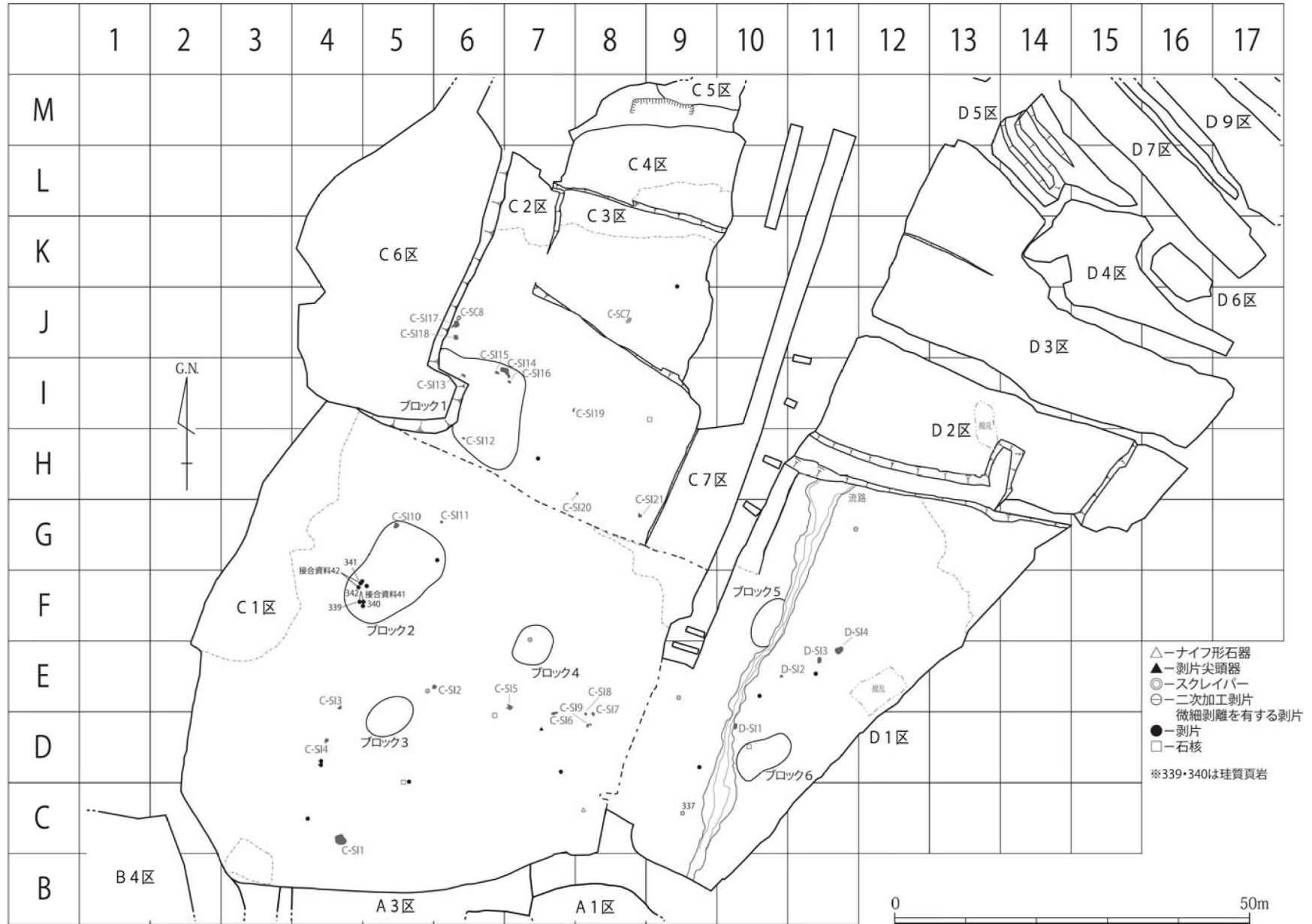
#### 頁岩 II類（第81図～第84図、第19表）

いわゆる赤色頁岩と呼称される石材で、礫面はオリーブ黒色～黄褐色を成し、剥離面は暗赤褐色～にぶい赤褐色を呈し、珪質化している。なかには白色の雲状風化が明瞭に入るものも認められる。

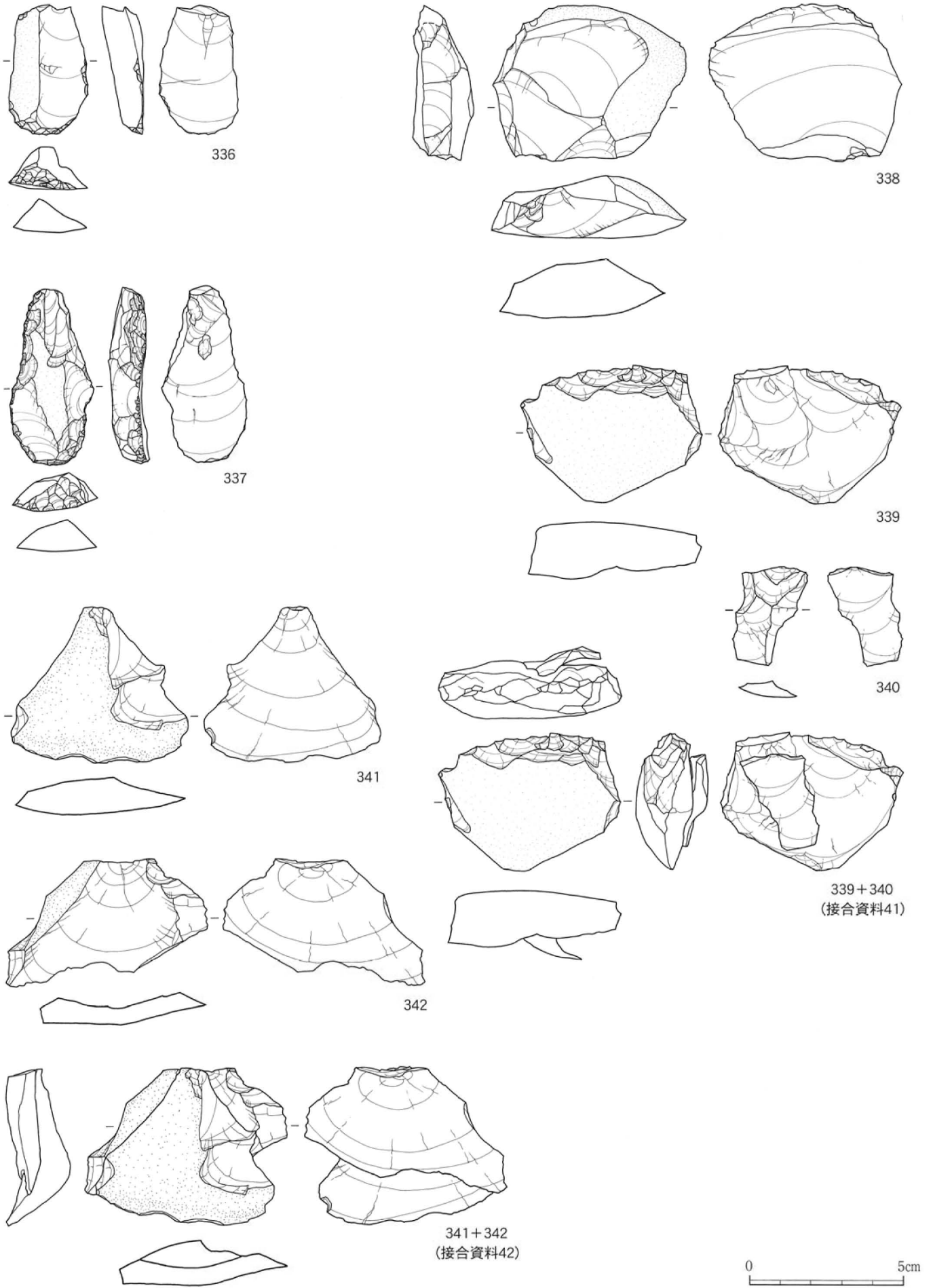
石器はIV層中、総数25点出土している。分布は主にC2区ブロック1（I・6～I・7グリッド）内を中心に分布し、その内訳はサイドスクレイパー1点、二次加工剥片2点、微細剥離を有する剥片4点、剥片12点、石核6点である。接合資料は1例のみである。

接合資料43（344～351）は二次加工剥片2点、剥片3点、石核3点で構成されている。、おそらく径15cm以上の大型の原石から剥片剥離が行われたものと考えられる。本資料は熱を受けているため、礫面及び剥離面では熱破砕がいたるところで認められる。まず、礫の一端から剥離を行って、打面を形成し、344の剥離を行った後、345～349（剥片A）を剥出している。剥片Aは、剥出時の打面をそのまま用い、345を剥出している。その345は表裏ともポジ面を有することになるが、表面や他の剥片等では、バルブが発達しているのに対し、主要剥離面側のバルブがあまり発達していないため、偶発的な可能性も捨てきれない。どちらにせよ、その後、表面を打面にして、横長の剥片を剥離している。その後、剥片Aは4分割さる。そのうち348+349は礫面を除去して、その部分を打面に設定して、剥片剥離作業が行い、348を剥離する。その際、力が下方に抜けず、斜め下方に抜けたため、裏面の礫面を約1/4を取り込むように剥出されてしまう。その後、石核からは縦長剥片を1枚剥離しただけで、作業を終了している。

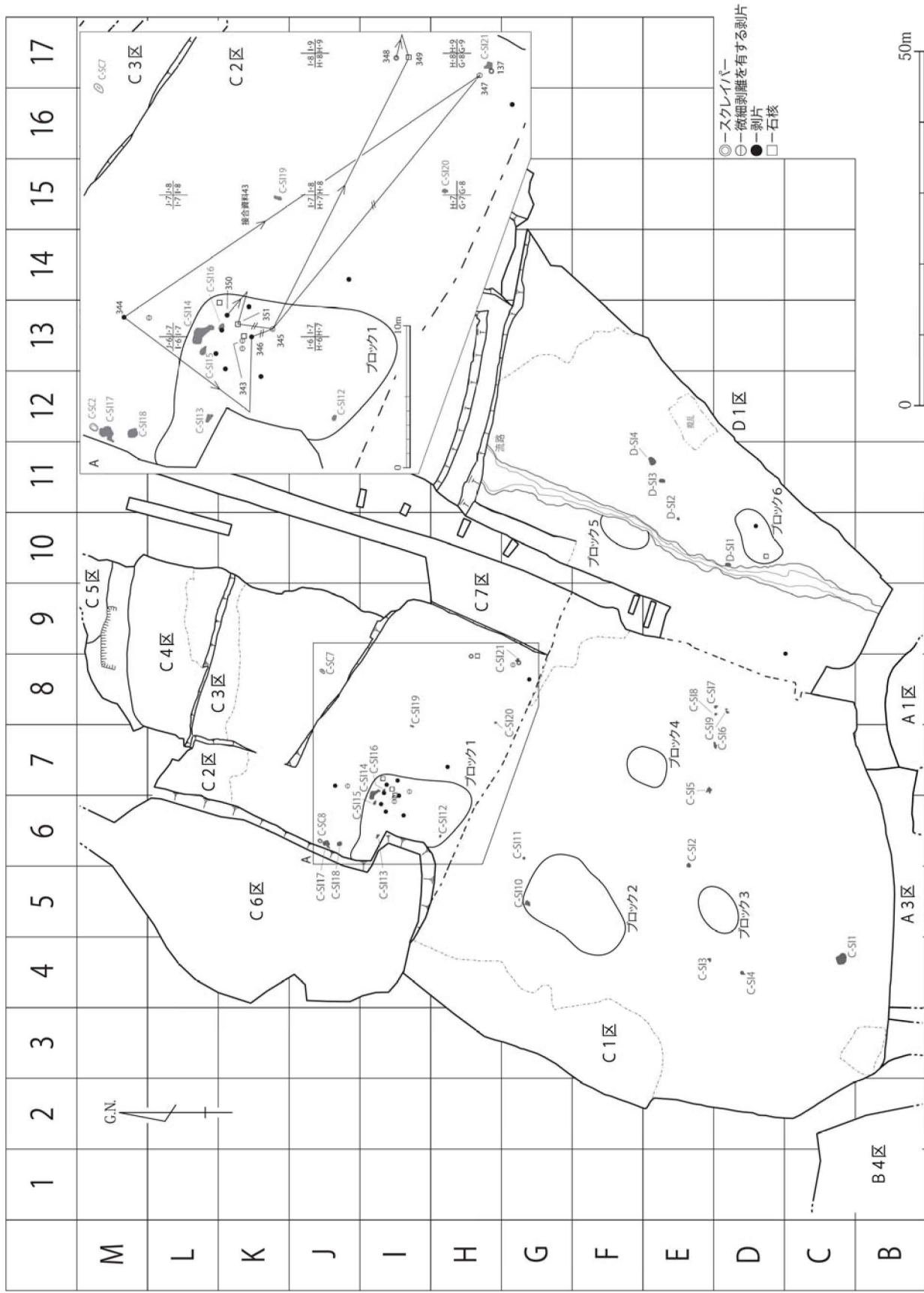




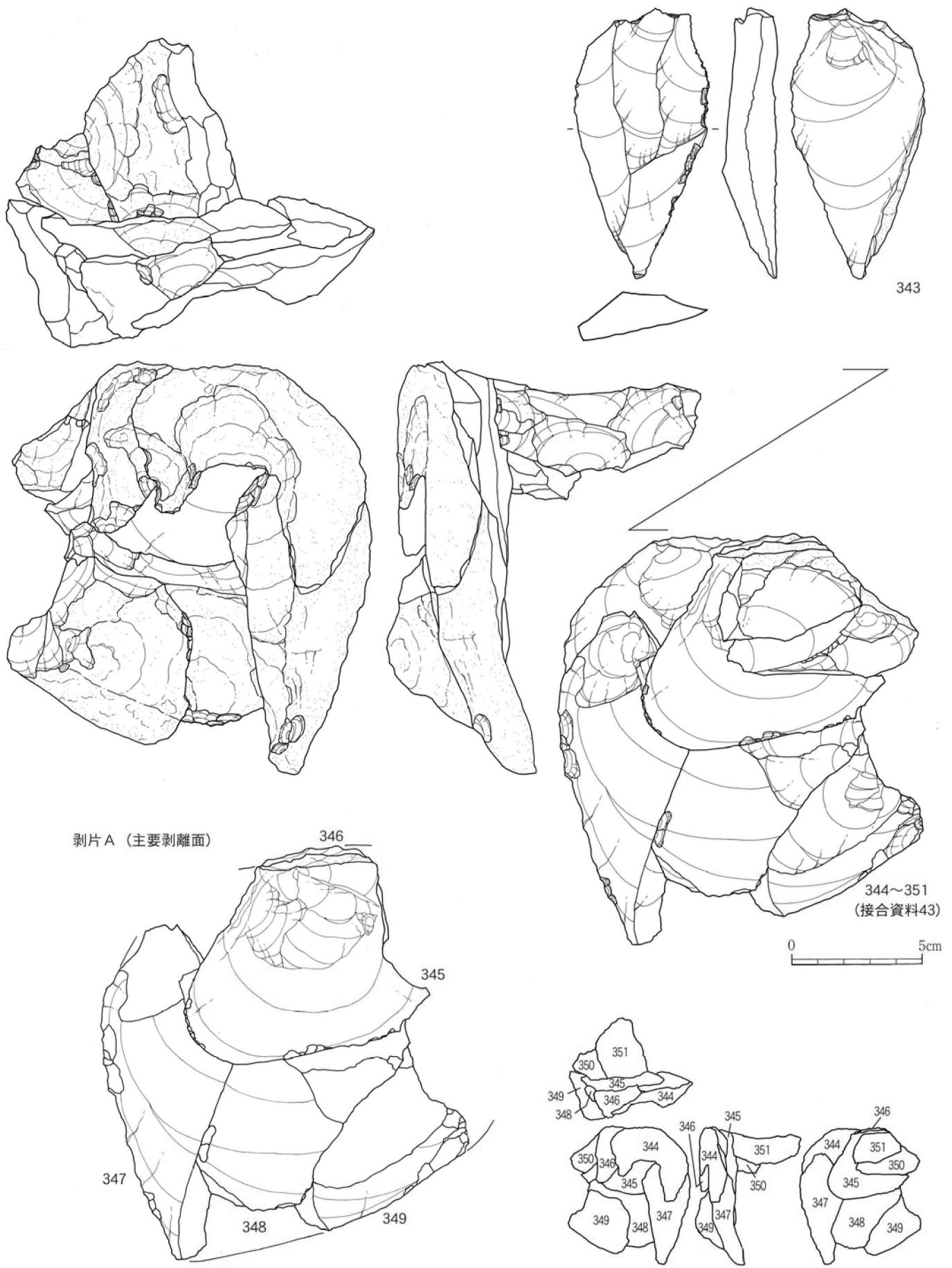
第79図 C・D区 第II文化層遺物分布図 [頁岩I] (S=1/800)



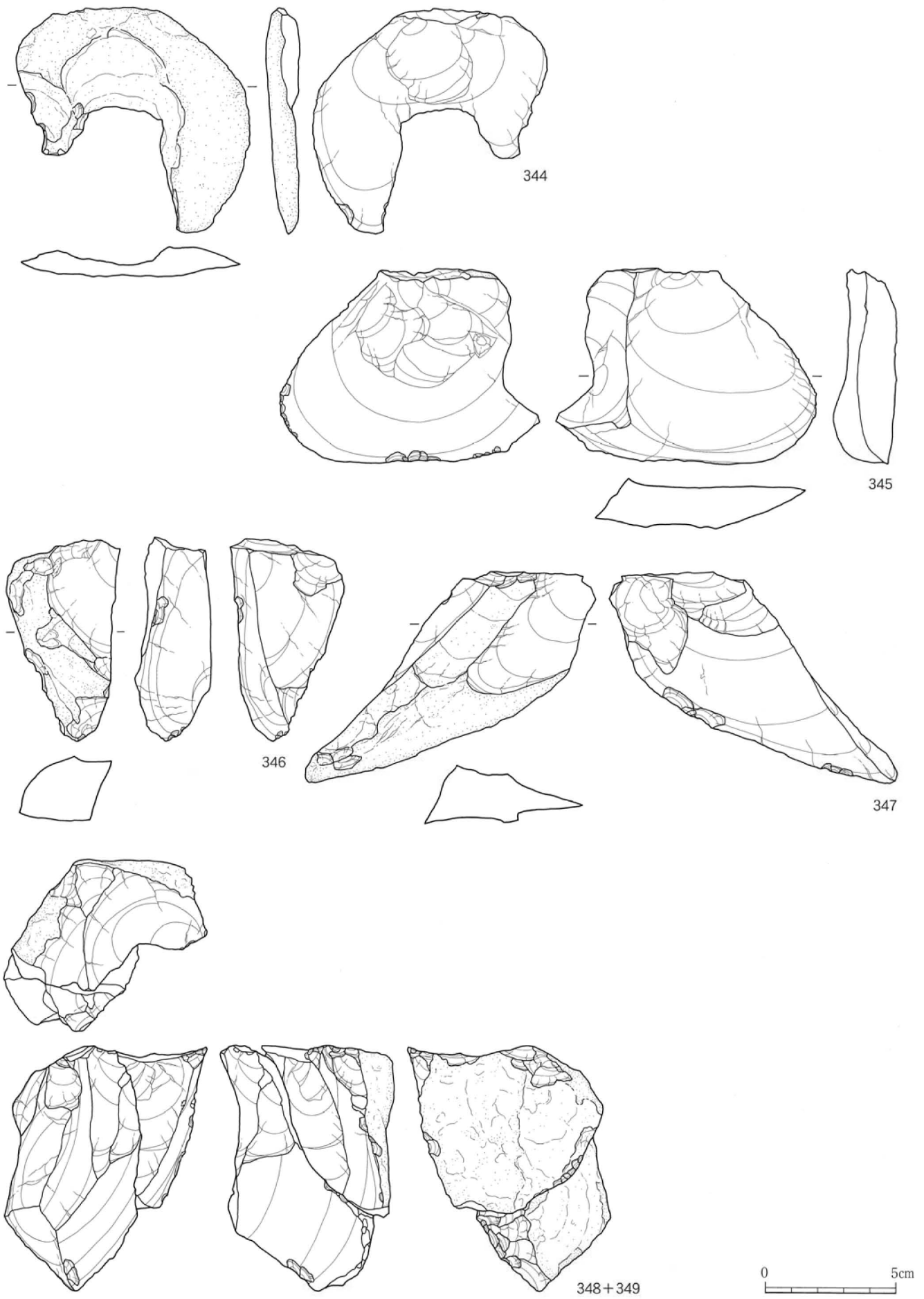
第80图 C·D区出土石器实测图36 (S=3/5)



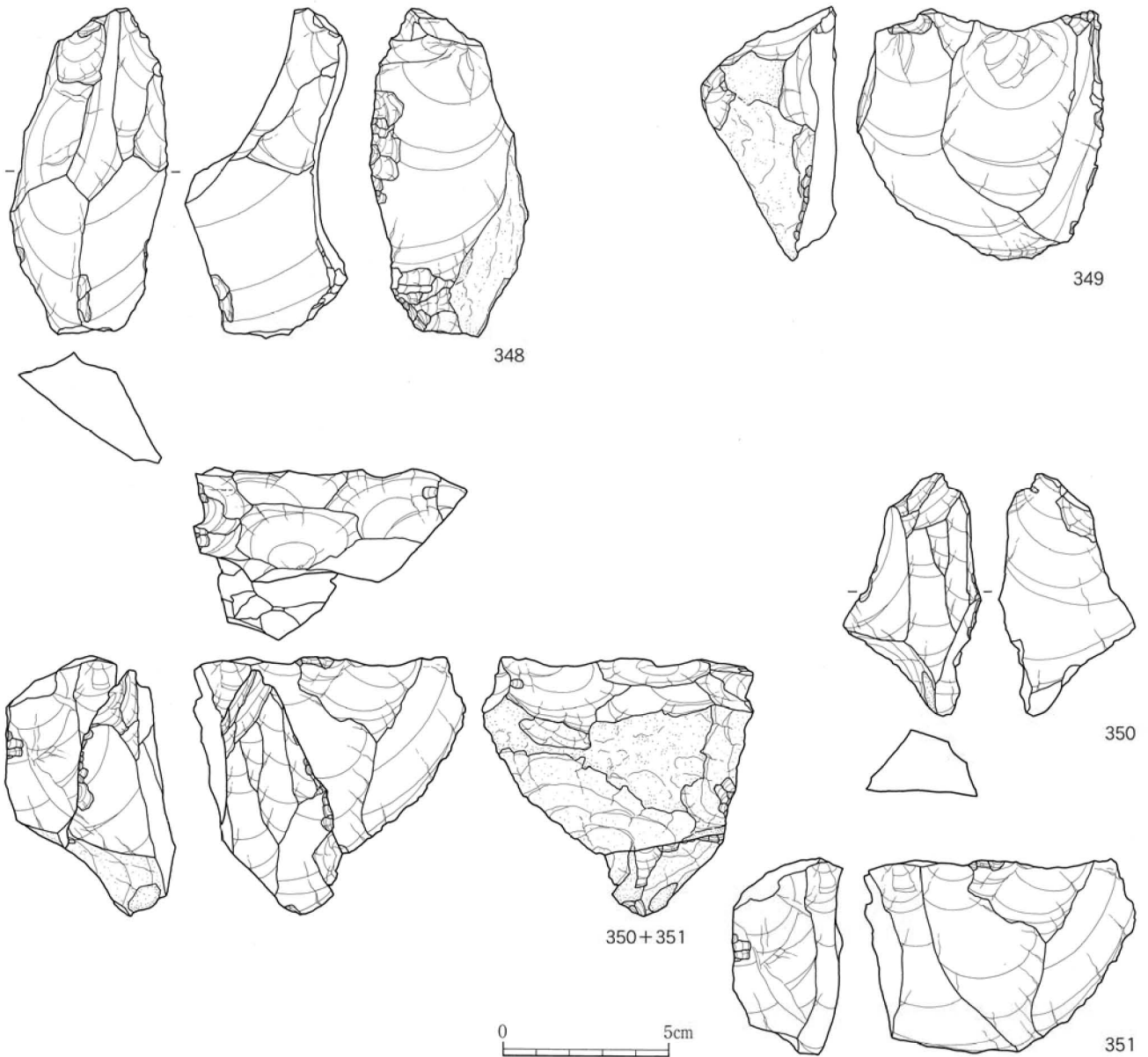
第81図 C・D区 第Ⅱ文化層遺物分布図 [頁岩Ⅱ] (S = 1 / 400, S = 1 / 800)



第82図 C・D区出土石器実測図37 (S=1/2)



第83图 C·D区出土石器实测图38 (S=1/2)



第84図 C・D区出土石器実測図39 (S=1/2)

残された母岩では、さらに分割が進み、350+351が分割され、分割後、剥片剥離作業が行われる。こちらでは打面調整が行われ、4枚の剥片を剥出後、350を剥出するが、こちらも348同様、裏面の一部を取り込むように剥出されてしまう。その後、こちらの石核も縦長剥片を1枚剥離しただけで、作業を終了している。

343は接合しなかったが、接合資料43と同一母岩である。表面右下部にポジ面が認められることから、同様の剥離工程から作出されたものと考えられる。なお、右側縁には微細な剥離痕が認められる。

チャートI類 (第85図・第87図・第88図、第19表)

剥離面は灰色を呈し、部分的に白色の筋や縞が認められる。総数7点が出土し、その内訳はナイフ形石器1点、剥片6点である。分布は主にD1区ブロック5内でまとまって出土している。

352はナイフ形石器である。縦長剥片を素材に主要剥離面より、左側縁に加工が施されている。なお、先端は欠損している。

接合資料44は打面転移を行いながら、剥片剥離を行った剥片同士（353・354）の接合例である。打面を作出後、そこより剥片剥離を行い、打面を90°転移し、連続的に353→354を剥出している。

#### チャートⅡ類（第85図・第87図・第88図、第19表）

剥離面は青灰色を呈し、オリーブ灰色～オリーブ黒色の縞が入るものを一括した。総数8点が出土し、その内訳は角錐状石器1点、エンドスクレイパー1点、剥片6点である。C2区ブロック1やC1区ブロック2内でわずかに認められる。

355は角錐状石器である。三面加工が施され、先端は入念に加工が施されている。356はエンドスクレイパーである。幅広の剥片を素材に打面側及び末端に刃部が形成されている。

#### チャートⅢ類（第85図・第87図・第88図、第19表）

剥離面はオリーブ灰色を呈し、部分的に明るい縞やオリーブ黒の筋が入るものを一括した。総数8点が出土し、その内訳はナイフ形石器1点、剥片5点、石核2点である。分布は主にC2区ブロック1やC1区ブロック2内でわずかに認められる。

357は打面を転移しながら剥離された斜軸剥片を素材に、器軸を打面端部くるように傾け、左側縁の約1/3に主要剥離面から加工を施している。なお、刃部には微細な剥離痕が認められる。いわゆる今峠型ナイフ形石器である。

358は打面を転移しながら剥出された幅広の剥片である。

359は石核である。打面を転移しながら剥片剥離を行っている。作業が進行し、多角形を呈する。

#### チャートⅣ類（第85図・第87図・第88図、第19表）

剥離面は青灰色を呈し、白色の筋が部分的に入るものを一括した。総数6点が出土し、その内訳は剥片5点、石核1点である。

接合資料45は剥片（360）と石核（361）の接合例である。上下の縁周に沿って、打面を交互に入れ替えながら、剥片剥離を行い、360等の幅広の剥片を作出している。

#### チャートⅤ類（第85図・第87図・第89図、第19表）

礫面及び剥離面は暗灰色を呈し、部分的に黒色の縞や筋等が入る。総数6点が出土し、その内訳はエンドスクレイパー1点、剥片4点、石核1点である。その殆どがD1区D・11グリット北側の出土である。

362はエンドスクレイパーである。縦長剥片を素材に主要剥離面より末端に弧状の刃部を作り出している。

363は二次加工剥片である。剥離面の状況より、打面再生剥片を素材にしている。末端部右端から右側縁に不規則な剥離が認められる。

364は石核である。礫を分割し、その面を打面に設定して、正面で剥片剥離作業をおこなっている。剥離の状態から幅広の剥片を剥出したものと考えられる。

#### チャートVI類（第85図・第87図・第89図、第19表）

特徴が上記以外のものや単独出土のものを一括した。総数22点出土している。

365は台形石器で、石材は極暗赤褐色を呈する。幅広の剥片を素材に、打面を横位に置き、両側縁に主要剥離面から加工を行っている。また、主要剥離面にも一部、加工が認められる。

366は角錐状石器である。石材は暗緑灰色を呈し、白色や黒色の筋が認められる。三面とも加工が施され、稜上にも調整が認められる。側縁も細かな調整が認められ、比較的丁寧な作りである。先端部は欠損している。

#### 安山岩（第86図・第87図・第89図、第19表）

2点の出土で、その内訳は角錐状石器1点、剥片1点である。分布はC1区C・5グリッド及び、D1区ブロック5内でそれぞれ出土している。

367は小型の角錐状石器である。断面が逆台形を呈し、平坦な面には稜上水平調整が認められる。

#### 黒曜石I類（第86図・第87図・第89図、第19表）

鉛色を呈し、不純物をあまり含まず、透明度が高い。これらの特徴から桑ノ木津留産黒曜石と考えられる。総数5点で、その内訳はナイフ形石器1点、二次加工剥片1点、剥片1点、石核2点である。分布はC1～C3区、D1区でそれぞれ確認されている。

368はナイフ形石器である。幅のある縦長剥片を素材にして、打面側を基部に置き、右側縁は全体に主要剥離面より剥離が行われている。また左側面の基部側は折り取られ、上方まで剥離が続く。

369は石核である。上面に打面を作出して、正面で剥片剥離を行っている。作業はあまり行われず、剥片を3枚剥出したにすぎない。なお、裏面には礫面を残している。

#### 黒曜石II類（第86図・第87図・第89図、第19表）

黒色を呈し、比較的透明度が高いが、不純物を多く含む。上記の特徴から日東系黒曜石と思われる。総数4点で、内訳は剥片2点、石核2点である。その分布はC1区D・4グリッド及びG・5グリッド、D1区では、E～G・12グリッドでそれぞれ確認されている。

370は石核である。打面を頻繁に転移させながら、剥片剥離を行っている。

#### 黒曜石III類～V類

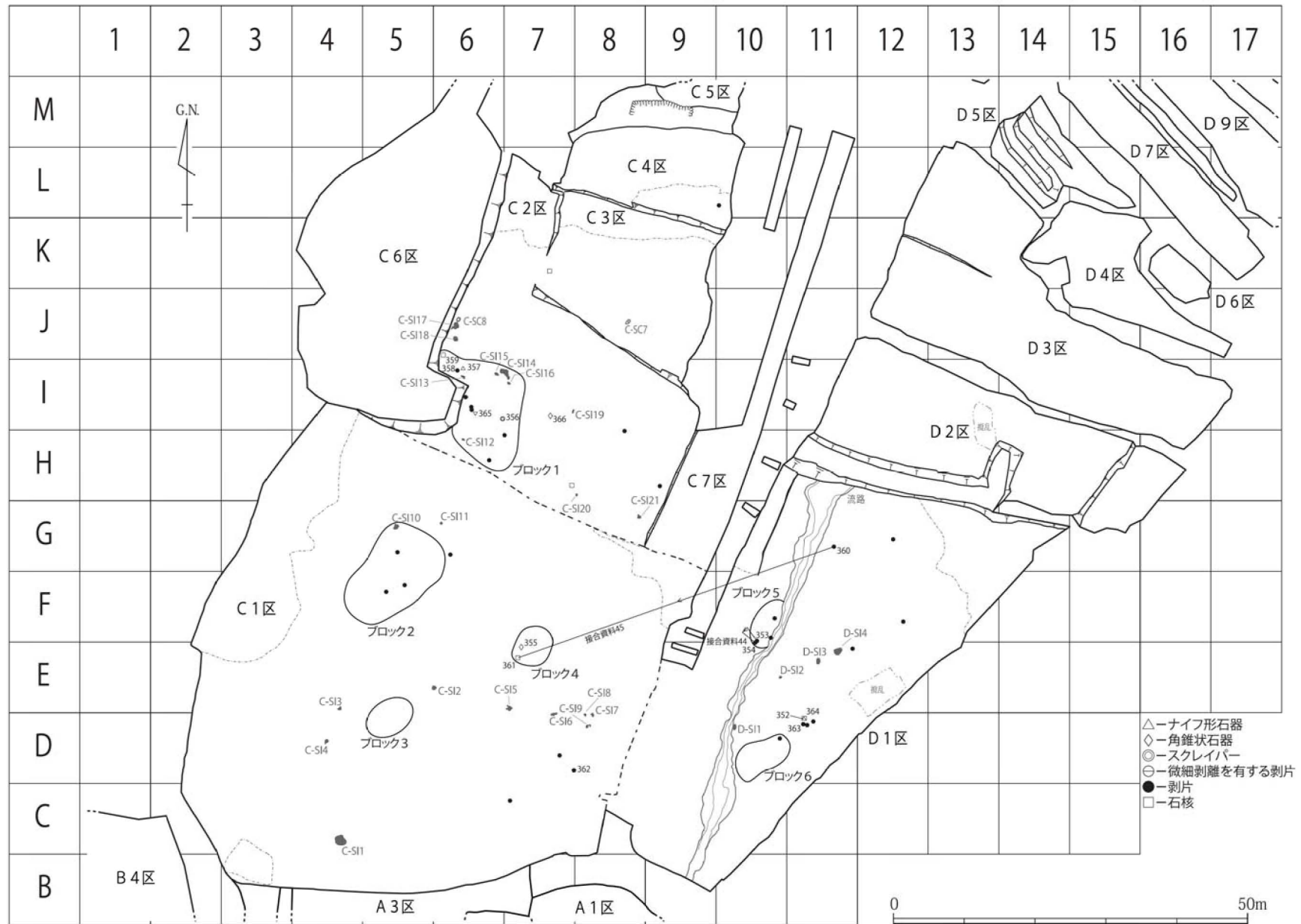
III類は透明度が比較的あり、黒色の縞模様が認められる。腰岳産と思われる。微細剥離を有する剥片1点、剥片1点の計2点出土している。IV類は透明度がなく、艶消し状を呈する。上牛鼻産か？、剥片が2点出土している。V類はさび黒曜石と呼ばれている。

#### 砂岩（第90図・第91図、第19表）

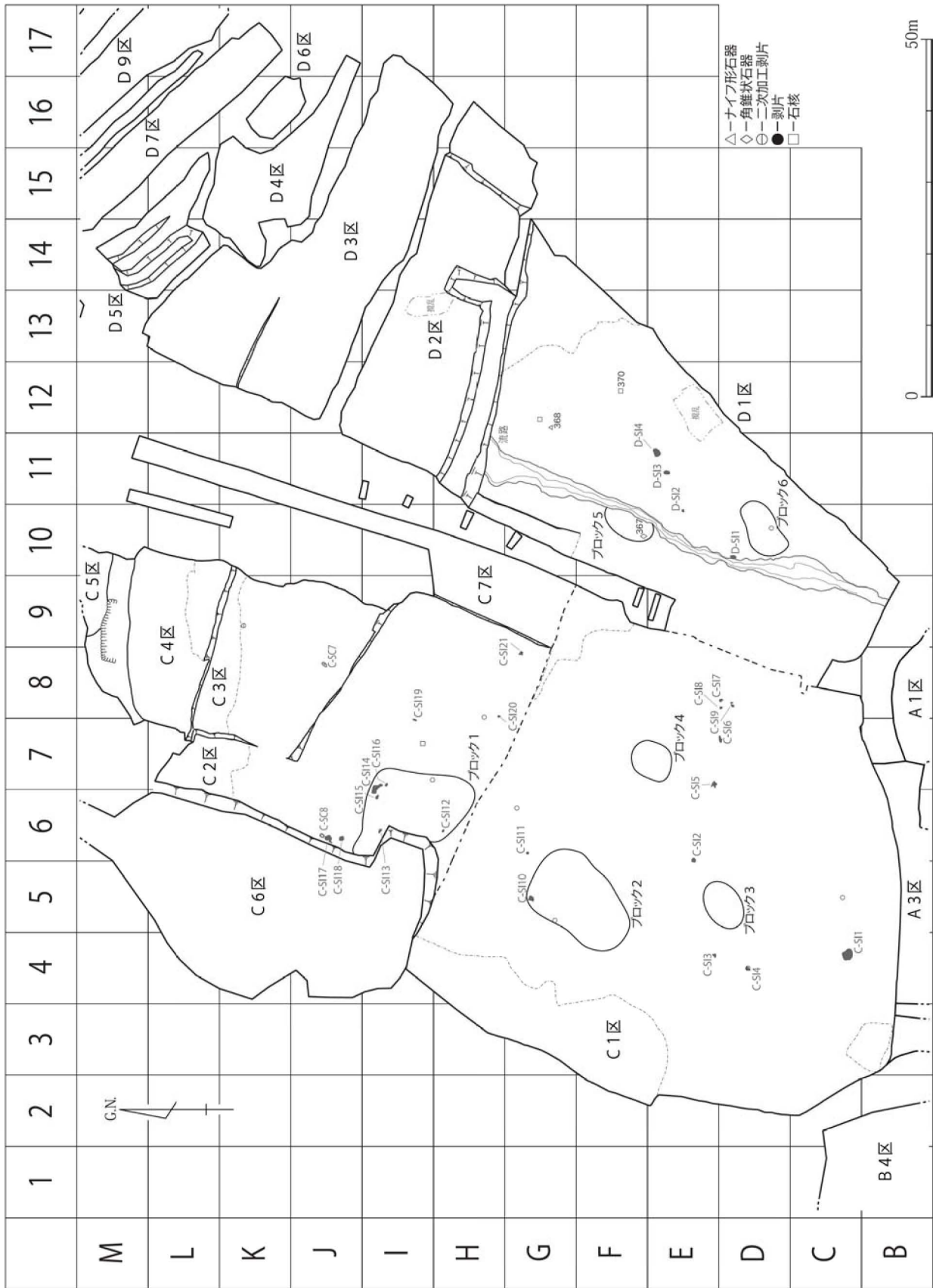
主に、礫塊石器として利用されている。石器は11点出土し、内訳は敲石8点、磨石3点である。372がC1区ブロック2内、374はC2区ブロック1内で確認されている。

敲石は平面形が扁平な楕円礫を利用し、一端に敲打痕が認められるもの（371・372）と棒状礫を利

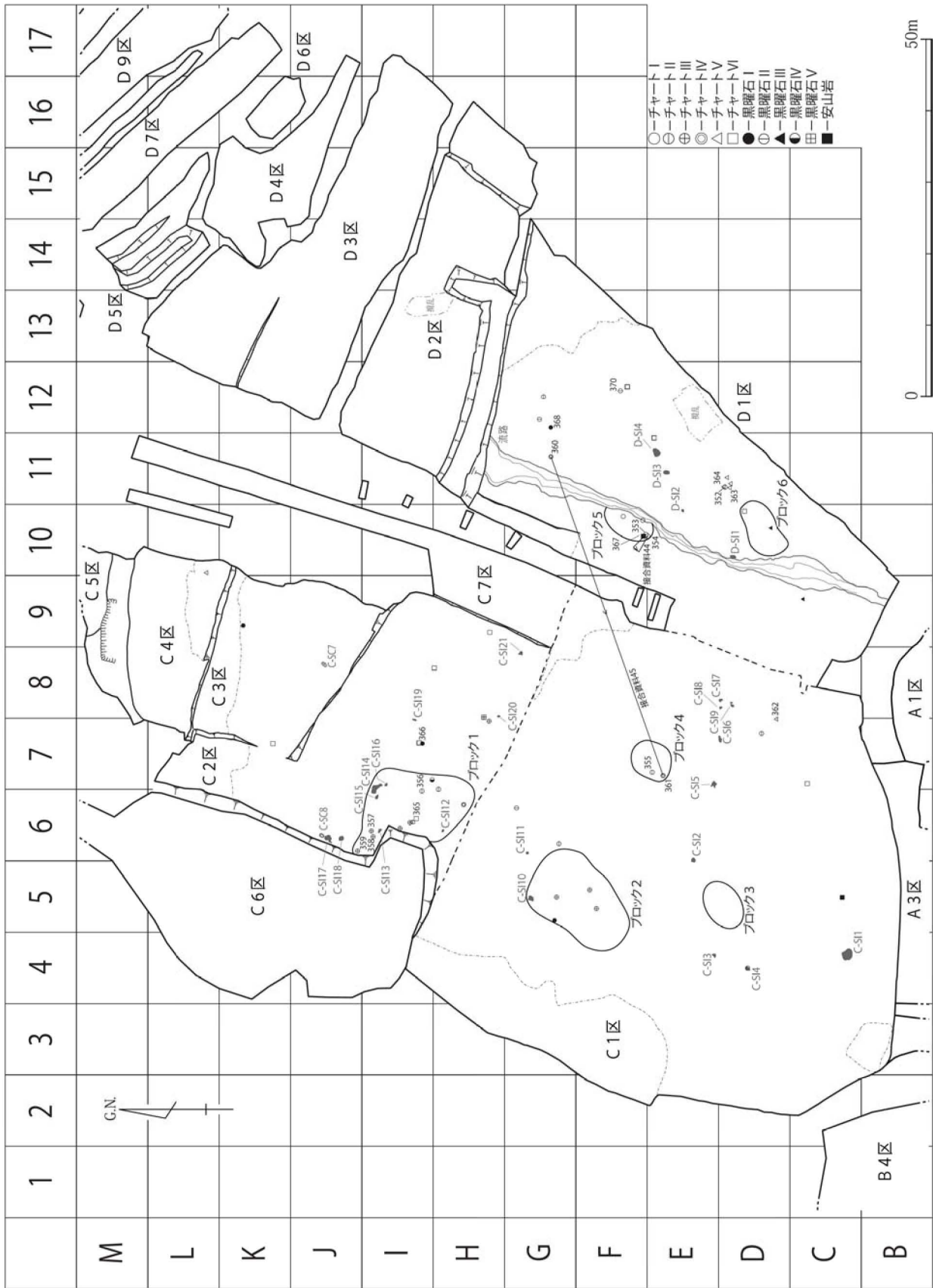




第85図 C・D区 第Ⅱ文化層遺物分布図 [チャート] (S=1/800)



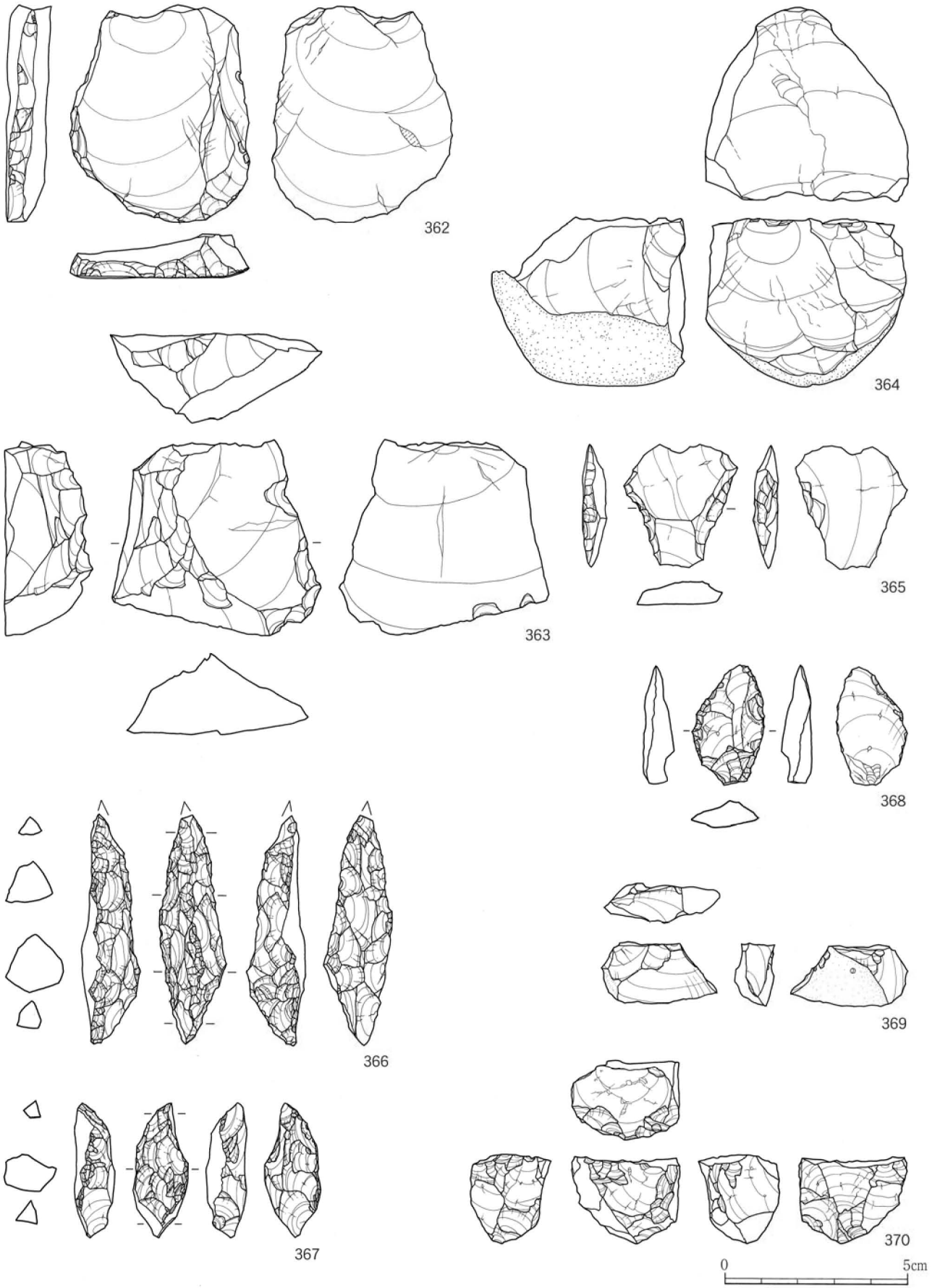
第86図 C・D区 第Ⅱ文化層遺物分布図 [黒曜石・安小岩] (S=1/800)



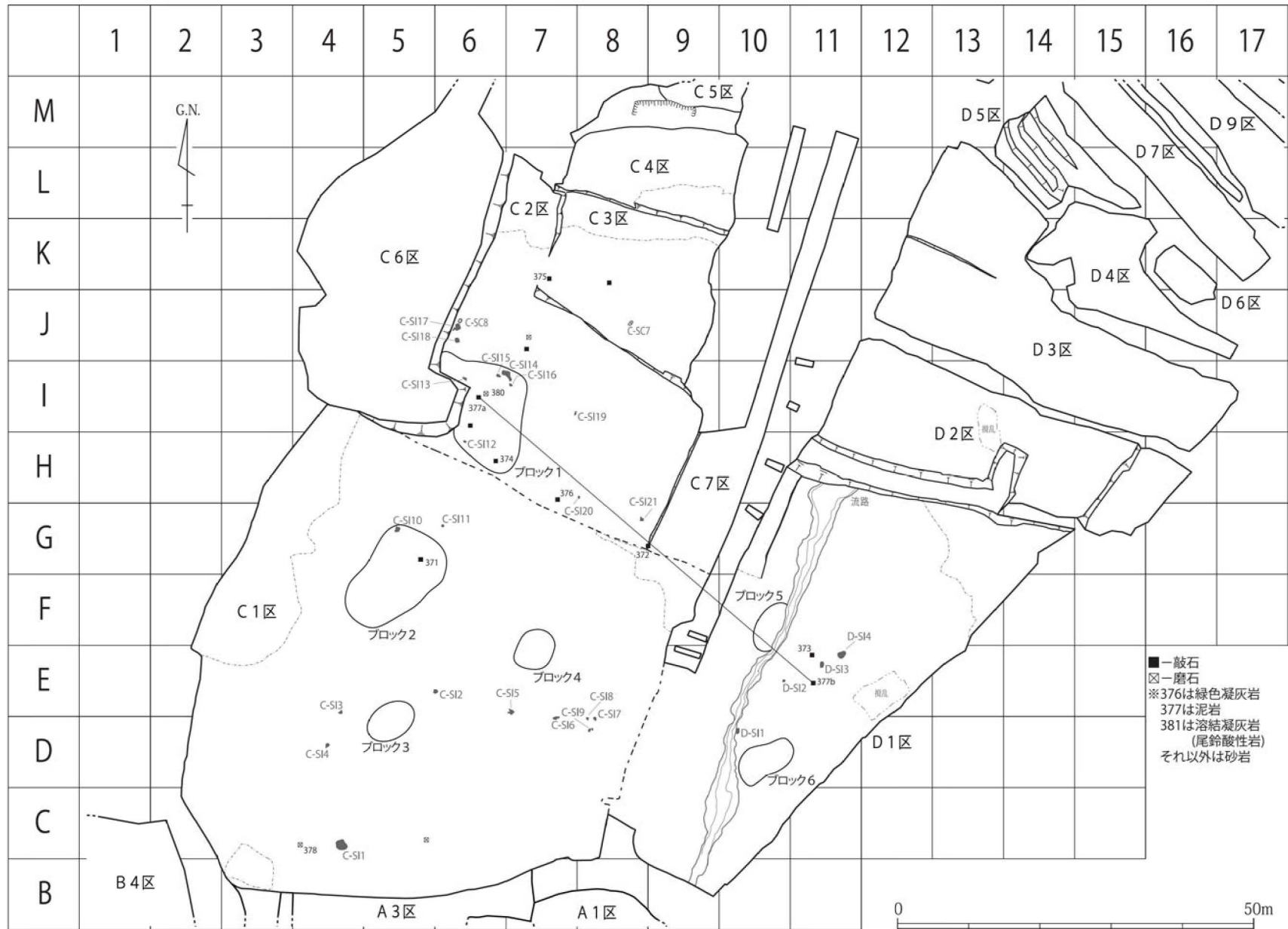
第87図 C・D区 第Ⅱ文化層遺物分布図【石材別】(S=1/800)



第88図 C・D区出土石器実測図40 (S=2/3)

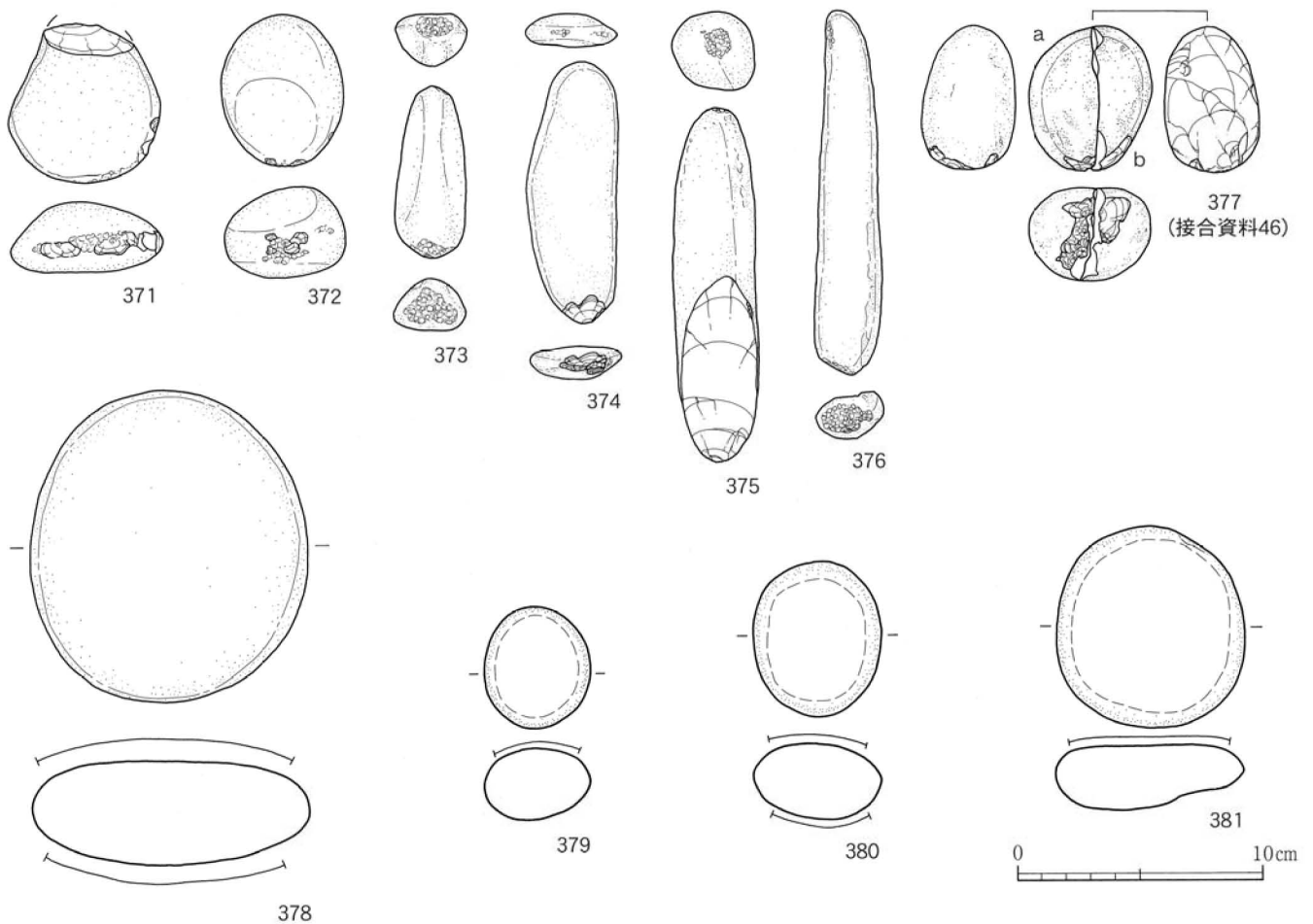


第89图 C·D区出土石器实测图41 (S=2/3)



第90図 C・D区 第II文化層遺物分布図 [砂岩ほか] (S = 1 / 800)

■ 一敲石  
 ☒ 一磨石  
 ※376は緑色凝灰岩  
 377は泥岩  
 381は溶結凝灰岩  
 (尾鈴酸性岩)  
 それ以外は砂岩



第91図 C・D区出土石器実測図42 (S=1/3)

用し、両端に認められるもの(373~375)とに分かれる。そのうち371は敲打によるつぶれと剥離により、帯状を呈する。374では上端にあまり敲打によるつぶれが認められないのに対し、下端はつぶれと剥離が認められる。375の下端は敲打による衝撃で割れてしまっている。

磨石は扁平な礫を利用し、両面に磨面が認められるもの(378)と片面に磨面が認められるもの(379)とが確認されている。ただし、378は磨面があまり明確でない。

#### 緑色凝灰岩(第90図・第91図、第19表)

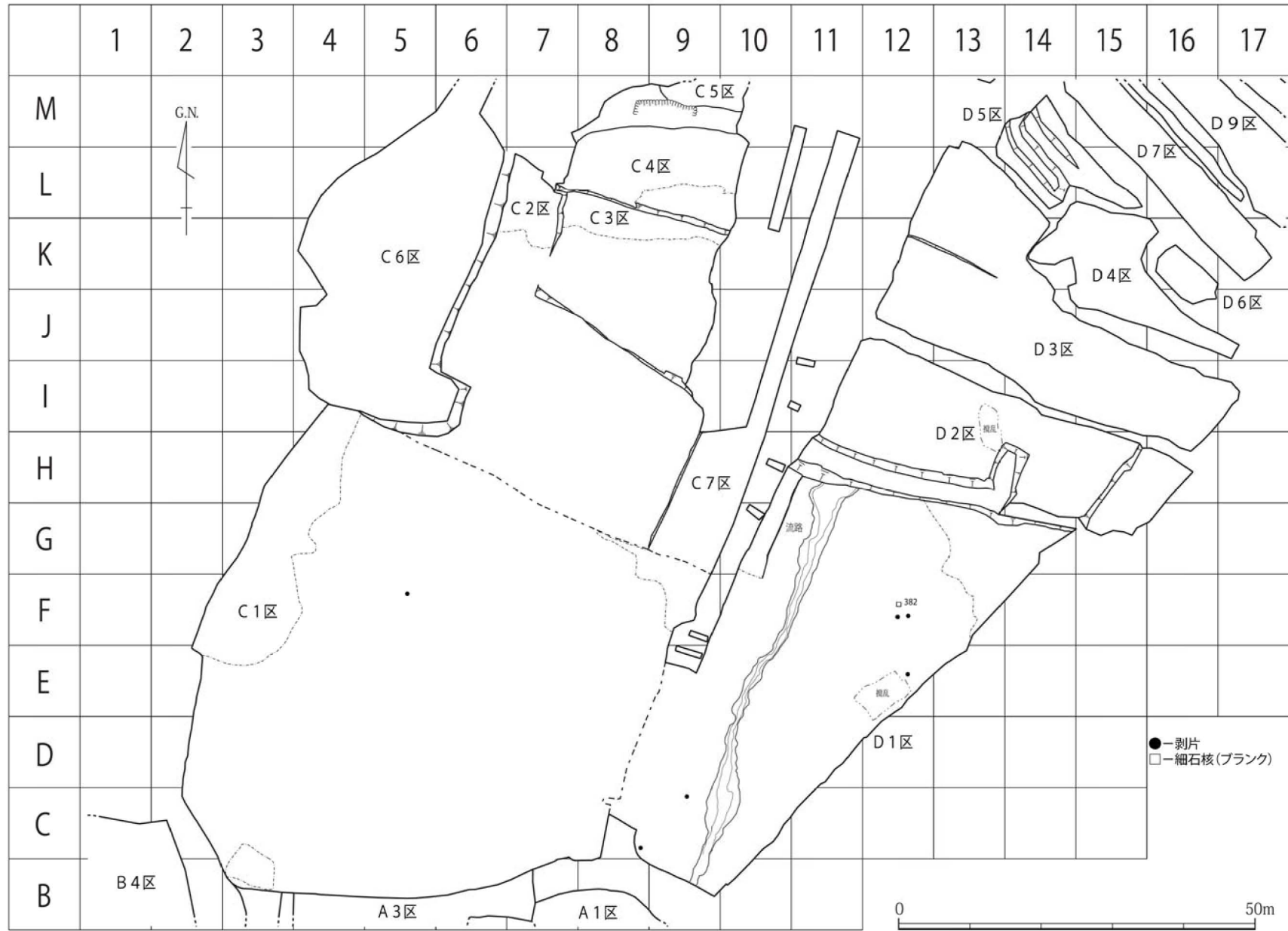
1点のみの出土である。376は細長い棒状を呈する礫を利用し、下端に敲打によるつぶれが認められる。上部端付近にも、わずかに敲打痕が認められる。

#### 溶結凝灰岩(第90図・第91図、第19表)

別名、尾鈴山酸性岩。3点確認されている。すべて磨石で、C1区~C2区、C4区でそれぞれ出土し、そのうちC2区のもの、ブロック1内で出土している。380は両面、381には片面に、それぞれ不明瞭な磨面が認められる。

#### 泥岩(第90図・第91図、第19表)

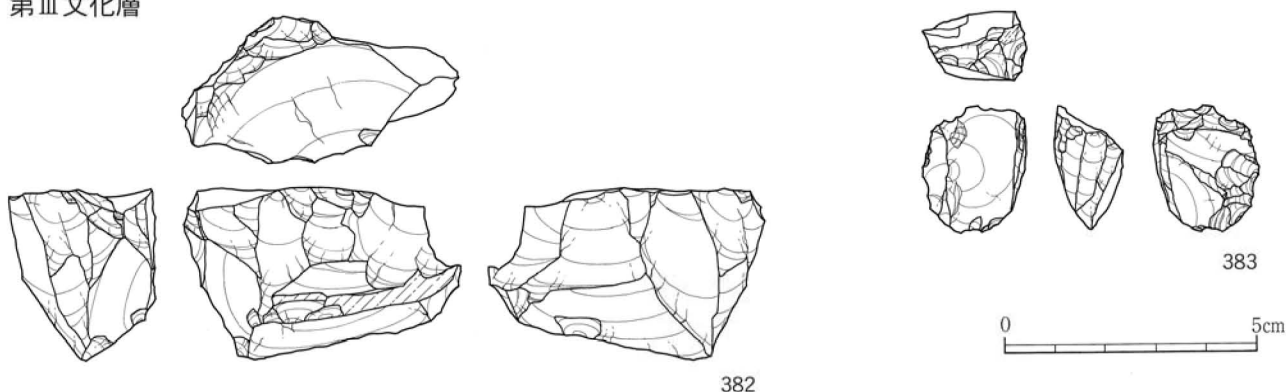
艶消し状の灰色を呈し、緻密。礫面及び剥離面には0.1mm~5mm程度の白色粒(化石?)を多く含む。



第92図 C・D区旧石器時代第Ⅲ文化層遺物分布図 (S = 1 / 800)



### 第Ⅲ文化層



第93図 C・D区出土石器実測図43 (S=2/3)

377は敲石で、C 2区ブロック 1内とD 1区E・11グリッドでそれぞれ出土し、約70m離れて接合している（接合資料46）。卵状の円礫を素材にして、端部に敲打による剥離やつぶれが認められる。2分割されているが、敲打による衝撃で割れたものと考えられる。

### 3. 第Ⅲ文化層（第92図・第93図、第19表）

細石刃石器群の時期に相当する時期で主にⅢ層下部～Ⅳ層上部で確認されている。その内訳は細石核 2点と剥片 6点である。分布はD 1区F・12グリッドで比較的まとまる以外は、まばらである。また383以外は、同一石材である。

382は明確な細石刃剥離が行われていないため、ブランクである。厚みのある剥片を素材に主要剥離面を打面に設定し、打面から側面調整を行っている。断面形は船底状を呈する。上記の特徴から船野型細石核と考えられる。なお、打面の右側面側には剥離が認められるが、調整によるものかは不明である。流紋岩V類製。

383は細石核である。主要剥離面を側面に置き、左側縁に主要剥離面から調整を行って打面を形成し、その後、末端部を作業面にして、作業面より打面調整を行い、その面より細石刃を剥出している。この細石核は、阿蘇原上遺跡でも類例がみられる。チャートV製。

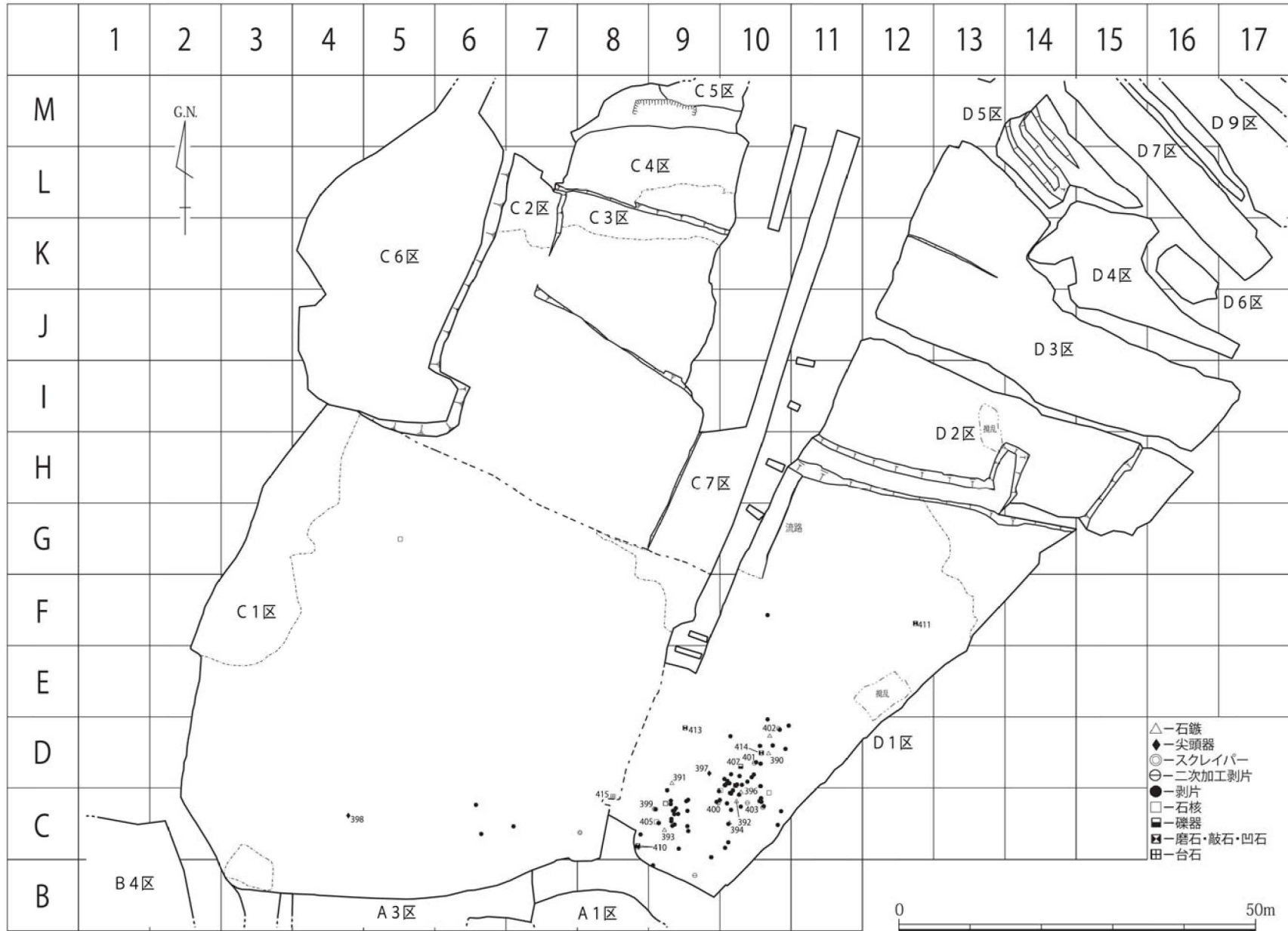
## 第2節 縄文時代の遺物

### 1. 縄文土器（第95図、第20表）

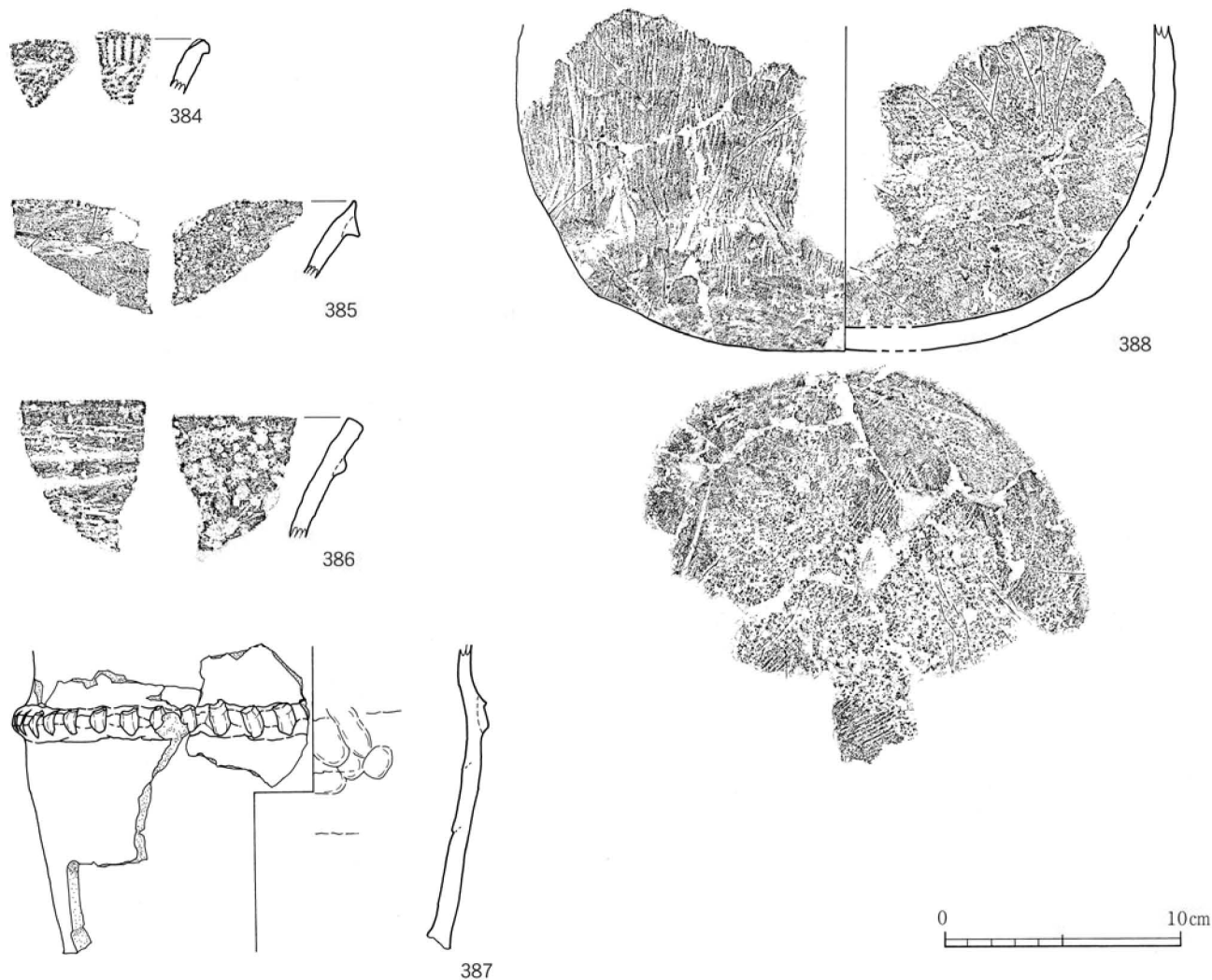
縄文土器は早期と晩期のもものが少量ながら確認されている。その殆どが他遺構への混入や別時代の包含層出土である。

そのうち早期は384の1点のみ確認されている。C 2区のSZ 1内に混入したもので、器形は緩やかに外反するもので、外面には剥落のため、文様については不明瞭だが、おそらく内面同様に押型文が施文されているものと考えられる。内面口唇部直下には柵状を呈する縦位の条痕文とその下位に横走りの小振りな楕円押型文が認められる。時期的には下菅生B式以降のものと考えられ、早期中葉にあてはまると思われる。

晩期についても少数であるが、時期的特徴を示すものを図化した。このうち、385は緩やかに外反す



第94図 C・D区縄文時代遺物分布図 (S = 1 / 800)



第95図 C区出土土器実測図 (S=1/3)

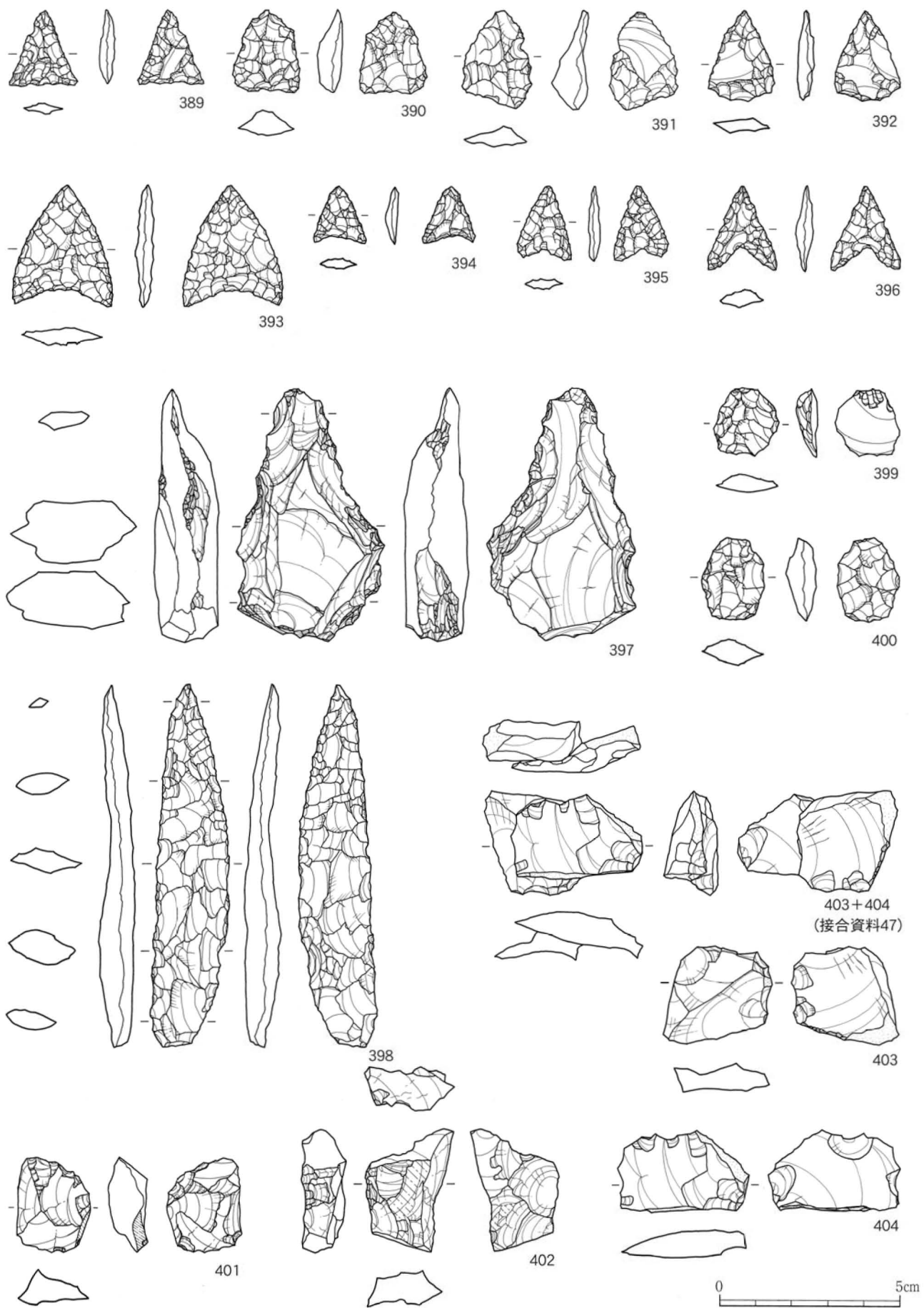
る口縁部片である。口縁部には、同下部を肥厚し、突出させることで、断面三角形を呈する幅広な突帯が巡る。器面にはナデ調整が認められる。

386は緩やかに外反する口縁部片で、口縁部下には幅狭な断面U字状の貼付突帯が巡る。器面には貝殻による条痕調整の後、その上をナデによる調整が施されている。

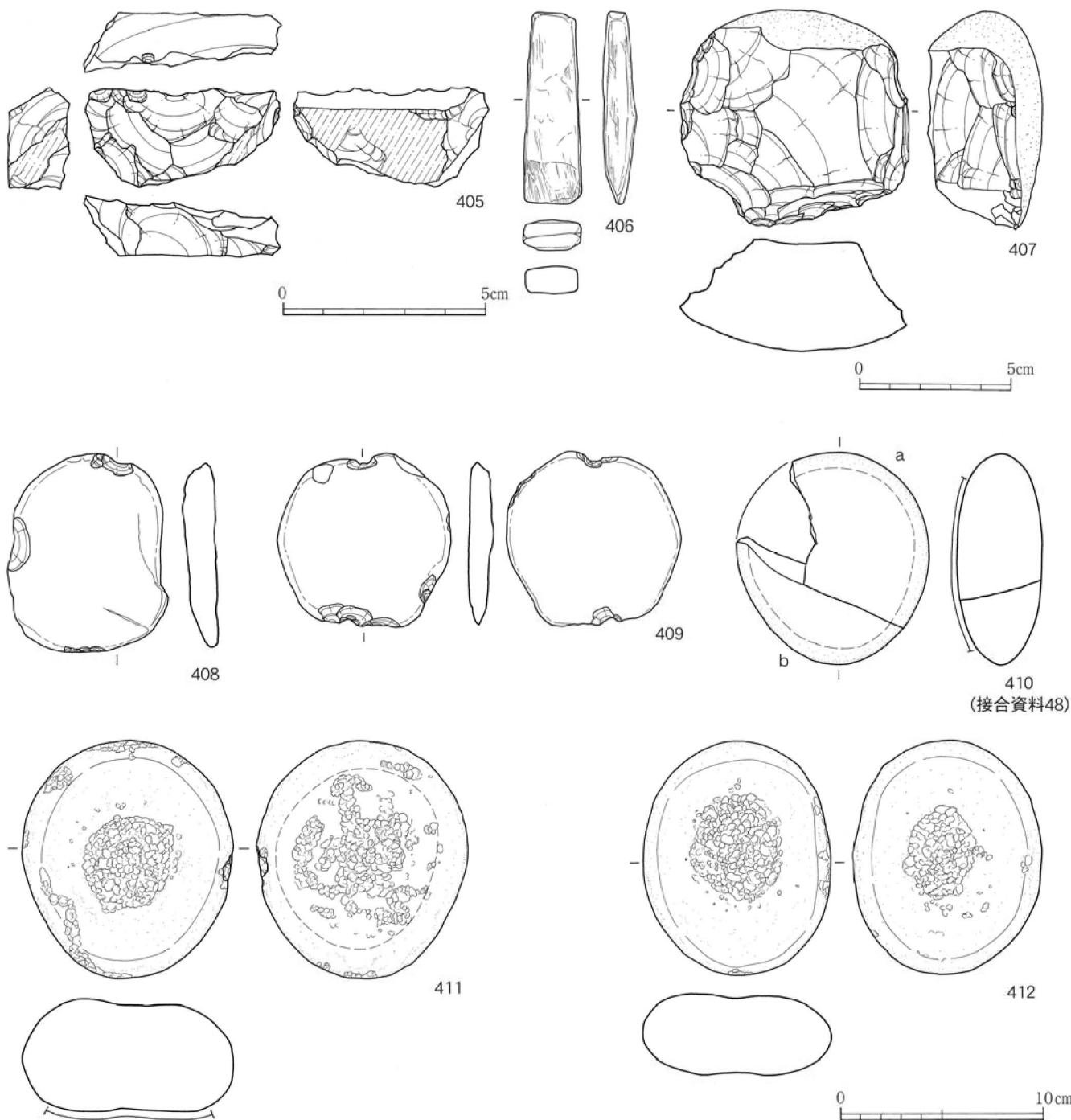
387は刻目突帯文土器である。緩やかに膨らむ胴部片で、最大径がくる部分に突帯が巡り、竹管状の施文具より、斜位下方より刺突することにより、刻目を作り出している。突帯より上方はやや内傾しながら立ち上がり、おそらく口縁部、もしくは口縁下にも突帯が巡ると考えられる。器面にはナデ調整が行われ、内面には指頭痕が認められる。

388は粗製の浅鉢と考えられる。ボウル状を呈し、外面には粗い条痕調整とナデ調整が行われている。

条痕は主に胴部から底面近くまで縦位に施されているが、底部付近から底部にかけては斜位に調整が行われている。工具は貝殻によるものも認められるが、不明のものも認められ、複数の工具が使用されている可能性が考えられる。内面はナデ調整が施されている。



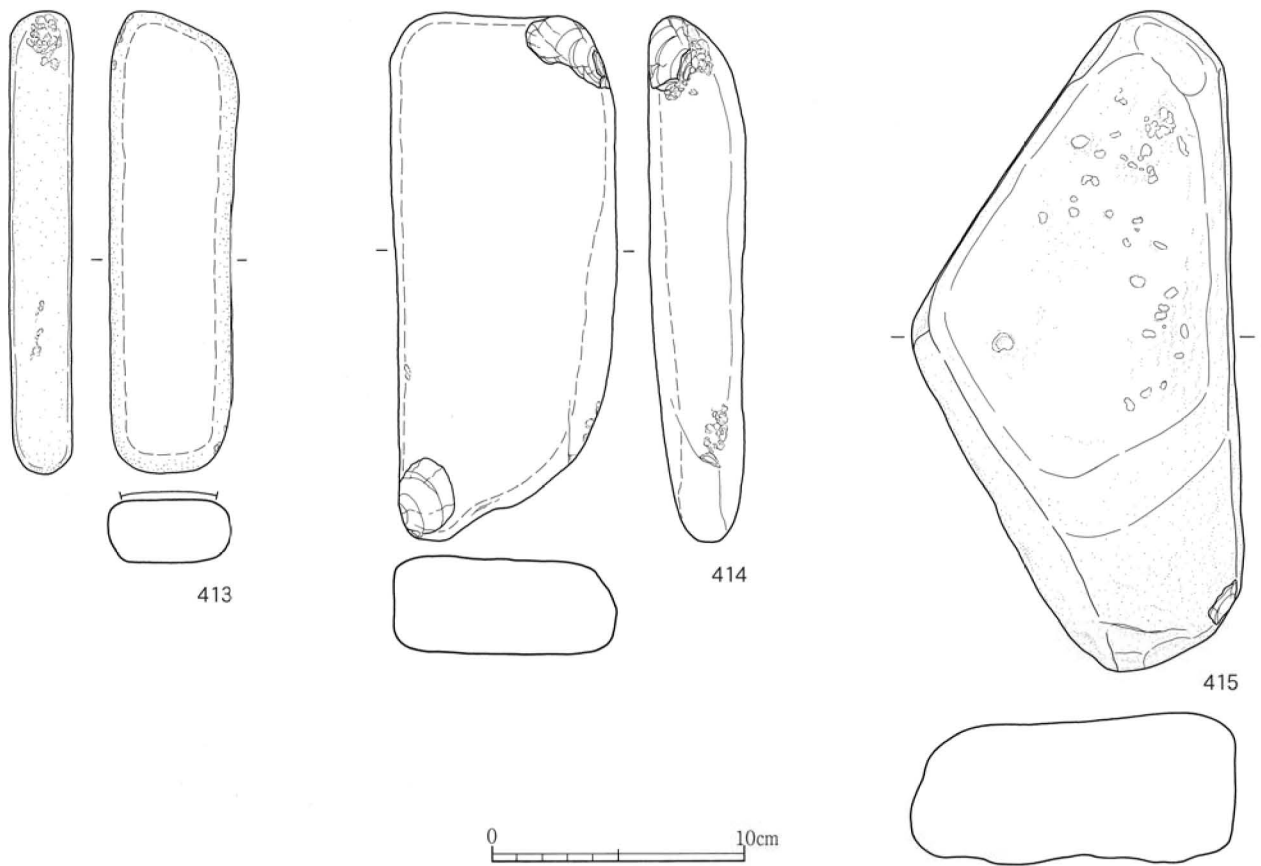
第96图 C·D区出土石器实测图44 (S=2/3)



第97図 C・D区出土石器実測図45 (405:S=2/3、406・407:S=1/2、408~412:S=1/3)

## 2. 石器 (第94図・第96図~第98図、第21表)

縄文時代の石器は、157点出土しており、その内訳は石鏃12点、尖頭器2点、スクレイパー3点、二次加工剥片7点、剥片109点、石核10点、局部磨製石斧1点、礫器1点、石錘3点、凹石3点、磨石3点、砥石2点、台石1点である。利用石材はチャートが最も多く69点が確認されており、次に姫島産黒曜石62点、砂岩11点、石英5点、流紋岩3点、ホルンフェルス2点、頁岩2点、珪岩1点、千枚岩1点、凝灰岩1点である。また、D1区では2箇所でもとまりが認められる。



第98図 C・D区出土石器実測図46 (S = 1 / 3)

389～396は石鏃である。そのうち、389～392の基部は平基を呈する。389・391・392は二等辺三角形から、元の形状は他と同様、二等辺三角形を呈していたものと考えられる。また、393～395は基部に浅い抉りを有し、脚端が尖る。なかでも393は長さ3.48cmと大型で比較的丁寧な作りである。396は基部にV字状のやや深い抉りを有し、脚端が尖る。392・396は姫島産黒曜石製、394は頁岩製で他はチャート製である。

397・398は尖頭器である。そのうち、397は白色を呈する頁岩製である。加工は両面から行われているが、素材自体に厚みがあるためか、側縁は左右不対称となっている。398はチャート製で、薄手で両面から加工を行っている。断面は凸レンズもしくは菱形を呈する。側縁は左側縁が直線的なのに対し、右側縁は外湾しており、左右不対称である。また先端部と比べ、基部側はやや厚みがある。

399・400は小型のスクレイパーである。どちらもチャート製である。そのうち399は打面側を中心に加工が行われ、刃部を作出している。一部表面からの加工が認められるが、主に主要剥離面側からの加工が行われている。400は表裏両面から加工が行われている。を呈するのに対し、390は五角形を呈するが、先端部右側はリダクションによるものと考えられことから401・402は二次加工剥片である。接合資料47は二次加工剥片同士(403・404)の接合例である。そのうち404は打面を欠損しているが、どちらも同一方向から剥離が行われている。姫島産黒曜石製。

405は石核である。チャート製で、上面を打面に設定し、打点を左右にずらしながら、小型で幅広の剥片を剥出している。

406は磨製石斧で、S Z 2内で出土した。砂岩製で撥状を呈し、断面が長方形を呈する。主に側面や刃部に研磨が施されている。

407は礫器である。ホルンフェルス製で、厚みのある礫を分割後、一方向から調整を行い、弧状に刃部を作り上げている。

408・409は石錘である。そのうち408はで長軸側を一方向から加工を行い、紐掛部を作り出すのに対し、409は両面から加工を行い、紐掛部を作出している。408は千枚岩製、409は砂岩製である。

410は磨石である。砂岩製で、片面のみ磨面が認められる。

411・412は凹石である。いずれも砂岩製で、両面に敲打痕による凹部が認められ、特に412の凹部については顕著である。なお411は上下端に敲打痕が認められる。

413・414は砂岩製の砥石である。そのうち413は表面に、414は表面及び右側面の二面に磨面が認められ、端部には敲打痕が認められる。

415は台石である。断面台形状の砂岩礫の平坦面に部分的に敲打痕が認められる。

遺物番号	文化層	層位	注記番号	器種	調査区	グリッド	ブロック	石材	接合番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
132	I	VII	C4 VII-710	剥片	C4	L・9	—	流紋岩I	—	3.97	4.55	0.70	6.9	
133	I	VII	C4 VII-711	剥片	C4	L・9	—	流紋岩I	—	2.75	4.47	0.95	6.4	
134	I	VII	C4 VII-712	剥片	C4	L・9	—	流紋岩I	—	2.40	3.90	2.40	5.2	
135	I	VII	D1 VII-483	石核	D1	E・12	—	流紋岩V	—	4.80	2.65	6.35	51.0	
136	II	IV	C1 SI3-1	エンドスクレイパー	C1	D・4	—	流紋岩I	—	5.30	4.55	2.20	52.3	
137	II	IV	C2-534①	サイドスクレイパー	C2	G・8	—	頁岩II	—	4.90	3.50	1.00	15.1	
138	II	IV	C2-598	ナイフ形石器	C2	H・7	—	流紋岩I	—	4.80	2.20	1.10	7.3	
139	II	IV	D1 IV-348	ナイフ形石器	D1	B・10	—	流紋岩I	—	4.70	2.50	1.75	10.9	
140	II	IV	C1-11①	ナイフ形石器	C1	C・8	—	流紋岩I	—	3.50	1.55	0.70	3.2	
141	II	III	D1 III-264	ナイフ形石器	D1	C・10	—	流紋岩I	—	3.45	2.50	1.00	9.0	
142	II	IV	C1-344	ナイフ形石器	C1	G・5	2	流紋岩I	—	4.15	3.60	0.75	7.2	
143	II	IV	C1-405	ナイフ形石器	C1	C・3	—	流紋岩I	—	5.00	3.05	1.45	22.4	
144	II	IV	C2-542①	ナイフ形石器	C2	H・6	1	流紋岩I	—	7.80	3.30	1.60	42.7	
145	II	IV	D1 IV'-73	ナイフ形石器	D1	G・12	—	流紋岩I	—	7.50	2.80	1.60	29.9	
146	II	IV	D1 IV-303	剥片尖頭器	D1	E・11	—	流紋岩I	—	6.70	2.90	1.40	23.6	
147	II	IV	C3 IV-645	剥片尖頭器	C3	J・9	—	流紋岩I	—	7.80	4.10	1.40	34.3	
148	II	IV	D1 IV-318	剥片尖頭器	D1	D・10	—	流紋岩I	—	6.90	2.30	0.90	13.9	
149	II	IV	C1-378①+C1-394	角錐状石器	C1	G・4	—	流紋岩I	1	11.10	2.30	1.80	36.1	
150	II	—	D1 SG1-221	角錐状石器	D1	—	—	流紋岩I	—	7.65	1.80	1.50	19.1	
151	II	IV	D1 IV-493①	角錐状石器	D1	F・10	5	流紋岩I	—	7.40	1.50	1.25	13.9	
152	II	IV	D1-26	角錐状石器	D1	C・8	—	流紋岩I	—	8.00	2.30	1.35	23.6	
153	II	IV	C1-23	角錐状石器	C1	D・8	—	流紋岩I	—	8.00	2.80	2.30	30.3	
154	II	III	D1 III-243	エンドスクレイパー	D1	D・9	—	流紋岩I	—	5.75	3.15	1.55	29.6	
155	II	IV	D1 IV-385	エンドスクレイパー	D1	D・9	—	流紋岩I	—	5.10	3.60	1.10	15.0	
156	II	V	D1 V'-89	エンドスクレイパー	D1	G・12	—	流紋岩I	—	6.95	5.70	2.40	95.4	
157	II	IV	C1-388	エンドスクレイパー	C1	E・7	—	流紋岩I	—	8.00	8.90	2.40	151.0	
158	II	IV	C2-536	エンドスクレイパー	C2	H・6	1	流紋岩I	—	7.10	3.10	1.70	33.6	
159	II	IV	C2-537	サイドスクレイパー	C2	H・6	1	流紋岩I	—	8.50	3.90	1.65	46.8	
160	II	IV	D1 IV-457	サイドスクレイパー	D1	D・8	—	流紋岩I	—	9.25	4.30	2.10	82.4	
161	II	V	D1 V-30	サイドスクレイパー	D1	E・12	—	流紋岩I	—	3.35	2.45	0.80	7.3	

第14表 C・D区旧石器時代石器計測表1

遺物番号	文化層	層位	注記番号	器種	調査区	グリッド	ブロック	石 材	接合 番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
162	II	IV	C1	石 錐	C 1	—	—	流紋岩 I	—	4.20	3.40	1.40	14.9	
163	II	IV	C1-16	彫 器	C 1	C・7	—	流紋岩 I	—	7.20	3.20	1.30	31.1	
164	II	IV	D1 IV-386	二次加工剥片	D 1	D・9	—	流紋岩 I	—	7.90	3.35	1.50	28.5	
165	II	IV	C1-155	二次加工剥片	C 1	D・4	—	流紋岩 I	—	5.80	3.50	2.00	34.1	
166	II	IV	C1-207	二次加工剥片	C 1	E・5	—	流紋岩 I	—	5.75	2.50	1.50	15.0	
167	II	—	D1 SG1-1	剥 片	D 1	—	—	流紋岩 I	—	10.65	2.85	1.20	32.8	
168	II	IV	D1 IV-360	剥 片	D 1	C・10	—	流紋岩 I	—	10.20	3.50	1.50	43.5	
169	II	IV	C1-15+ C1-718①	剥 片	C 1	C・8	—	流紋岩 I	2	12.15	2.55	1.25	27.5	
170	II	III	D1 III-125	剥 片	D 1	C・10	—	流紋岩 I	—	4.15	2.70	10.50	9.1	
171	II	IV	D1 IV-512	石 核	D 1	G・11	—	流紋岩 I	—	4.00	6.65	2.30	61.7	
172	II	III	C3 III-691	石 核	C 3	J・9	—	流紋岩 I	—	3.70	1.65	2.40	13.5	
173	II	IV	D1 IV-33	剥 片	D 1	E・12	—	流紋岩 I	3	3.70	5.20	1.30	13.5	
174	II	IV	D1 IV-36	石 核	D 1	E・12	—	流紋岩 I	3	3.90	6.00	3.90	84.2	
175	II	IV	C1-800	剥 片	C 1	D・4	—	流紋岩 I	4	11.00	6.30	2.70	1,680.0	
176	II	IV	C1-801	石 核	C 1	D・4	—	流紋岩 I	4	7.70	4.80	2.50	93.1	
177	II	—	D1 SG1-263	ナイフ形石器	D 1	—	—	流紋岩 II	—	7.25	3.10	1.50	26.7	
178	II	III	C2 III-644	ナイフ形石器	C 2	I・6	1	流紋岩 II	—	4.20	2.80	1.10	11.5	
179	II	IV	C4 IV-706	ナイフ形石器	C 4	L・9	—	流紋岩 II	—	6.10	2.70	1.50	28.3	
180	II	IV	C2 IV-639	ナイフ形石器	C 2	I・6	1	流紋岩 II	—	6.00	2.30	1.10	9.4	
181	II	IV	C1-224	台形石器	C 1	F・5	2	流紋岩 II	—	3.50	2.55	0.90	6.1	
182	II	IV	C1-63	剥片尖頭器	C 1	D・7	—	流紋岩 II	—	9.90	3.10	1.40	35.6	
183	II	V	C2 V-607	エンドスクレイパー	C 2	H・8	—	流紋岩 II	—	6.30	5.50	3.00	110.1	
184	II	IV	D1 IV-392	エンドスクレイパー	D 1	D・9	—	流紋岩 II	—	6.10	5.10	2.40	65.4	
185	II	V	C2 V-605	エンドスクレイパー	C 2	H・8	—	流紋岩 II	—	6.70	4.90	2.10	60.5	
186	II	IV	C1-212	エンドスクレイパー	C 1	B・6	—	流紋岩 II	—	6.20	4.70	0.95	25.9	
187	II	IV	C1-69	サイドスクレイパー	C 1	D・7	—	流紋岩 II	—	5.35	2.80	0.98	15.7	
188	II	IV	C1-185	サイドスクレイパー	C 1	E・8	—	流紋岩 II	—	11.15	2.65	1.30	24.0	
189	II	III	D1 III-271	石 錐	D 1	C・9	—	流紋岩 II	—	4.50	3.70	1.30	15.3	
190	II	III	D1 III-160	微細剥離を有する剥片	C 1	C・9	—	流紋岩 II	—	4.50	3.15	1.45	17.4	
191	II	IV	C1-195③	微細剥離を有する剥片	C 3	E・5	3	流紋岩 II	—	6.25	4.50	1.85	34.7	
192	II	IV	C3 IV-652	微細剥離を有する剥片	C 3	J・9	—	流紋岩 II	—	8.35	3.60	1.40	57.8	
193	II	IV	C1-199	微細剥離を有する剥片	C 1	E・5	3	流紋岩 II	—	4.95	4.20	1.80	20.6	
194	II	IV	D1 IV-465	剥 片	C 1	D・8	—	流紋岩 II	—	4.10	4.25	1.40	25.3	
195	II	IV	C1-330	剥 片	C 1	H・6	—	流紋岩 II	—	7.90	4.30	1.30	35.5	
196	II	IV	C1-208②	石 核	C 1	E・5	—	流紋岩 II	—	5.40	5.00	4.70	94.9	
197	II	IV	D1 IV-292	石 核	D 1	E・9	—	流紋岩 II	—	6.00	5.30	3.00	88.4	
198	II	IV	C1-205	石 核	C 1	E・5	—	流紋岩 II	—	6.50	6.25	3.30	145.0	
199	II	IV	D1 IV-80	石 核	D 1	G・12	—	流紋岩 II	—	4.60	3.80		55.4	
200	II	IV	D1 IV-31	石 核	D 1	E・12	—	流紋岩 II	—	5.30	5.00	4.70	114.9	
201	II	IV	C1-299①	石 核	C 1	F・7	—	流紋岩 II	—	4.55	6.25	2.70	56.4	
202	II	IV	C1-167	剥 片	C 1	C・6	—	流紋岩 II	5	4.10	3.40	1.13	14.9	
203	II	IV	C1-198	石 核	C 1	E・5	3	流紋岩 II	5	8.50	7.40	4.90	301.0	
204	II	IV	C1-411①	剥 片	C 1	E・5	3	流紋岩 II	6	5.30	5.30	1.40	35.5	
205	II	IV	C1-197	剥 片	C 1	E・5	3	流紋岩 II	6	9.80	8.50	2.70	204.0	
206	II	IV	C1-200①	剥 片	C 1	E・5	3	流紋岩 II	6	6.90	5.10	2.40	74.4	

第15表 C・D区旧石器時代石器計測表2



遺物番号	文化層	層位	注記番号	器種	調査区	グリッド	ブロック	石材	接合番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
207	II	IV	C1-138	剥片	C1	C・4	—	流紋岩II	6	2.80	4.60	2.10	11.5	
208	II	IV	C1-414	剥片	C1	D・5	3	流紋岩II	6	3.60	4.40	1.90	20.7	
209	II	IV	C1-195④	剥片	C1	E・5	3	流紋岩II	6	3.60	3.80	2.00	21.2	
210	II	IV	D1 IV-411	石核	D1	D・9	—	流紋岩II	6	6.30	4.10	2.90	66.5	
211	II	IV	C1-253	剥片	C1	F・5	2	流紋岩II	7	3.60	4.70	1.00	14.2	
212	II	IV	C1-261	石核	C1	F・5	2	流紋岩II	7	6.90	6.80	2.30	92.2	
213	II	IV	C3 IV-646	剥片	C3	J・9	—	流紋岩II	8	3.30	4.90	2.80	47.5	
214	II	IV	C2-474	二次加工剥片	C2	H・8	—	流紋岩II	8	5.30	2.40	1.00	9.4	
215	II	IV	C1-201	剥片	C1	E・5	3	流紋岩II	8	9.70	7.00	3.10	161.4	
216	II	IV	C1-246②	剥片	C1	F・5	2	流紋岩II	9	2.30	2.80	0.70	4.7	
217	II	IV	C1-254	石核	C1	F・5	2	流紋岩II	9	4.25	7.60	2.85	80.2	
218	II	IV	D1 IV-449	剥片	D1	D・10	6	流紋岩II	10	3.60	4.70	1.70	10.8	
219	II	IV	D1 IV-450	石核	D1	D・10	6	流紋岩II	10	3.60	5.00	3.80	43.0	
220	II	IV	D1 IV-39	ナイフ形石器	D1	E・12	—	流紋岩III	—	4.70	2.80	1.30	11.1	
221	II	IV	C1-53	石核	C1	D・7	—	流紋岩III	—	3.70	6.50	4.50	105.2	
222	II	IV	D1 IV-42	石核	D1	E・11	—	流紋岩III	—	5.20	6.60	2.60	87.7	
223	II	IV	C1-105	剥片	C1	D・7	—	流紋岩III	11	5.50	6.00	1.10	19.6	
224	II	IV	C1-389	石核	C1	E・7	—	流紋岩III	11	4.20	6.10	6.10	127.2	
225	II	IV	C1-381②	剥片	C1	D・7	—	流紋岩III	12	7.20	3.80	1.20	36.5	
226	II	IV	C1-393①	剥片	C1	F・6	—	流紋岩III	12	11.80	4.40	2.10	92.9	
227	II	IV	D1 IV-447	ナイフ形石器	D1	D・10	6	流紋岩IV	—	4.10	1.90	1.20	6.9	
228	II	IV	D1 IV-400	剥片尖頭器	D1	D・9	—	流紋岩IV	—	9.20	4.40	1.20	33.4	
229	II	IV	C2-582②	剥片尖頭器	C2	I・6	1	流紋岩IV	—	6.80	1.80	3.40	20.8	
230	II	IV	D1 SG1-324	剥片尖頭器	D1	—	—	流紋岩IV	—	7.65	1.30	4.00	34.6	
231	II	IV	D1 IV-357	サイドスクレイパー	D1	C・10	—	流紋岩IV	—	7.30	4.40	2.20	70.8	
232	II	IV	D1 IV-372	石核	D1	C・9	—	流紋岩IV	—	3.90	4.50	4.20	82.9	
233	II	IV	C1-64① +C1-62	石核	C1	D・7	—	流紋岩IV	13	9.40	8.00	2.60	225.0	
234	II	IV	C1-241②	剥片	C1	F・5	2	流紋岩IV	14	4.80	3.70	1.20	14.3	
235	II	IV	C1-257②	剥片	C1	F・5	2	流紋岩IV	14	4.00	4.10	0.70	11.6	
236	II	IV	C1-240	剥片	C1	F・5	2	流紋岩IV	15	3.60	4.70	1.50	23.1	
237	II	IV	C1-226	サイドスクレイパー	C1	F・5	2	流紋岩IV	15	5.40	4.50	2.00	54.4	
238	II	IV	C1-242	剥片	C1	F・5	2	流紋岩IV	15	5.50	3.50	1.00	18.5	
239	II	IV	C1-239	剥片	C1	F・5	2	流紋岩IV	15	4.70	3.90	2.00	25.8	
240	II	IV	C1-243+ C1-256②	剥片	C1	F・5	2	流紋岩IV	16	5.00	5.10	2.00	33.7	
241	II	IV	C1-255①②	剥片	C1	F・5	2	流紋岩IV	16	4.50	2.90	0.90	6.8	
242	II	IV	C1-432	石核	C1	F・5	2	流紋岩IV	16	3.70	5.20	0.20	90.2	
243	II	IV	C2-545	剥片	C2	I・6	1	流紋岩IV	17	4.65	3.65	1.05	14.5	
244	II	IV	C2-592	石核	C2	H・6	1	流紋岩IV	17	4.50	7.40	4.50	122.6	
245	II	IV	D1 IV-322	石核	D1	D・11	—	流紋岩IV	18	9.00	9.40	3.50	474.8	
246	II	IV	D1 IV-323	剥片	D1	D・11	—	流紋岩IV	18	3.50	3.10	1.20	9.3	
247	II	IV	C1-420	剥片	C1	F・5	2	流紋岩IV	19	2.30	2.50	1.00	4.7	
248	II	IV	C1-422	石核	C1	F・5	2	流紋岩IV	19	4.50	5.60	4.70	122.3	
249	II	IV	D1 IV-326	エンドスクレイパー	D1	D・11	—	流紋岩IV	20	5.20	5.20	2.20	56.8	
250	II	IV	D1 IV-327	剥片	D1	D・11	—	流紋岩IV	20	4.90	4.90	2.30	42.7	

第16表 C・D区旧石器時代石器計測表3

遺物番号	文化層	層位	注記番号	器 種	調査区	グリッド	ブロック	石 材	接合 番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
251	II	IV	D1 IV-142	剥 片	D 1	C・10	—	流紋岩IV	21	5.10	4.50	2.50	41.6	
252	II	IV	D1 IV-364	石 核	D 1	C・10	—	流紋岩IV	21	5.90	6.30	4.30	108.6	
253	II	III	D1 III-126	ナイフ形石器	D 1	C・10	—	流紋岩V	—	6.30	1.65	0.90	9.0	
254	II	IV	D1 IV' -101	ナイフ形石器	D 1	G・11	—	流紋岩V	—	4.50	1.55	0.65	2.9	
255	II	IV	D1 IV-376	ナイフ形石器	D 1	C・9	—	流紋岩V	—	4.30	2.05	0.95	7.3	
256	II	IV	C2-507	ナイフ形石器	C 2	I・7	—	流紋岩V	—	4.10	2.80	0.85	9.3	
257	II	IV	C1-251	ナイフ形石器	C 1	F・5	2	流紋岩V	—	3.90	2.90	0.95	8.7	
258+259	II	IV	D1 IV-391+ D1 IV-373	ナイフ形石器	D 1	C・9	—	流紋岩V	22	10.80	5.00	2.50	91.4	
259	II	IV	D1 IV-373	エンドスクレイパー	D 1	C・9	—	流紋岩V	22	5.10	3.90	2.30	30.6	
260	II	IV	C1-270	ナイフ形石器	C 1	F・4	2	流紋岩V	—	7.70	2.70	1.70	18.8	
261	II	IV	C2-513	剥片尖頭器	C 2	I・7	—	流紋岩V	—	5.10	2.50	1.10	11.6	
262	II	IV	C1-121	剥片尖頭器	C 1	E・7	—	流紋岩V	—	6.10	2.55	1.25	10.9	
263	II	IV	C1-311	剥片尖頭器	C 1	F・6	—	流紋岩V	—	5.60	2.10	0.90	7.9	
264	II	IV	C1-8	剥片尖頭器	C 1	C・8	—	流紋岩V	—	9.90	3.00	1.30	32.1	
265	II	IV	C1-71①	剥片尖頭器	C 1	D・7	—	流紋岩V	—	8.70	2.70	1.40	30.2	
266	II	IV	C1-43	角錐状石器	C 1	D・7	—	流紋岩V	—	3.55	1.20	1.35	5.6	
267	II	IV	C1 f・6	角錐状石器	C 1	F・6	—	流紋岩V	—	6.75	1.70	2.20	19.1	
268	II	IV	C1-49	角錐状石器	C 1	D・7	—	流紋岩V	—	7.10	2.20	1.85	25.1	
269	II	—	D1 SG1-T2	ナイフ形石器	D 1	—	—	流紋岩V	—	8.75	2.35	1.30	25.9	
270	II	IV	D1 IV-384	角錐状石器	D 1	D・9	—	流紋岩V	—	8.80	3.10	1.70	40.8	
271	II	IV	C1-7①	エンドスクレイパー	C 1	C・8	—	流紋岩V	—	4.85	3.80	1.35	23.1	
272	II	IV	C3 IV-650	エンドスクレイパー	C 3	J・9	—	流紋岩V	—	5.20	5.80	2.00	64.3	
273	II	IV	C2-466+ C2-464	エンドスクレイパー	C 2	H・8	—	流紋岩V	23	5.90	6.90	1.35	42.4	
274	II	IV	C3 IV-690	エンドスクレイパー	C 3	J・9	—	流紋岩V	—	5.50	3.70	1.20	21.8	
275	II	IV	C1-302	エンドスクレイパー	C 1	E・7	4	流紋岩V	—	5.80	4.10	1.75	41.2	
276	II	V	D1 V-38	エンドスクレイパー	D 1	E・12	—	流紋岩V	—	8.45	5.25	1.80	83.6	
277	II	IV	C1-380	エンドスクレイパー	C 1	B・7	—	流紋岩V	—	7.25	3.75	2.25	48.6	
278	II	IV	D1 IV-398	エンドスクレイパー	D 1	D・9	—	流紋岩V	—	8.00	4.90	1.90	57.0	
279	II	IV	C1-291	サイドスクレイパー	C 1	E・7	4	流紋岩V	—	10.30	3.80	1.50	66.7	
280	II	IV	D1-25	サイドスクレイパー	D 1	C・8	—	流紋岩V	—	8.30	4.70	1.40	58.0	
281	II	IV	C1 IV-100①	石 核	D 1	G・11	—	流紋岩V	—	4.20	4.00	3.50	83.2	
282	II	IV	C2-560	石 核	C 2	I・7	1	流紋岩V	—	17.75	12.35	8.40	2,395.0	
283	II	IV	C2 IV-617	礫 器	C 2	J・6	—	流紋岩V	—	8.40	8.85	5.20	362.9	
284	II	IV	D1 IV-515	敲 石	D 1	G・11	—	流紋岩V	—	7.30	4.90	4.10	208.5	
285	II	IV	D1 IV-367	剥 片	D 1	C・9	—	流紋岩V	24	5.40	3.60	2.20	33.0	
286	II	III	D1 III-266	石 核	D 1	C・9	—	流紋岩V	24	7.70	6.90	4.80	245.0	
287	II	IV	C2-601+ C2-502	剥 片	C 2	H・7 H・8	—	流紋岩V	25	4.50	5.90	1.60	52.5	
288	II	IV	C2-601	石 核	C 2	G・9	—	流紋岩V	25	5.90	6.10	2.50	66.6	
289	II	IV	D1	剥 片	D 1	—	—	流紋岩V	26	4.50	1.55	0.85	3.5	
290	II	IV	D1 IV-416	石 核	D 1	D・10	—	流紋岩V	26	3.30	6.05	3.80	62.1	
291	II	IV	D1 IV-497①	剥 片	D 1	F・10	5	流紋岩V	27	3.20	5.80	1.50	25.7	
292	II	IV	D1 IV-508	剥 片	D 1	F・10	5	流紋岩V	27	3.20	5.20	1.50	21.8	
293	II	IV	D1 IV-509②	剥 片	D 1	F・10	5	流紋岩V	28	2.60	2.60	0.90	5.1	
294	II	IV	D1 IV-506	剥 片	D 1	F・10	5	流紋岩V	28	6.20	4.60	1.50	43.7	

第17表 C・D区旧石器時代石器計測表4

遺物番号	文化層	層位	注記番号	器種	調査区	グリッド	ブロック	石材	接合番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
295	II	IV	C1-230	剥片	C1	F・5	2	流紋岩V	29	3.90	4.70	1.30	19.8	
296	II	IV	C1-232①	剥片	C1	F・5	2	流紋岩V	29	4.00	3.90	1.70	24.2	
297	II	IV	C1-262	石核	C1	F・5	2	流紋岩V	29	4.10	4.90	3.40	81.3	
298	II	IV	C1-234②	剥片	C1	F・5	2	流紋岩V	30	1.80	2.20	3.50	1.7	
299	II	IV	C1-228	剥片	C1	F・5	2	流紋岩V	30	4.70	3.10	1.00	14.8	
300	II	IV	C1-227	剥片	C1	F・5	2	流紋岩V	30	4.70	5.80	2.10	37.8	
301	II	IV	C1-235	剥片	C1	F・5	2	流紋岩V	30	3.10	3.00	1.00	5.7	
302	II	IV	C1-233	石核	C1	F・5	2	流紋岩V	30	5.80	4.50	5.30	187.9	
303	II	IV	C1-221	剥片	C1	F・5	2	流紋岩V	31	2.70	3.40	0.90	8.9	
304	II	IV	C1-343	石核	C1	G・5	—	流紋岩V	31	3.70	3.90	3.40	44.3	
305	II	IV	C2-590	ナイフ形石器	C2	J・6	—	ホルンフェルス1	—	5.90	2.90	1.60	16.7	
306	II	IV	C1-308	ナイフ形石器	C1	F・6	—	ホルンフェルス1	—	6.80	2.30	1.00	14.8	
307	II	IV	C1-294	角錐状石器	C1	E・7	4	ホルンフェルス1	—	8.80	3.30	3.00	43.7	
308	II	IV	C3 IV-662	エンドスクレイパー	C3	J・8	—	ホルンフェルス1	—	5.00	3.90	1.00	21.8	
309	II	III	C3 III-687	二次加工剥片	C3	J・9	—	ホルンフェルス1	—	8.10	3.50	1.50	30.5	
310	II	IV	C1-733	剥片	C1	E・7	4	ホルンフェルス1	32	4.30	3.60	1.10	11.0	
311	II	IV	C1-286	剥片	C1	E・7	4	ホルンフェルス1	32	3.80	5.20	1.30	10.5	
312	II	III	D1 III-235	微細剥離を有する剥片	D1	C・10	—	ホルンフェルス1	33	7.20	3.75	1.25	33.5	
313	II	IV	D1 IV-433	剥片	D1	D・10	6	ホルンフェルス1	33	5.83	4.30	1.30	25.2	
314	II	IV	D1 IV-429	剥片	D1	D・10	6	ホルンフェルス1	33	3.05	3.15	1.35	7.2	
315	II	IV	D1 IV-435	剥片	D1	D・10	6	ホルンフェルス1	33	6.30	3.80	1.70	32.9	
316	II	IV	D1 IV-434	石核	D1	D・10	6	ホルンフェルス1	33	5.00	6.65	5.65	183.8	
317	II	IV	D1 IV-432①	微細剥離を有する剥片	D1	D・10	6	ホルンフェルス1	34	5.30	6.00	1.80	61.5	
318	II	IV	D1 IV-439	石核	D1	D・10	6	ホルンフェルス1	34	5.60	5.70	4.30	121.3	
319	II	IV	D1 IV-437	石核	D1	D・10	6	ホルンフェルス1	34	5.80	7.20	4.30	187.2	
320	II	IV	C1-276	剥片	C1	E・7	4	ホルンフェルス1	35	5.70	3.80	1.80	32.7	
321	II	IV	C1-301	石核	C1	F・7	4	ホルンフェルス1	35	2.80	6.20	4.30	69.9	
322	II	IV	D1 IV-428	剥片	D1	D・10	6	ホルンフェルス1	36	5.50	5.10	1.70	29.2	
323	II	IV	D1 IV-421	剥片	D1	D・10	6	ホルンフェルス1	36	5.30	5.80	1.50	34.0	
324	II	IV	D1 IV-422①	剥片	D1	D・10	6	ホルンフェルス1	36	5.50	5.00	1.80	55.7	
325	II	IV	D1-28	ナイフ形石器	D1	C・8	—	ホルンフェルス2	—	5.10	2.90	1.30	15.1	
326	II	IV	D1①	剥片尖頭器	D1	—	—	ホルンフェルス2	—	8.50	3.80	0.20	30.4	
327	II	IV	D1 IV-302+ D1 IV-299	剥片尖頭器	D1	E・10	—	ホルンフェルス2	37	7.60	4.90	1.40	36.9	
328	II	IV	C1-409	剥片尖頭器	C1	C・5	—	ホルンフェルス2	—	7.70	2.50	0.90	14.0	
329	II	IV	C1-278	角錐状石器	C1	E・7	4	ホルンフェルス2	—	10.05	2.40	1.75	34.5	
330	II	IV	D1 IV-516①	角錐状石器	D1	C・9	—	ホルンフェルス2	—	7.40	1.15	1.60	31.7	
331	II	IV	C1-383+ C1-113①	角錐状石器	C1	C・7 D・7	—	ホルンフェルス2	38	14.05	4.25	3.25	169.0	
332	II	IV	C1-281②+ C1-283	角錐状石器	C1	E・7	4	ホルンフェルス2	39	16.80	4.30	3.60	168.4	
333	II	IV	C1-19	彫器	C1	D・8	—	ホルンフェルス2	—	7.05	3.10	1.50	28.5	
334	II	IV	C2-553	剥片	C2	I・6	1	ホルンフェルス2	40	5.40	5.30	2.10	56.4	
335	II	IV	C2-542③	剥片	C2	H・6	—	ホルンフェルス2	40	4.60	2.70	1.20	12.4	
336	II	IV	D1 g・12	エンドスクレイパー	D1	G・12	—	頁岩I	—	4.20	2.50	1.30	12.5	
337	II	III	D1 III-175	エンドスクレイパー	D1	C・9	—	頁岩I	—	5.70	2.70	1.20	19.2	
338	II	IV	C2 h 7	石核	C2	H・7	—	頁岩I	—	5.00	6.20	2.00	66.5	

第18表 C・D区旧石器時代石器計測表5